

博士学位請求論文

指導教員 メドロック皆尾麻弥 准教授

論文題目

ヘミングウェイの頭部外傷とテキストとの関係性の研究

—氷山理論・受け継がれた遺伝—

佛教大学大学院
文学研究科文学専攻

坂田 雅和

目次

略記	4
年譜	5
序章	15
第1章 「雨の中の猫」、「十人のインディアン」、「殺し屋」、「世の光」における 「冰山理論」形成	
1.1 「猫」の特定化	30
1.2 「妻」の望むもの	33
1.3 透けて見える不安定さ	36
1.4 「猫」が示すもの	38
1.5 仕掛けられた「混乱」と「反復」	40
1.6 作品間における「冰山理論」	46
第2章 伝記を辿る「病気」、「事故（怪我）」の詳細な軌跡 —ヘミングウェイの生誕から自殺まで—	
2.1 誕生から10代（1899—1919）両親の家系・第一次世界大戦参戦へ	51
2.1.1 家系	
2.1.2 10代	
2.2 20代から40代（1919—1949）「病気」と「事故（怪我）」のデパート、 そして「頭部外傷」	55
2.2.1 20代	
2.2.2 30代	
2.2.3 40代	
2.3 50代、60代（1949—1961）アフリカ旅行の果ての制御不能な身体	59
2.3.1 50代	
2.3.2 60代、そして自殺	
2.4 繋がる負の遺産	63

第3章	ヘミングウェイの受け継いだ遺伝とトラウマ—ヘミングウェイの遺伝疾患	
3.1	隠蔽された暴力	65
3.2	受け継がれたもの	69
3.3	「におい」が示すもの	74
第4章	「大きな二つの心臓のある川」、「異国にて」、「身を横たえて」、 そして「誰も知らない」にみる時制	
4.1	時制から見るヘミングウェイの解かれたところ	78
4.2	2人のニック	82
第5章	死に至る脳の変容—慢性外傷性脳症	
5.1	作品に表れる変容	85
5.2	慢性外傷性脳症	87
5.3	「格闘家」のアド・フランシス	89
5.4	『日はまた昇る』に表れる「奇妙な感覚」	93
5.5	「誰も知らない」に表れる恐怖の it と them	95
結 論		100
註		103
References		113

略 記

- ARIT *Across the River and Into the Trees*. 1950. New York: Scribner's, 1996.
- CSS *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigia Edition*. 1987.
New York: Scribner's, 1998.
- DIA *Death in the Afternoon*. 1932. New York: Scribner's, 2003.
- FTA *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner's, 1969.
- FWBT *For Whom the Bell Tolls*. 1940. New York: Scribner's, 1968.
- GE *The Garden of Eden*. New York: Scribner's, 1986.
- NAS *The Nick Adams Stories*. Ed. Philip Young. New York: Charles Scribner's, 1972.
- OT *In Our Time*. 1925. New York: Scribner's, 2003.
- SAR *The Sun Also Rises*. 1926. New York: Scribner's, 1954.
- SL *Selected Letters: 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981.

年 譜
 アーネスト・ヘミングウェイ
 (生誕から自殺までの病気・「事故 (怪我)」と作品の詳細)

年	内 容
1899	7月21日、医師である父クラレンス・エドモンド・ヘミングウェイと母グレース・ホール・ヘミングウェイの第二子・長男としてアーネスト・ミラー・ヘミングウェイが生まれる。生来左眼の視力が弱かった。
1902	母グレースの育児日記には「もう自分で弾を装てんして、うち金を起し、上手に打つことができる」とある。また、4歳の誕生日前には、祖父ホールから「素晴らしい狩猟家」と言われる。
1906	小学校時代、口に棒をくわえたまま丘を駆け下りながら躓いて転び、棒の先が尖った先端を喉の奥に突き刺した。運よく近くにいた父が、手早く止血し傷口を焼灼した。
1915	ワルーン湖の禁漁区でアオサギを撃ち猟区管理官から逃亡を図る。判事に事情を話し、罰金15ドルを支払うことで事なきを得る。 ボクシングに興味を持ち、ジムに通い熱中する。16歳になる以前からプロボクサーとボクシングを習っていたと語っている。
1917	兵役を志願するが、左目の視力で断念する。 10月、『カンザスシティ・スター』紙の見習い記者として、ミズーリ州カンザス・シティへ赴く。翌年4月の退社まで12本の記事をヘミングウェイが書いたものであることが確認されている。
1918	春先、喧嘩でショーケースを割り手に負傷。 5月、合衆国赤十字の疾病運搬車の運転手を志願してフランスへ発つ。 7月、フォッサルタで迫撃砲弾と機銃掃射を受け、脚部に237か所の負傷。以後、ミラノの赤十字病院へ入院。7歳年上の看護師アグネス・フォン・クロースキーと恋に落ちる。この体験が『とても短い話』、『武器よさらば』の背景となる。 8月、2度目の脚部の手術。10月、黄疸になる。
1919	1月、病院を退院しアメリカへ帰国。 1月～2月、オークパークで大衆向けの雑誌に投稿。 3月、アグネスより絶縁状が届く。戦場で経験した被弾の後遺症で夜眠れない症状に悩まされる。 9月～12月、北ミシガン・ペトスキーで短編を執筆し、雑誌社に送るが不採用となる。
1920	1月、トロントで『トロント・スター・ウィークリー』誌、『トロント・デイリー・スター』紙のフリーランスのライターとなる。 7月、母グレースから勘当の手紙を受け取る。 10月、最初の妻となるハドリー・リチャードソンと恋愛関係が始まる。カール・サンドバーグ、シャーウッド・アンダソンと知り合う。 12月、『生協通信』の仕事を得る。
1921	3月、ハドリーと婚約、9月に結婚する。 シャーウッド・アンダソンの紹介状を携えて、ハドリーとパリへ渡る。『トロント・スター・ウィークリー』誌、『トロント・デイリー・スター』紙のフリーランスのライターとして、退職までの2年間に約200本の記事が掲載される。

1922	<p>4月、『トロント・スター』紙の依頼を受けて、ジェノヴァ国際経済会議の取材中、宿泊したホテルで入浴中に、湯沸かし器が爆発し、火傷と軽傷を負う。下旬、のどの痛みを訴える。</p> <p>5月、短編小説「神のしぐさ」、6月、詩「終焉に」が『ダブルディーラー』誌に掲載。10月、ギリシャトルコ戦争の取材中、滞在していたコンスタンチノーブルでマラリアになる。</p> <p>12月クリスマス前、ローザンヌに向かう妻ハドリーがリヨン駅でそれまでの作品の詩30、短編18、長編1が入ったスーツケースを盗まれる。</p>
1923	<p>1月、「ミトライリアトリス」、「ぬるぬるした天気」、「ローズヴェルト」、「名誉の戦場」、「突撃隊」、「見出し」の6編が、シカゴの詩誌『ポエトリー』に掲載される。</p> <p>4月、1冊目の出版、6編のスケッチ（『ワレラノ時代ニ』掲載の最初の6編）と1つの詩が『リトル・レビュー』誌に掲載される。</p> <p>8月、パリで短編小説「ミシガンの北で」、「季節外れ」、「ぼくの父さん」と詩「オクラホマ」、「捕虜たち」、「モンパルナス」、「若さとともに」などを含む『三つの短編と十の詩』を出版する。</p>
1924	<p>3月～4月、短編小説「インディアン・キャンプ」が（「進行中の作品III」の題として）『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載される。2冊目出版、短編集パリ版『ワレラノ時代ニ』を出版する。</p> <p>9月～10月、パンプローナの手紙が『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載される。論説「楽道家でモラリストのコンラッド」が『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載される。ベルリンの『デア・クヴェルシュニット』誌に詩2編を発表する。</p> <p>11月、短編小説「医者と医者妻」が『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載される。『デア・クヴェルシュニット』誌に4編の詩を発表する。</p> <p>12月、短編小説「クロスカントリー・スノー」が『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載される。</p>
1925	<p>2月、詩『時代の要求』を『クーベルシュニット』誌に発表する。</p> <p>3月、短編小説「エリオット夫妻」が『リトル・レビュー』誌に掲載される。</p> <p>5月、論説「エズラ賛歌」、中編小説「ビッグ・トゥー・ハーティド・リヴァー」が『ズイス・クォーター』に掲載される。</p> <p>6月、短編小説「敗れざる者」がドイツの『デア・クヴェルシュニット』誌に独訳で掲載される。</p> <p>10月、3冊目の出版、短編集『われらの時代に』を出版する。</p> <p>12月、短編小説「敗れざる者」が掲載される。短編小説「兵士の故郷」が『現代作家コンタクト版作品集』に掲載される。</p>
1926	<p>5月、4冊目の出版、長編『春の奔流』を出版する。</p> <p>6月、短編小説「ありふれた話」を『リトル・レビュー』誌の春-夏号に発表する。</p> <p>9月～10月、ハドリーと別居し、アーネストとポーリーンが100日間合わないことを条件に離婚に同意する。</p> <p>10月、5冊目の出版、長編小説『日はまた昇る』を出版する。</p> <p>暮れから1927年にかけて、風邪からひどい扁桃炎を起こし、しばらくの間ベッドでの生活となる。</p>
1927	<p>1月、ハドリーと離婚が成立する。</p>

	<p>2月、論説「私の人生」が『ニューヨーカー』誌に掲載される。</p> <p>3月、短編小説「殺し屋」が『スクリブナーズ・マガジン』に掲載される。</p> <p>4月、短編小説「異国にて」と「贈り物のカナリア」が『スクリブナーズ・マガジン』に掲載される。</p> <p>5月、カトリックに改宗し、ポーリーンと再婚。インポテンツになる。短編小説「イタリア」（後に祖国は君に何を語るか）に改題）が『ニュー・リパブリック』誌に掲載される。</p> <p>6月、海の岩場で足を切り炭疽となり腫れて発熱し10日間寝込んだ。</p> <p>7月、短編小説「5万ドル」が『アトランティック・マンスリー』に掲載される。</p> <p>8月、短編小説「白い象のような山なみ」が『トランジション』誌に掲載される。</p> <p>9月、足と手が腫れる。短編小説「アルプスの牧歌」が『アメリカン・キャラバン—米国文学年報』に掲載される。</p> <p>10月、6冊目の出版、短編集『女のいない男たち』を出版する。</p> <p>12月、悪性の風邪（インフルエンザ）をひき、痔を患い、虫歯に悩まされる。モントルーで夜中、息子に正常な方の目に指を突っ込まれたため、眼に傷がつきしばらく視野がぼやけるようになった。</p>
1928	<p>1月～2月、インフルエンザでしばらく寝込む。</p> <p>3月～4月、アパートの洗面所で誤って天窓の鎖を触り、ガラスが頭上に落下し、額から目の上を9針縫う怪我を負った。パリでの生活に終止符を打ち、フロリダ州キー・ウエストに居住する。キューバに興味を持つ。</p> <p>6月、次男パトリックが帝王切開で生まれる。</p> <p>12月、父クラレンスが祖父アンソンから譲られた「Long John」で自殺。</p>
1929	<p>世界大恐慌が始まる。</p> <p>5月～10月、『武器よさらば』が『スクリブナーズ・マガジン』で、6回シリーズで連載される。</p> <p>9月、7冊目の出版、長編小説『武器よさらば』を出版する。</p> <p>10月、腎臓の調子が悪くなる。鼠径部の筋肉を切断する。</p>
1930	<p>1月、喉の痛みを友人に「膿でいっぱい」と形容して養生する。</p> <p>3月、闘牛に関する論説「スポーツと産業としての闘牛」を『フォーチュン』誌に発表する。</p> <p>5月、サンドバッグで拳闘の練習中、右手の人差し指を根元から第1関節まで切り、きれいな白い骨が露出してしまい6針縫う。</p> <p>8月、短編小説「ワイオミング」が『スクリブナーズ・マガジン』誌に掲載される。モンタナ州で乗馬中、急に暴れ出した馬にまたがったまま降りる機会を失い、繁みの中で腕と脚を怪我し顎の左側に深い傷をおった。その縫合で顔が歪んでしまう。</p> <p>11月～12月、11月初旬飲酒運転で側溝にひっくり返り、商売道具の右腕を複雑骨折し、12月下旬まで7週間の入院中3度の手術を受ける。</p>
1931	<p>8月頃から、眼鏡を使用するようになる。</p> <p>11月、三男グレゴリーが生まれる。</p> <p>12月、疲れから喉をやられる。短編小説「海の変容」が『ジス・クォーター』誌に掲載される。</p>
1932	<p>4月、船で釣りを終えたあとキー・ウエストへ戻る途中風邪から気管支炎になる。</p>

	<p>5月、短編小説「嵐のあとに」が『コスモポリタン』誌に掲載される。</p> <p>9月、8冊目の出版、長編小説『午後の死』を出版する。</p>
1933	<p>3月、短編小説「清潔で明るいところ」が『スクリブナーズ・マガジン』誌に掲載される。</p> <p>4月、短編「スイス賛歌」が『スクリブナーズ・マガジン』誌に掲載される。「神よ陽気に殿方を憩わしたまえ」を300部限定で出版する。</p> <p>5月、短編小説「先生、処方箋をください」（後に「賭博師と尼僧とラジオ」に改題）が『スクリブナーズ・マガジン』に掲載される。</p> <p>8月、「モロ要塞沖のカジキーキューバ通信」が創刊号の『エスクァイア』に掲載される。</p> <p>10月、9冊目の出版、短編集『勝者には何もやるな』を出版する。喉の手術を受ける。</p> <p>12月、2カ月にわたるアフリカ旅行へ向かう。</p>
1934	<p>1月、エッセイ「スペインの友—スペイン通信」が『エスクァイア』が掲載される。アメーバ赤痢に罹患し、さらに脱腸になる。</p> <p>2月、「パリ通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>3月、サファリ旅行を終える。</p> <p>4月、中編小説「片道航海」（後の『持つと持たぬと』の「第1部ハリー・モーガン（春）」に相当）が『コスモポリタン』誌に掲載される。「アフリカでアメーバ赤痢—タンガニーカ通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>5月、釣り船『ピラール号』を造船し購入する。</p> <p>6月、「射撃とスポーツの違い—再びタンガニーカ通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>7月「危険な獲物に関する覚書—タンガニーカ通信その三」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>8月、「海流に乗って—キューバ通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>10月、「ジョージの後の「ヘニオ」—ハバナ通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>12月、「元新聞記者が書く—キューバ通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p>
1935	<p>1月、アメーバ赤痢が再発。論説「人生と文学についての覚書—びんの中に見つかった原稿」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>2月、「狩猟の思い出—キー・ウエスト通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>3月、「モンバサ沖のバショウカジキーキー・ウエスト通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>4月、ドス・パソスと『ピラール号』に乗船中、釣り上げたサメを撃とうとして、22口径の銃で自分の両足を撃つ。「ホワイトヘッド通りの光景—キー・ウエスト通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>5月、「アメーバ赤痢南部スタイル—キー・ウエスト通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。『アフリカの緑の丘』が『スクリブナーズ・マガジン』誌で連載始まる。</p> <p>6月、「再び撃たれることについて—メキシコ湾流通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>7月、「会長が勝利を収める—ビミニ通信」が『エスクァイア』誌に掲載さ</p>

	<p>れる。</p> <p>8月、「撃たれて幸せになる男—ビミニ通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>9月、「次の戦争についての覚書—まじめな時事的話題の通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。「誰が退役軍人を殺したか」を『ニュー・マスィズ』誌に寄稿する。</p> <p>10月、10冊目の出版、長編小説『アフリカの緑の丘』を出版する。「カエストロへの長談義—外洋通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>11月、「権力の疲弊—2番目の真面目な通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>12月、「100万ドルの恐怖—ニューヨーク通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p>
1936	<p>1月、フィッツジェラルドの「崩壊」を読み、3週間不眠症と憂鬱症に罹る。インポテンツになる。自殺について話すようになる。</p> <p>2月、中編小説「密輸業者の帰還」（後の『持つと持たぬと』の「第2部ハリ—モーガン（秋）」に相当）が『エスクァイア』誌に掲載される。キー・ウエストで怒りにまかせてポーリーンによってカギをかけられていた表の門を、力任せに蹴り足の親指を骨折する。</p> <p>4月、「青い海で—メキシコ湾流通信」が『エスクァイア』誌に掲載される。これが『老人と海の』原型となる。</p> <p>5月、「姿が向こうに—モロ沖のモビー・ディック」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>6月、短編小説「雄牛の角」（後に「世界の首都」に改題）が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>8月、短編小説「キリマンジャロの雪」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>9月、短編小説「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」が『コスモポリタン』誌に掲載される。</p> <p>12月、3番目の妻になるマーサ・ゲルフォーンと知り合う。</p>
1937	<p>3月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電5本が全米各紙に掲載される。</p> <p>4月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電3本が全米各紙に掲載される。</p> <p>5月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電3本が全米各紙に掲載される。</p> <p>6月、講演「ファシズムは欺瞞（嘘）」をニューヨークで開かれたアメリカ作家会議で行う。これが『ニューヨーク・マスィズ』誌に掲載される。</p> <p>9月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電3本が全米各紙に掲載される。</p> <p>10月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電2本が全米各紙に掲載される。11冊目の出版、長編小説『持つと持たぬと』を出版する。</p> <p>12月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電2本が全米各紙に掲載される。から終生悩まされる肝臓の不調が現れ始め、翌年にはさらに悪化し医師ロバート・ウォリッチに食事制限と禁酒を言い渡される。</p>

1938	<p>4月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電9本が全米各紙に掲載される。論説「時は今、舞台はスペイン」、「良い死に方、悪い死に方」が『ケン』誌に掲載される。</p> <p>5月、スペイン内戦について署名入り「北米新聞連合」協会（NANA）特電2本が全米各紙に掲載される。論説「枢機卿、勝者を選ぶ」と短編小説「橋のたもとの老人」が『ケン』誌に掲載される。</p> <p>6月、論説「結束しケンを撲滅せよ」、「英国王陛下の忠実なる米国务省」、「アンゴラでの裏切り」を『ケン』誌に掲載される。12冊目の出版、映画脚本『スペインの大地』を出版する。</p> <p>7月、論説「偉大さを望んで」、「我が友、ゴリラのガルガンチュア」が『ケン』誌に掲載される。</p> <p>8月、悪い方の左眼の瞳を自分で傷付けてしまう。論説「人類はこの非道を許さない」が『プラウダ』誌に掲載される。論説「合衆国的現実主義に基づく計画」、「優れた司令官は前線に接近する」が『ケン』誌に掲載される。</p> <p>9月、論説「大統領への虚偽の知らせ」、「裏庭に風を入れる」が『ケン』誌に掲載される。</p> <p>10月、13冊目の出版、戯曲と短編を集めた『第五列と最初の49の短編』を出版する。</p> <p>11月、短編小説「密告」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p> <p>12月、短編小説「蝶々と戦車」が『エスクァイア』誌に掲載される。</p>
1939	<p>1月、論説「次に『平和』が問題になったら」が『ケン』誌に掲載される。</p> <p>2月、短編小説「戦いの前夜」が『エスクァイア』誌に掲載される。論説「クラークス・フォーク川の溪谷（ワイオミング州）」が『ヴォーグ』誌に掲載される。論説「スペインに死したアメリカ人について」が『ニュー・マサイズ』誌に掲載される。</p> <p>3月、短編小説「誰も死なない」が『コスモポリタン』誌に掲載される。論説「書く者としての作家」が『ディレクション』誌に掲載される。</p> <p>9月、第2次世界大戦が勃発する。</p> <p>10月、短編小説「分水嶺の下で」が『コスモポリタン』誌に掲載される。</p>
1940	<p>3月、小説「戦場」を出版する。</p> <p>3月～5月、『第5列』がニューヨークのブロードウェイで上演されるも不評で終わる。</p> <p>10月、14冊目の出版、長編小説『誰がために鐘は鳴る』を出版する。</p> <p>11月、ポーリーンと離婚。マーサと結婚する</p>
1941	<p>6月、論説「日ソ中立条約」、「オランダ領東インド諸島におけるゴム供給情勢」等の7本の記事が『PM』誌に掲載される。</p>
1942	<p>執筆活動は絶え、酒量が増える。</p> <p>10月、編集と序文を担当した『戦時の人間』を出版する。1500部限定の特製本『誰がために鐘は鳴る』を出版する。</p>
1943	<p>執筆活動は途絶えたまま。鬱状態になり、ますます酒量が増える。</p>
1944	<p>5月、ロンドンで自動車事故を起こし、膝が腫れ、重度の脳震盪、2時間の頭部手術で57針縫う。数カ月に渡り頭痛が続くもさらに痛飲が続く。</p> <p>6月、詩「ロンドンのメアリーへの初めての詩」を執筆する。</p> <p>7月、「勝利への航海」が『コリアーズ・ウィークリー』誌に掲載される。</p> <p>8月、ノルマンディーでオートバイのサイドカーに乗車中、ドイツ軍の迫</p>

	<p>撃砲で側溝に投げ出され、頭を石で強打する。物が二重に見える視覚障害、頭痛、言語障害、性機能障害などが現れて後遺症に悩まされる。</p> <p>9月、『ポータブル・ヘミングウェイ』がマルカム・カウリー編纂でヴァイキング社から出版する。</p> <p>10月、「パリ到達の状況」が『コリアーズ・ウィークリー』誌に掲載される。</p> <p>11月、「G・Iと将軍」が『コリアーズ・ウィークリー』誌に掲載される。「ジークフリート線での戦争」が『コリアーズ・ウィークリー』に掲載される。</p> <p>12月、風邪を悪化させて肺炎になり吐血し、回復に時間がかかる。</p>
1945	<p>2月～3月、度重なる交通事故の脳震盪でひどい頭痛の後遺症に悩まされる。さらに言語障害、記憶障害も現れる</p> <p>6月、飲酒運転で交通事故を起こす。頭をバックミラーに強打、ハンドルで肋骨を4本折り、左膝を割る。さらにその後に影響を及ぼす硬膜下血腫を起こす。また、その後高血圧、耳鳴りにも悩まされる。</p> <p>12月、マーサと離婚。</p>
1946	<p>1月、『エデンの園』の執筆が開始されたとされる。</p> <p>3月、メアリー・ウォルシュと4度目の結婚をする。</p>
1947	<p>8月、事故の後遺症とは別に、まず耳鳴りから始まった高血圧の症状が出る。血圧は215-125になり、体重は256ポンド(約116kg)になる。</p>
1948	<p>2月、『海流の中の島々』の執筆が開始されたとされる。</p> <p>11月、特製本『武器よさらば』を5300部出版する。</p>
1949	<p>1月、絶えることのない耳鳴りに悩まされる。15か月間にわたり4時間おきに薬を服用し強い吐き気に悩まされる。カウリーのインタビュー記事「ミスター・パパの肖像」が『ライフ』誌に掲載される。</p> <p>2月、ひどい喉風邪で2週間伏せる。</p> <p>3月、左眼が化膿。丹毒に感染がわかり入院し、ペニシリンの大量投与で回復する。</p> <p>7月、論説「大きな青い河」が『ホリデー』誌に掲載される。</p>
1950	<p>2月、眼が火薬アレルギーになり皮膚炎を再発。『河を渡って木立の中へ』が『コスモポリタン』誌で連載が始まる。</p> <p>4月、『海流の中の島々』の「第2部 キューバ」と『エデンの園』の「仮の最終章」の執筆が開始されたとされる。</p> <p>5月、リリアン・ロスのインタビュー記事「殿方、お気に召しましたか？」が『ニューヨーカー』誌に掲載される。</p> <p>7月、『ピラール号』の船上で足を滑らせ、頭を材木に打ち付け骨まで達する傷で3針縫う。その後頭痛に悩まされる。</p> <p>9月、1918年右足に被弾した際の破片のため水腫と激しい痛みに見舞われる。15冊目の出版、長編小説『河を渡って木立の中へ』を約10年の空白を経て出版するも惨憺たる批評で精神状態が不安定になる。</p>
1951	<p>1月、気管支炎のため高熱を発症し寝込む。チャールズ・フェントンの博士論文作成の協力依頼を断る。</p> <p>2月、カーロス・ベイカーの伝記研究への協力依頼を断る。</p> <p>3月、アドリアーナの挿絵付の寓話「一途な雄牛」と「よいライオンの話」が『ホリデー』誌に掲載される。</p> <p>4月、論説「銃声一発」が『トゥルー』誌に掲載される。</p>

	<p>5月、『海流の中の島々』の「第3部 洋上」が完成されたとされている。</p> <p>6月、母グレースが亡くなる。葬儀には参列しなかった。</p> <p>10月、ポーリーンが亡くなる。</p> <p>12月、フィリップ・ヤングの引用許可の求めを断る。</p>
1952	<p>5月、フィリップ・ヤングの引用許可の求めを許可する。</p> <p>9月、「老人と海」を『ライフ』誌に一括掲載する。16冊目の出版、長編小説『老人と海』を出版する。</p> <p>10月、カーロス・ベイカーの『ヘミングウェイ—芸術家としての作家』が出版される。</p>
1953	<p>5月、ピューリッツァー賞を『老人と海』で受賞。</p> <p>8月、2度目のアフリカ旅行へ行く。</p> <p>10月、ケニアで酔ってカーブを曲がっていた車から転落し、顔面裂傷と肩を捻挫する。</p>
1954	<p>1月、遊覧飛行の最中に峡谷に張られていた電線に接触し墜落し、再度右肩を捻挫する。この事故で一時ヘミングウェイの死亡説が世界中に配信される。翌日、乗り込んだ飛行機が離陸に失敗し、爆発炎上する。この事故で、頭からは出血して漿液が流れ出し、右腕は脱臼し、全身打撲、肝臓、腎臓と脾臓の破裂、左眼の一時的失明、背骨の故障、左足の捻挫、顔、腕と頭の第一次火傷、そして視力にも障害を受ける。また、これらの事故の影響で死ぬまで苦しむことになる。「サファリ」が『ルック』誌に掲載される。</p> <p>2月、釣りに出かけたとき、雑木林で発生した火事を消そうとして、先の事故で体の動きがままならなかったため、二度火傷を脚、腹部、胸、そして唇に、三度の火傷を左手と右腕に受ける。</p> <p>5月、論説「クリスマスの贈り物」が『ルック』誌に掲載される。</p> <p>7月、アフリカの本（後の『キリマンジャロの麓で』）の執筆が開始されたとされる。</p> <p>10月、ノーベル文学賞受賞の報が届く。ノーベル文学賞を受賞する。健康がすぐれないため授賞式には参加できず、アメリカ大使のジョン・キャボットが代理で受け取る。</p>
1955	<p>1月～、航空機事故以来、疲れると後遺症である背中痛みが出て、左眼の視力が低下し、左耳はまったく聞こえない状態になる。</p> <p>11月、風邪をひき右足が腫れ、両腎臓と肝臓まで菌が拡がり腎炎と肝炎の徴候が現れる。過度の飲酒は収まることなく続く。</p>
1956	<p>1月、病床に伏す。</p> <p>4月、アフリカの本の執筆を中断したとされる。</p> <p>11月、鼻血がよく出るようになり、脛に浮腫が現れるようになる。大動脈の周りには炎症がいくつもみられる。医師より厳しい食事制限、アルコールの制限、そして性行為の制限を言い渡される。</p>
1957	<p>5月、『移動祝祭日』の執筆に取りかかったとされる。</p> <p>11月、短編小説「世慣れた男」、「盲導犬を飼え」が『アトランティック・マンズリー』誌に掲載される。</p> <p>12月、翌年の3月まで『エデンの園』と『移動祝祭日』の原稿を交互に執筆したとされる。</p>
1958	<p>4月、プリンプトンとのインタビュー「アーネスト・ヘミングウェイ—小説の技法 21」が『パリ・レビュー』誌に掲載される。</p>

	7月、『移動祝祭日』の18のスケッチが完成されたとされる。
1959	7月、風邪をこじらせ、誕生パーティー前後に重度の精神の不調が現れる。 8月、論説「風の問題」を『スポーツ・イラストレイテッド』誌に発表する。 11月、『エデンの園』の原稿をスクリブナー社に預ける。
1960	1月、高血圧と不眠に悩まされる。 7月、鬱の徴候が顕著に現れる。 8月、恐怖感、孤独感、倦怠感、他人への猜疑心、不眠症、罪悪感、記憶の減退などの強い神経衰弱の様子が現れる。 9月、「危険な夏 第1部」、「危険な夏 第2部 悪魔のプライド」、「危険な夏 第3部 惨事との面会」が『ライフ』誌に3週間に亘って掲載される。被害妄想に取りつかれ、怒りの状態が特に目立ち、感情をコントロールできなくなり始める。車を駐車場から出すとき事故を起こす。 11月、極秘裏にジョージ・セーヴィアズという偽名で、セント・メアリー病院（メイヨー診療所）に入院する。病院では肝臓病や腎臓病などの多臓器障害の治療が始まる。鬱病は降圧剤が原因とも考えられたため、一時中止しようとしたが鬱の状態がかなり重症だったため、1週間に2度の割合で12月の後半から翌1961年1月上旬にかけて電気ショック療法を実施される。しかしその治療は記憶障害と失語症を伴い、作家ヘミングウェイにとり致命的な治療となる。
1961	1月、鼻風邪をひき入院する。 3月、顔の癌の手術を受ける。 4月、自殺未遂を起こす。 7月、ショットガンで自殺。
1964	遺作『移動祝祭日』が出版される。
1970	遺作『海流の中の島々』が出版される。
1972	『ニック・アダムズ物語』がフィリップ・ヤング編集で未発表の作品8編が含まれて出版される。
1979	『88の詩』が出版される。
1987	『ヘミングウェイ短編全集（フィンカ・ビビア版）』が出版される。
1999	生誕100周年を記念して遺作『夜明けの真実』が出版される。
2005	『夜明けの真実』の完成版『キリマンジャロの麓で』が出版される。

本年譜は以下を主要参考文献資料として作成した。

Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. NY: Scribner's, 1969.

Charles M. Oliver. *Ernest Hemingway A to Z*. NY: Facts ON File, Inc., 1999.

Dearborn, Mary V. *Ernest Hemingway: A Biography*. New York: Alfred Knopf, 2017.

Jeffrey Meyers. *Hemingway: A Biography*. NY: Harper & Row, 1985.

Kenneth S. Lynn. *Hemingway*. NY: Simon and Schuster, 1987.

Reynolds, Michael. *Hemingway: An Annotated Chronology*. Detroit: Omnigraphics, Inc., 1991.

———. *Hemingway: The 1903s*. NY: Norton, 1997.

———. *Hemingway: The Final Years*. NY: Norton, 1999.

———. *Hemingway: The Homecoming*. NY: Norton, 1999.

———. *Hemingway: The Paris Years*. NY: Norton, 1999.

———. *The Young Hemingway*. NY: Norton, 1998.

Paul Smith. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K. Hall & Co., 1989.

今村楯夫、島村法夫編『ヘミングウェイ大事典』（勉誠出版、2011年）。

新関芳生 「ヘミングウェイ年譜—病気・怪我とテキスト」『ユリイカ』（青年社、1999年8月）。

序 章

本研究の背景と目的

マッチョ (macho) でハードボイルドな男を想起させるアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) は、アメリカを代表し世界で最も知られた作家のひとりである。旅する作家は、その時代にそこに生活する人々の姿を明確に捉え、それぞれの喜びや苦悩を表現し、また自身の背負ったものを、ひとり煩悶する姿を作品に溶かしこみ、更に斬新な作品を創り出していった。数多くの言語にも翻訳され、そして作品は映像化され、時代を経ても色褪せることなく、絶えず新たな側面を提示し続けている。

ヘミングウェイの人生を振り返ってみれば、その人生では数多くの事故 (怪我) に遭遇し病気に罹患している。また、その体験が多く作品に描き出されている。ガートルード・スタインが「あなたたちはみんなロスト・ジェネレーションよ」という言葉で、第一次世界大戦を実体験とし、そのさ中に青春を過ごしたヘミングウェイを始めフランシス・スコット・キー・フィッツジェラルド (Francis Scott Key Fitzgerald, 1896年9月24日-1940年12月21日) やドス・パソス (John Roderigo Dos Passos, 1896年1月14日-1970年9月28日) などの若者達を「ロスト・ジェネレーション」と呼び、未来への希望を欠き墮落した世代として表した。それを題字とした『日はまた昇る』(SAR, 1926) は、第一次世界大戦終了後のパリでの出来事で、精神的にも肉体的にも深い傷を負った、アメリカ人のジャーナリストのジェイク・バーンズが軸に描かれている。ロバート・コーンはミドル級のボクシングチャンピオンであったが、アメリカで妻と離婚し事業もうまくいかずパリにやってきた。アメリカ人のジャーナリストであるジェイク・バーンズは第一次世界大戦で心身ともに傷を負っていた。二人はパリで出会う。二人が諍いを始め殴り合いの際に、ジェイクは頭部にパンチを受け、記憶の変容が現れる。

戦争を描いた『武器よさらば』(FTA, 1929) の冒頭部分は、雨や枯れ葉、色彩などシンボリックな表現が特徴的で、アメリカ文学史上類をみない美しい表現であると高く評価されている。病院を舞台にして書かれている部分が作品の3分の2を占めている。

作品の中のイタリア軍の救急車部隊を率いるアメリカ人のフレデリックは、ヘミングウェイが実体験として経験している迫撃砲により被弾して、膝を含む脚部に重傷を負っている。当時の医学的トピックを含めた研究はあるが、戦争での被弾や事故などで脳に影響を及ぼす頭部外傷^(注1)を含めた研究は、2017年に出版された脳神経科医アンドリュー・ファラー（Andrew Farah）による *Hemingway's Brain* が嚆矢となった。この砲弾による被弾がヘミングウェイの外的要因による脳変性の原因の特に大きなものである。

また、470頁を超えるにもかかわらず、1937年5月末の土曜日から翌週の火曜日までの4日間の物語で、その濃密に圧縮された時間で描かれた『誰がために鐘は鳴る』（*FWBT*, 1940）も同様に戦争を題材としている。作品はスペイン内戦を扱い、世界の列強国が見え隠れし、いわゆる第2次世界大戦の前触れの戦いであった。中でもピラールが、モンタナ大学のスペイン語教師である主人公のロバート・ジョーダンの手相を見て、「死の臭い」を読み取る。その表現がマックスウェル・パーキンス（Maxwell Perkins）により一時削除されようとしたが、ヘミングウェイは「そのときには見えなような効果を出そうとしている」と語り削除しなかった（Brucoli 290）。橋梁爆破の撤退の際、ジョーダンは敵の攻撃で重傷を負い動けなくなる。もう逃走が不可能と知ると味方の逃走の為に自らが犠牲になる。

1940年に『誰がために鐘は鳴る』を出版して以来、執筆活動が約10年間途絶える。1940年代半ばころから、ヘミングウェイの自身を投影させる手法に変化が見られるようになった。作中における事実と虚構、フィクションとノンフィクションの境界が融解し、「自伝的小説」や「虚構的回想録」などと表現せざるを得ない作品が主流を占めるようになった（杉本『ヘミングウェイの死後出版作品研究』3）。つまりヘミングウェイの作風が大きく変化したのである。その時期を子細に追うと、その人生では数多くの事故（怪我）に遭遇し病気に罹患しているのが見えてくる。しかしながら、ヘミングウェイ作品には身体に関心を抱かせる描写が数多く描かれているにもかかわらず、それらの体験と作品との結びつきがはっきりしない。ヘミングウェイ作品はそれらの事故（怪我）や病気であることを作品に描きだしながら、自身の苦悩を見事に作品の中に描き出しているにもかかわらずである。これまでの先行研究においては、第一次

世界大戦でヘミングウェイ自身が負傷し、その後の執筆活動に関する戦争に触れたもので、それはヘミングウェイの心的外傷（トラウマ）に関する精神分析論であり、実際に負傷した身体と作品の関係性を語ったものでしかない。それらは第一次世界大戦での自身の体験が中心となる、いわば「戦傷論」で、その後、未完成原稿である『エデンの園』がヘミングウェイの死後、1980年に出版され、マッチョなヘミングウェイとは乖離した髪の色や肌の色などのジェンダー論やセクシャリティー論に移行する。

1986年に出版された『エデンの園』は、ヘミングウェイ研究の流れをセクシュアリティへと変えた。ケネス・リン (Kenneth Lynn) の伝記『ヘミングウェイ』(Hemingway) が1987年に出版され、ヘミングウェイが1歳年上の姉マーセリーン (Marcelline) と同性の双子として育てられたという伝記的事実から、セクシュアリティを解明しようとした。この後、マーク・スピルカ (Mark Spilka) の『ヘミングウェイ：両性具有との争い』(Hemingway's Quarrel with Androgyny) が1990年に出版され、日本では同年、今村楯夫の『ヘミングウェイと猫と女たち』で両性具有論が出版され、ヘミングウェイ研究の次の主流となった。さらに、デブラ・モデルモグ (Debra Modellmog) 著で新たな同性愛思考が現れ両性具有の研究が進んでいる。いずれにしても身体との関連性を伺うものである。本論では、伝記的事実も援用し、作家ヘミングウェイの作品に描かれた、「変えることのできない遺伝的要素」及び「後天的な事故（怪我）」と、作品との関係性を明らかにするために、遺伝的要素と事故（怪我）を詳細に分析してその状況を明確にする。それにはヘミングウェイの受けた身体（脳）に受けたダメージが作品とどのような関係性があるか検証していく必要がある。

以上の経緯から、ヘミングウェイの「身体」、特に「脳」に問題を置いて、初期の作品から死後に編集された作品を横断的に分析し、その中でも異質性を含有するものを大きく二つの側面から次のように考察する。第一には、ヘミングウェイに受け継がれた父クラレンス・ヘミングウェイ (Clarence Hemingway) からの「遺伝」を指摘し、その上でヘミングウェイが考案・実験・構築し描き上げた作品を分析し、いかにしてヘミングウェイが体験した出来事を作品の中に溶かし込み、父から子へと世代を渡る「遺伝」について描いているかを論証することである。第二には、ヘミングウェイが体験した若い頃からの度重なる頭部への衝撃、飲酒を含む事故（怪我）による頭部外傷、

その結果、鬱病に苦しみながら作品を紡ぎ出して構築したその感覚が脳震盪の影響であること知り、作家の天賦の才能として、その影響により描き出す時間と場所の変容した光景を作品に描き、頭部への影響が濃密に作品に反映していることに迫ることである。更に作品に描かれた内容を詳細に分析すると、そこには既にヘミングウェイ自身も気づかない認知症^(注2)が作品に現れていたことも明らかにする。

本論文のいま一つのテーマは、「冰山理論」^(注3)を作品から丁寧に辿り、ヘミングウェイの作品に現れる意識の流れを含め、ヘミングウェイが確立・表現、あるいは秘匿しようとした階層的・重層的な様態を作品の中から明瞭にすることにより、ヘミングウェイが意図した文体に逼ることである。また光を当てる「冰山理論」は、これまで語られることのなかった作品間にそれが存在し、その存在する意味を示し論考することである。ヘミングウェイの作品を語る上で重要な理論である。しかし「冰山理論」を根拠とした重層的な読みが、単なる恣意的な読みになってしまう危険性は常にある。このような意味で精密な再検討を必要としているのではないかと熊谷は言及している(『大事典』760)。この技法は、「季節外れ」、「インディアン・キャンプ」、「三発の銃声」、「兵士の故郷」、「白い象のような山なみ」などに見られる。

本論では、「冰山理論」が単に一つの小説内にとどまらず、複数の小説間に存在することを指摘した上で新たに考察する。素晴らしい闘牛の解説書とも評される『午後の死』(DIA, 1932)では、70枚を超える写真が掲載され、用語小事典や日程表までもが付いている。その第一章では「最大の難関は、行動している中で本当に起こっていることを、つまり自分で経験している感情を生み出す現実の物事が何であるかを捉えて書きとめることであった」とあるように自身の文体論を述べている。さらに本質的なものとして、その中で「冰山理論」を構築した技法も解いている。しかしながら、さまざまな後天的な病気や事故(怪我)により、氷山の水面下に隠しておきたかった事実が水面上に現れてきていたことが、Charles Scribner's Sons から、1972年に出版されたフィリップ・ヤング(Philip Young)編集の、幼年期から青年期を描いた『ニック・アダムズ物語』に収録され、ニック・アダムズが主人公となる、24篇の短編をクロノロジカルに1冊にまとめられたものからもわかる。ヘミングウェイは先に述べたボクシングのパンチが頭部へ与える影響、従軍した戦争中の被弾、度重なる事故(頭部外

傷)、そして飲酒などの外的要因による脳損傷にもかかわらず「冰山理論」を構築していたのである。そして、この技法がヘミングウェイの作品の文体の根幹をなしていることを示す。上記に指摘した二つの面と「冰山理論」を論ずるにあたり用いる具体的な考察方法と各章における概要は次の通りである。

研究の方法 <1> 自伝的考察

1892年の国勢調査で、フロンティアの消滅が公式に宣言されたが、文字通りの消滅ではなく文明に侵され消えゆく時代であった。そのアメリカをこよなく愛し、描き続けたヘミングウェイの作品と彼の体験した出来事と世代を渡る受け継がれたもの＝「遺伝」に着目し、ヘミングウェイの体験した出来事と、世代間で受け継がれた精神疾患を含む「遺伝」が、作品にどのような影響を与えて描き込まれたのか、また描かれた作品の中の表現にどのような影響を及ぼしたのかを中心に焦点を当てて分析する。さらに医学的見地から検証された事実とともに領域横断的にテキストとの構造を明らかにし、作品の根底に隠された作者ヘミングウェイの意識にも焦点をあてる。

ヘミングウェイの後半の人生を振り返ると、40代が大きな転機の時期だったと考えられる。40歳で『誰がために鐘は鳴る』を出版して以来、51歳に『河を渡って木立の中へ』(ARIT, 1950)まで、わずかな雑誌などへの寄稿を除き、作品は発表されていない。43年の夏、友人のアーチボルト・マクリーシュ (Archibald Macleish) に、この1年の間一行も書いていないと書き送っている (SL, 549)。同じ頃、カルロス・ベーカー (Carlos Baker) がヘミングウェイは、その夏深刻な飲酒生活にもどったと指摘している (Baker, *Life Story* 579)。

過度の飲酒については、ヘミングウェイと2人目のポーリン・ファイファー (Pauline Marie Pfeiffer) との間の子、当時12歳のグレゴリー (Gregory Hancock Hemingway) が「ここ数年信じられないほどの飲酒をしていて、たとえば、午前10時からウイスキーのソーダ割り、ウォッカベースのアルコール度数の高いブラッディ・マリーなどを飲み始めていた」とインタビューに答えている (qtd. in Dearborn 440)。3度目の妻マーサ・ゲルフォーン (Martha Ellis Gellhorn) によれば、その挙句、毎日同じ服を着て、風呂にも入らず、街を裸足で歩いていたと証言している (qtd. in Dearborn 442)。44年以

降は、飲酒運転で度重なる交通事故を起し、重度の脳震盪で後遺障害に苦しみ、さらに高血圧症でも苦しむことになる。

この時代を含めてヘミングウェイの結婚生活を簡単に振り返ってみる。1921年9月、エリザベス・ハドリー・リチャードソン (Elizabeth Hadley Richardson) と結婚。27年4月、離婚。同年5月、ポーリン・ファイファーと結婚。40年11月、ポーリーンと離婚。同月、マーサ・ゲルフォーンと結婚。45年12月、マーサと離婚。46年3月、メアリー・ウェルシュ・ヘミングウェイ (Mary Welsh Hemingway) と結婚する。ヘミングウェイの結婚についてもまさに波瀾に富んだものであった。40代の過度の飲酒などの不摂生による体調不良、度重なる事故(怪我)による脳震盪の影響も、50代に近づくころには一時的ではあるが、経過が良い時期もあった。53歳でピューリッツァー賞を受賞、そして54歳でノーベル文学賞を受賞する。しかし、2度目のアフリカ旅行の事故(怪我)が元で、体調が急激に悪化し、その後の作家生命に大きな影響を与えることになったのである。

ヘミングウェイ家を心理的家系図^(別紙1)で辿ると、父であるクラレンスが双極性障害を患い、自死を遂げている。アーネストも双極性障害で自死、妹のアーシュラ・ヘミングウェイ (Ursula Hemingway 1902-1966) は癌を患い、抑うつ性障害で自死、そして、弟のレスター・ヘミングウェイ (Leicester Hemingway 1915-1982) は糖尿病と抑うつ性障害で自死している。さらに付け加えると、ヘミングウェイと2度目の妻ポーリーンの子供二人、パトリック・ヘミングウェイ (Patrick Hemingway 1928-) は抑うつ性障害と頭部外傷による精神病、グレゴリー・ヘミングウェイ (Gregory Hemingway 1931-2001) は双極性障害と性同一性障害であった。さらに孫にあたる Joan Hemingway (1950-) は抑うつ性障害、マーゴ・ヘミングウェイ (Margaux Hemingway 1954-1966) は双極性障害と過食症で自死と繋がっている。アーネスト以降の世代の「遺伝」について言及することは本論の意図するところではない。しかしながら、詳細を見てゆくと確実に強い「遺伝」傾向の存在することが事実であるとわかる。

本論は、医学的な知見を含めた領域横断的な視点から、身体(脳)の問題を核に置き、ヘミングウェイが受け継いだ「遺伝」に翻弄されもがきながら一つひとつ描き出した作品を、新しい身体観として論考する。さらに、「遺伝」により作者の無意識の内

に描かれテキストにこれまでうずもれ、身体からの研究対象とされてこなかった「遺伝」とテキストとの関係性と、作品の背後に隠された作者の無意識の内の作品制作に着目し、それらを明らかにすることを目的としている。そして、この受け継がれた「遺伝」から逃れようとして逃れることができなかつた無意識の下で描かれた新事実を究明し、ヘミングウェイ作品における身体的な研究方法の可能性を探り新たな視点を見出す。

ヘミングウェイの作品における戦争での傷について、多くの研究は被弾における作品と関わる「精神の傷」についてである。それらはテキストに現れる体験やトラウマにかかわる「精神」についてであり、「肉体」についてはほとんど論じられてこなかった。1999年のモデルモグの『欲望を読む』が嚆矢となり、新たにヘミングウェイの身体から読み解く研究として、2008年に出版された高野泰志の『引き裂かれた身体』で論じている。ヘミングウェイの身体を通して、古いヴィクトリア朝的価値観から戦後新しく生み出された価値観を追求したものである。

また、後天的な「事故（怪我）」と「病氣」の問題を中心に据えて、考えられる遺伝的要因からもヘミングウェイの作品に影響を与えたと考察される作品を取り上げ、伝記的側面からも光をあてる。精神疾患は間違いなく世代から世代へ受け継がれる（Farah 8）。ヘミングウェイの前世代からの鬱の遺伝的要素、更に外的要因による五回にも及ぶ脳震盪（外傷性脳傷害）、そして彼を自殺へと向かわせたと考えられる様々な要因である過度の飲酒、高血圧、そして双極性障害（躁鬱病）についても取り上げる。

本論は、ヘミングウェイの体験した出来事と、世代間で受け継がれた精神疾患を含む「遺伝」が、作品にどのような影響を与えて描き込まれたのか、また描かれた作品の中の表現にどのような影響を及ぼしたのかを中心に考察する。これまでのヘミングウェイ研究に光があたりなかつた、受け継がれた「遺伝」、第一次世界大戦での被弾から事故（怪我）による頭部外傷、さらに過度のアルコールの飲酒が、ヘミングウェイの作品に与えた影響について述べる。併せて本研究では、医学的事実を検証し、ヘミングウェイの受け継いだ「遺伝」の構造とテキストとの関連性を明らかにすることで、分野横断的な作品群の背後に隠されたヘミングウェイの作家としての意識を解明することを試みる。

研究の方法 <2> 原稿研究／医学的見地からの考察を含めて

ヘミングウェイの身体の最も初期の研究は、彼が第一次世界大戦で被弾により傷を負った体験から始まる。それは、その後のヘミングウェイ作品に、大きな影響を与えたことに起因する、戦争によって受けた疾病によるものである。ケネス・リン (Kenneth Lynn) の『ヘミングウェイ』(Hemingway, 1987)をはじめ、続くカムリとスコールズ以降、モデルモグは『欲望を読む』(*Reading Desire*, 1999)で、我々読者あるいは社会における強制的異性愛の思想体系に影響を受けているかを論じている。伝記作家のマイケル・レイノルズ (Michael Reynolds) も同様に、『ヘミングウェイ：1930年代』(*Hemingway: The 1930s*, 1997)、『ヘミングウェイ：パリ時代』(*Hemingway: The Paris years*, 1989)と『若きヘミングウェイ』(*The Young Hemingway*, 1986)で戦傷に触れている。日本では、高野泰志が『引き裂かれた身体—ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』(2008)の中で、ヘミングウェイ作品を「身体」という観点から鋭い考察を行っている。

本論は、主流から「忘却」されてきたテキストの再読や「アクシデント」として描き出された「疾病や傷害を受けた身体」の特に「脳」に焦点を当てて分析を展開し、ヘミングウェイ・テキストにおける脳障害の影響による新たな解釈の広がりや身体表象がテキストに及ぼす効果について論じる。また、身体の問題、特に脳を中心に見据えて、ヘミングウェイ自身の体験した苦悩の中から生み出されて、紡ぎ出された新たなヘミングウェイ像を浮き彫りにし、作品の新たな切り口を提示する。さらに、既存の「精神の傷」からさらに過去に逆行し、ボクシングによる頭部への衝撃を始めとし、ヘミングウェイが受けた外的要因による五回にも及ぶ脳震盪(外傷性脳傷害)、そして彼を自殺へと向かわせたと考えられる過度の飲酒、高血圧、そして双極性障害(躁鬱病)についても言及し、そのような状況の中どのような価値観をもって作品が生み出されたかを論じる。つまり、ヘミングウェイが体験した第一次世界大戦を通して様々遭遇した事故(怪我)による頭部外傷と、その影響とその影響が描かれた作品に着目し、頭部外傷の影響がヘミングウェイの作品に深くかかわっている可能性も明らかにする。

その頭部外傷を扱った一本の興味深い映画が公開された。それは 2015 年に公開された『コンカッション』(*Concussion*) という名の映画である。ウィル・スミス (Willard Carroll Smith Jr.) 演じるナイジェリア出身の医師ベネット・オマル (Bennet Omalu) が、ナショナル・フットボール・リーグ (National Football League: NFL) を引退した後の 2002 年 9 月 24 日に、心筋梗塞で亡くなったマイク・ウェブスター (Michael Lewis Webster) の病理解剖をする。享年 50 歳であった。オマルはマイクの頭部の病理解剖から、フットボールの試合の最中の、頭部への激しいタックルが原因である脳の病気、慢性外傷性脳症 (Chronic Traumatic Encephalopathy: CTE^(注4)) を発見し、その詳細を論文に発表したのである。

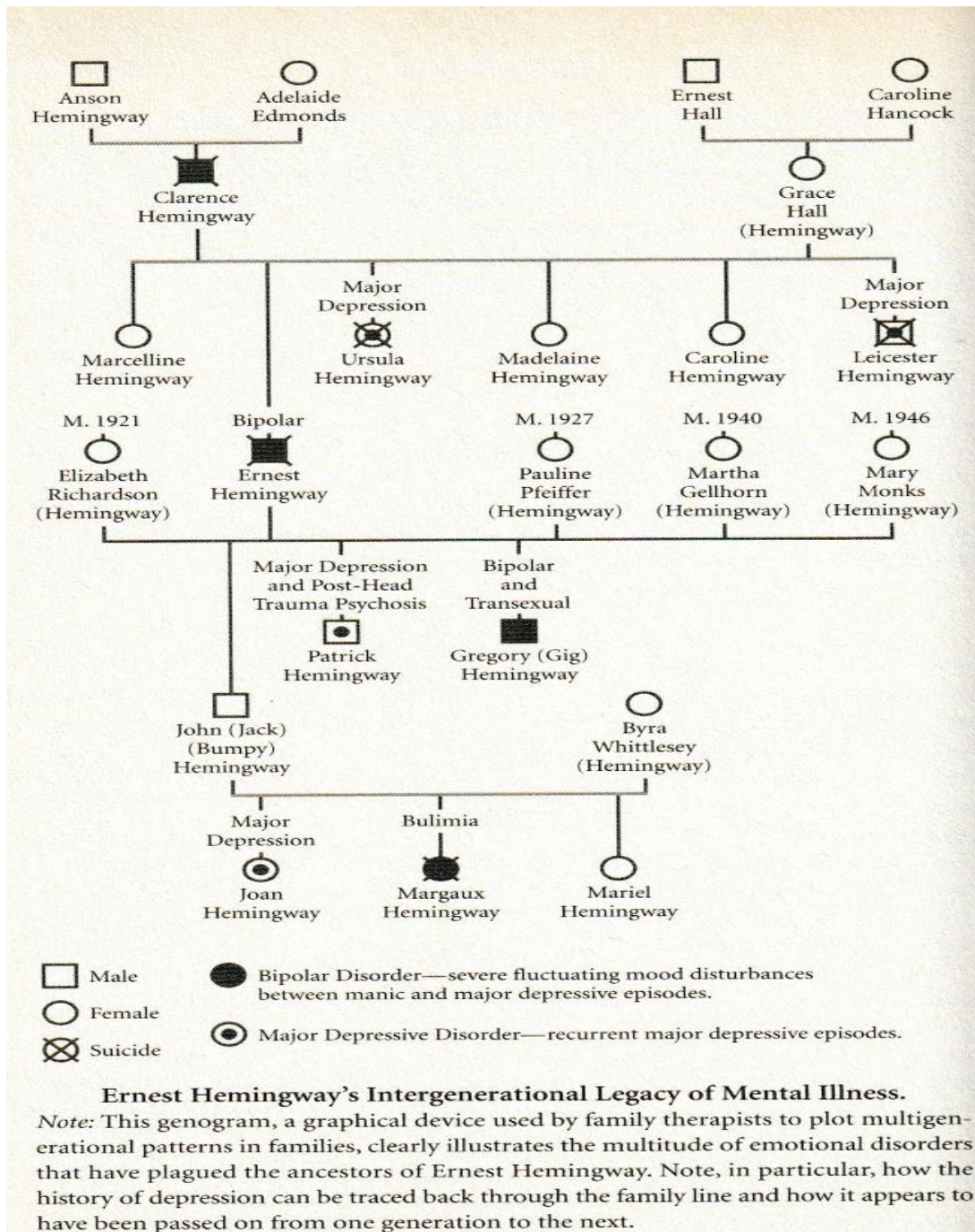
CTE はここ数年、脳震盪との関連で脚光を浴びている変性脳疾患である。CTE は脳震盪が唯一の原因ではなく、低レベルの半脳震盪的な怪我也原因であることがわかった。その原因は、脳震盪等の比較的軽微な脳損傷を繰り返すことにあると考えられているのだが、これまでの報告例は、アメリカン・フットボールやアイスホッケーなどの、いわゆる「コンタクト・スポーツ」^(注5) の選手、あるいは、従軍経験のある兵士に限られてきた。従軍経験のある兵士は爆弾がさく裂した爆風で強度の脳震盪になるからである (李)。

またオマルは、27 歳のイラク戦争での退役軍人の脳内でも CTE を発見した。その退役軍人は、心的外傷後ストレス障害 (Post-traumatic Stress Disorder: PTSD^(注6)) にも苦しみ、後に自殺で亡くなった。ウェブスターの例が報告された 2005 年以降、CTE 症例の蓄積が進み、「変性脳疾患」として認知されるようになった。映画でも描かれているように、オマルは 2005 年の *Neurosurgery* というジャーナルに、ピッツバーグ大学の病理学部門の同僚と共に、「ナショナルフットボールリーグプレイヤーの慢性外傷性脳症」という題名で論文を発表した (*Neurosurgery* 128–134)。

「脳震盪等、比較的軽微な頭部外傷を繰り返すことが行動の異常や人格の変化をもたらす変性脳疾患の原因となる」という CTE の概念が、ようやく医療の領域を越えて一般にもアナウンスされるようになったのは、2007 年以降のことであった。アメリカ医師会は 2016 年、CTE に関する研究に対して、オマルに最高の荣誉である *Distinguished Service Award* を授与した。

第1次世界大戦中の1918年に体験した、ピアーヴェ川近くでの被弾から、1961年の自死に至るまで、多くの作品に医学的言及が描きこまれたのは、自身の体験にもよるものであるが、当時の医学の進歩を自分自身で体験したと離れては語れないであろう。現代の医療技術としてのCTスキャンやMRIは、普段の検診に日常使われているが、ヘミングウェイの生きた時代に、そのような細部にわたる検査機器はエックス線検査をのぞき存在しなかった。ヘミングウェイは出版されている幾つもの伝記にあるように、18歳以降に数多くの事故（怪我）に遭遇している。概観してみても、少なくとも13回の事故（うち、頭部外傷に限れば12回）に遭っている。つまり彼の身体の負傷と頭部外傷は頻繁に繰り返され、損傷を受けていたのである。ファラーはヘミングウェイが50歳頃には脳細胞は回復ができないほど変化しており、遺伝子は時期尚早の衰えがプログラムされていた（Farah 27）と考察しているように、すでに脳の衰退が確実となっていた。

ヘミングウェイが遭遇した事故（怪我）による頭部外傷と、その影響によって生まれた「奇妙な感覚」が、描かれた作品に潜むその内容に着目すると、頭部外傷の影響がヘミングウェイの作品に深くかかわっている可能性が明らかになってくる。ヘミングウェイが体験した頭部外傷と作品に描かれた表現を考察すると、ヘミングウェイはその感覚が脳震盪の影響であること知り、その感覚が描き出す時間と場所が変容した光景を、作家の天賦の才能として作品を描いたことを示している。しかしながら更に作品に描かれた内容と自身の行動を子細に分析すると、そこには既にヘミングウェイ自身も気づかない認知症が作品に現れていたと考えられる。



Kottler, Jeffrey A. *Divine Madness*. San Francisco: Jossey-Bass, 2006. P. 82.より引用

各章における概括

本論文は序章、5章、結論で構成している。序章では、先行研究を踏まえて本研究の背景と目的、研究方法を詳述する。第1章では、アーネスト・ヘミングウェイの「冰山理論」を短編の中に表現されたその理論を丁寧にたどりながら、新たに作品間にもそれが存在することを示す。第2章では、ヘミングウェイがマッチョであるという一般的な型にはまった裏に潜む、あたかも「病気」と「事故（怪我）」が、デパートのごとく存在したことを、生誕（1899年7月21日）から自殺（1961年7月2日）まで、克明に調査し詳細に叙述する。その上でヘミングウェイの経験した「病気」と「事故（怪我）」を軸として軌跡を総括する。第3章からは、ヘミングウェイの受け継いだ「遺伝」と戦争体験（第1次世界大戦）、及び後天的に遭遇した「事故（怪我）」をそれぞれ新たな視線で、二つの章（第3章と第4章）でテキストに描かれている表現の関係性に光を当て論じる。第5章では、第3章で詳述したヘミングウェイの受け継いだ「遺伝」と戦争体験（第1次世界大戦）、及び後天的に遭遇した「事故（怪我）」による脳への影響が作品に表れる変容を示し論じる。

—第1章—

If a writer of prose knows enough about what he is writing about he may omit things that he knows and the reader, if the writer is writing truly enough, will have a feeling of those things as strongly as though the writer had stated them. The dignity of movement of an ice-berg is due to only one-eighth of it being above water. A writer who omits things because he does not know them only makes hollow places in his writing. (*DIA* 192)

第1章では、ヘミングウェイのノンフィクションの作品『午後の死』(*DIA* 1932)に、ストーリーテリングの原理を氷山に擬えて、いわゆる「冰山理論」という考え方を以下の新たな視点で論考する。やや語りつくされた感もある概念であるが、これはヘミングウェイ自身が、ストーリーテリングの理想を氷山に喩えたことに由来しており、その意味するところから「省略の理論（または技法）（“theory of omission”）」とも呼ば

れている。この概念は、水面上に現れる威厳は水面下の8分の7に裏打ちされているというセオリーであるが、ともすれば恣意的に流される可能性も否定できない。しかし対象について寡黙を守ることによって、それを<表現>する。スカードは対象の性格を明らかにするために、当の対象に直ちに該当する言葉を用いず、別のネガティブ（陰画）を用いて、前者以上に効果を挙げるといった技法である（123）と述べているように、直接に語らずとも自ずと表現されている。

本章では、まず「雨の中の猫」（“Cat in the Rain,” 1924）における猫の特定化について新たな視点を呈する。次に、1920年代半ば以降に書かれた「十人のインディアン」（“Ten Indians,” 1927）と「殺し屋」（“The Killers,” 1927）を中心に、それより少し早い時期に書かれた「雨の中の猫」と1930年代の作品である「世の光」（“The Light of the World,” 1933）から読み取れる巧みに仕掛けられた「混乱」と執拗に繰り返される「反復」の意味を探り、「三発の銃声」（“Three Shots,” 編著：フィリップ・ヤング 1972）と「インディアン・キャンプ」（“Indian Camp,” 1924）では短編間における「氷山理論」を新たに提示し論考する。

—第2章—

第2章では、ヘミングウェイの生誕から自殺までを、伝記的記述も援用し、「病気」と「事故（怪我）」をキーワードとして細部に至るまで克明な解析で示し総括する。またもう一つ、後天的な「病気」と「事故（怪我）」の問題もハイライトし、頭部外傷・脳震盪・鬱・飲酒と「遺伝的要因」からもヘミングウェイの作品に影響を与えたと考えられる事象を詳細に取り上げる。

さらに「遺伝的要因」に言及し、「事件」や「事故（怪我）」と作品の関係性を示す。一つは、ヘミングウェイへ世代を超えた鬱の「遺伝的要素」、次に外的要因による五回にも及ぶ脳震盪（外傷性脳傷害）、三つ目は、彼を自殺へと向かわせたと考えられる過度の飲酒、高血圧、そして双極性障害（躁鬱病）に焦点を当てて詳述する。彼の遭遇した様々な「事故（怪我）」を含む事実とともに前述の三つの点を中心に、その「事故（怪我）」に遭った時代に書かれたヘミングウェイの作品を含めてその影響とテクストとの関係性を示す。

—第3章—

第3章では、ヘミングウェイの2つの短編小説集 *In Our Times* (1925) と *The Nick Adams Stories* (編著: フィリップ・ヤング、1972) を用いて、著者の経験と世代を超えて受け継がれたもの=「遺伝」を分析し呈する。ヘミングウェイの体験は、多くの研究者によって書かれた様々な書籍に記録されている。しかし、彼の世代を超えた継承(受け継がれた「遺伝」)は、時折観察されるに過ぎなかった。さらにヘミングウェイの体験に光を当て、精神疾患などの「遺伝」が彼の作品に与える影響を明らかにする。そして、受け継がれた「遺伝」が描かれた作品の表現に、彼がどのような表現を用いたのかに着目し、その上で、ヘミングウェイの両親がヘミングウェイに行った体罰による影響を考察する。最後に、医学的見地から検証された事実とともに領域横断的にテキストとの構造の関係性を明らかにし、ヘミングウェイの受け継いだ「遺伝」とテキストとの関連性を明らかにすることで、作品群の背後に隠されたヘミングウェイの作家としての意識の変遷を辿る。

—第4章—

第4章では、第1章で論じた「氷山理論」に裏打ちされた構造も持つ「身を横たえて」(“Now I Lay Me,” 1927)、そして、「誰も知らない」(“A Way You’ll Never Be,” 1933) という兵士の物語における、戦争を体験したヘミングウェイのテキストに表れる時制を考察し、書くことによって癒されたヘミングウェイの「こころの解放」(=癒し)を追う。

ヘミングウェイの「身を横たえて」で、第一次世界大戦のイタリアで重傷を負った主人公ニックが、その時に受けた爆撃で生死をさまよい、幸いにも一命を取り留めた後、「死」への恐怖にとりつかれた中で、過去形と過去完了形が、共に現れる現在形と重なり合う時、その変遷を丁寧に追いその結果どのような効果が生まれ、語り手ヘミングウェイが語ったこと、また語らなかったことが意味する作品の世界を辿り提示する。

—第5章—

第5章では、ヘミングウェイが遭遇した後天的な「事故(怪我)」による頭部外傷と、その影響によって生まれた「奇妙な感覚」^(注7)が、描かれた作品に潜むその内容に着目し、頭部外傷の影響がヘミングウェイの作品に深くかかわっている可能性を明らかにする。ヘミングウェイが体験した頭部外傷と作品に描かれた表現を、体験した事実とそこに現れる表現を考察する。

—結論—

ヘミングウェイはその感覚が脳震盪の影響であることを知り、その感覚が描き出す時間と場所が変容した光景を、作家の天賦の才能として作品を描いたと考えられる。しかしながら更に作品に描かれた内容を考察すると、そこには既にヘミングウェイ自身も気づかない認知症^(注2)が作品に現れていたと考えられる。第1章で論じた「氷山理論」、第2章で後天的に体験した「事故(怪我)」でヘミングウェイに与えた影響、第3章で受け継いだ「遺伝」の根底に流れるものを提示し、第4章では、ヘミングウェイが最も強い影響を受けた戦争体験を描いた作品における時制の構造から、それがヘミングウェイに与えた影響を論考し、第5章で致命的な脳の変容—慢性外傷性脳症と作品の関係性を詳細に考察し、それぞれの章が結論で紡がれるように纏めた。

第1章

「雨の中の猫」、「十人のインディアン」、「殺し屋」、「世の光」における「冰山理論」形成

1.1 「猫」の特定化

ヘミングウェイの「冰山理論」をふまえ、短編「雨の中の猫」(“Cat in the Rain” 1924)のネコの特定化と、そしてそれが内包しているものを考察する。この作品は1,100語程度のきわめて短いものであるため、一語一語の使われ方が非常に重要になる。作品のあらすじは次のようになる。一組のアメリカ人の夫婦がイタリアのホテルに滞在している。雨の中、妻は窓から階下で見かけたテーブルの下にいた猫が欲しくて、探しにゆくがその猫の姿はみあたらない。夫は、妻の願望をよそにベッドの上で本を読んでいるだけである。ホテルの支配人やメイドは、妻に対して万全のサービスを提供し続けようとする。妻は夫にどれほど自分が猫を欲しがっているかを説明するも、夫に面倒臭がられる。妻が猫を探すという行動に、メイドも支配人も手落ちがないように、そして従順に常に妻の手助けをする。そして、最後は支配人の指示によりメイドが三毛猫を妻のところに持ってくる。

まず、作品のタイトルの“Cat in the Rain”であるが、“cat”であれば、冠詞“a”もしくは“the”が付くと考察するのが順当である。あるいは、冠詞がないのであれば、“cats”と複数形にするべきだろう。ところが、タイトルが“Cat in the Rain”となっているので、そのタイトルには、座り心地の悪い椅子に腰をかけたような何とも言えない不安定な感じがぬぐいきれない。

ところで、作中の猫について、今村楯夫は「猫について、猫がどこに、どのように消えたか、ということをもヘミングウェイは何一つ語っていないのだから、それはそのまま、ただ消えた、という事実のみを読者は知ればいいのだ」(『猫と女たち』107)と指摘する。また、「最初の猫とメイドが持ってきた猫は同じではない」(『猫と女たち』117)とも指摘している。

最初に出てくる猫とメイドが持ってくる猫は、はたして同じ猫なのか、あるいは今村が言うように違う猫なのか。つまり、最初に二階から妻が見たという、雨に濡れな

いようにしている猫と最後にメイドが持ってくる三毛猫が同じであるかという点において、諸説ある。ジョン・ハゴウピアン (John V. Hagopian) はたぶんちがう猫である (232) と述べている。浅若裕彦は議論するまでもなく、違う猫であることは明らかである (20) と述べている。カルロス・ベーカー (Carlos Baker) は同じ猫だと指摘している (*Writer* 135-6)。古樋直己は連れてこられた猫が、子猫でなかったことは、妻にとって自分の見た猫と同一か異なるのかというよりも、自分の中で理想化された猫と違っていたことが重要なのである (93) と述べている。同氏は同定化までは述べていない。デヴィッド・ロッジ (David Lodge) は断定が出来ない (11) としている。ロッジの説について、大沼雅彦はロッジの説に軍配を上げざるをえない (『文法的一面』92)、また後の論文で、諸説の中では、ロッジの説に首肯しうる点のある (『文法再論』48) と述べている。この様に、これまでに決定的な解釈は出されていない。言い換えれば、作者ヘミングウェイは、どちらの解釈も出来るような曖昧な書き方をしていると考えられる。

この猫の特定化の困難さは、作品のタイトル“Cat in the Rain”から受けた不安定さと共通の根から生まれている。つまり、タイトルの“cat”に冠詞がついていないこと、あるいは“cats”となっていないことは、作者ヘミングウェイが猫の特定化を困難にしているのと同じ意図から出ているのだ。

さらにこの種の不安定さを表現しているものとして、妻に対する表現の変化がある。妻の表現としては、最初に“the American wife” (OT p.91, 1.18; 22) が2回あり、次に“the wife” (OT p.92, 1.2; 5; 8) が3回あり、“the American girl” (OT p.92, 1.27; 36. p.93, 1.2) が3回ある。そして、“the girl” (OT p.93, 1.4) が1回あり、最後のページでは“his wife” (OT p.94, 1.8; 12-13) が2回ある。

アメリカ人の妻を、「アメリカ人の妻」と「その妻」から、「アメリカ人の若い女性」と「その若い女性」と呼称を変えることで、作者はこの妻が内面的に大人から若い女へと変わったことを暗示しようとしている。そして最後に「その若い女性」から「彼の妻」へと変わったことは、この妻が若い女性から大人の女性にその内面において変わったことを暗示している。換言すれば、作者がその妻を心理的に不安定な女性として描こうとしていることがわかる。

次に猫の“kitty”と“cat”という呼称についても、やはり不安定さを表現している。“kitty”という語を『ジーニアス英和大辞典 第5版』、『プログレッシブ英和中辞典 第5版』、『リーダーズ英和辞典 第2版』、『ランダムハウス英和大辞典 第1版』、『Webster's New World Dictionary』で調べると、「子猫」あるいは「猫」をあらわしている。“cat”は猫科猫族の動物の総称である。つまり“cat”は猫全体の総称であり、“kitty”はその猫全体の中で「子猫」あるいは「猫」を意味する。この作品の中に“kitty”が現れるところが以下のようにある。まず、“that kitty” (OT p.91, 1.22) が1回、“that poor kitty” (OT p.93, 1.15) が1回、“the poor kitty” (OT p.91, 1.25) が1回、“a poor kitty” (OT p.93, 1.16) が1回、“a kitty” (OT p.92, 1.32. p.93, 1.36. p.94, 1.4) が3回で、“kitty”は合計6回表れる。

次に“cat”は以下のように表れる。“a cat” (OT p.91, 1.19. p.92, 1.27; 28; 30. p.94, 1.10; 11) が同じ行に2回表れるのを含めて9回、“the cat” (OT p.91, 1.20. p.92, 1.15; 23. p.93, 1.9) が4回、“a big tortoise-shell cat” (OT p.94, 1.17) が1回で、“cat”は計14回出てくる。

“kitty”は「夫と妻の会話」と「メイドと妻の会話の中」に現れる。一方“cat”は「情景描写の中」、「メイドと妻の会話の中」、そして「妻と夫の会話の中」に現れる。少なくとも p.92 1.26 までは、同じ猫を“kitty”と“cat”で表している。しかも“the American wife”と“the American girl”の会話の中で“kitty”と“cat”がともに使われている。これもヘミングウェイが、猫を特定のイメージで描こうとしていないことを表している。言い換えれば、猫のイメージの不安定さを意図しているのだ。その不安定さは、前述のとおり、この作品の中で妻を表す表現が、“the American wife”、“the American girl”、“the wife”、“the girl”の4種類に分かれているのと同じである。

さらに“kitty”につく指示語と形容詞をみると、上で示したように、指示語“that”がついているところが2か所と、形容詞“poor”がついているところが3か所ある。詳しくみると、1回目の“that kitty” (OT p.91, 1.22) の3行後に“The poor kitty” (OT p.91, 1.25) と表記されている。また、2回目の“that kitty”の次の行に“a poor kitty” (OT p.93, 1.16) と表記されている。作品の流れからみると、この2回目に表れている“a poor kitty”は“the poor kitty”と描くことも可能なのに、あえて一般化して、イメージを一貫して提示するのを避けようとしている。このことから、ヘミングウェイは猫のイメージの不安定さを意図している。

1.2 「妻」の望むもの

作中でメイドはイタリア語で“Ha perduto qualche cosa, Signora?” (OT 92) と言っている。これを英訳すると、“Have you lost something, Madam?”となる。この文から後の10行、つまり“‘I suppose so,’ said the American girl.” (OT 92) までの間の時間経過はメイドのイタリア語での質問の文が表すように、過去のある時点で何かをなくしたまま現在に至っている。語り手の視線が、何かをなくした過去の“the American girl”から現在の“the American wife”へ途切れることなく継続している。つまり妻のことを、語り手が、妻の「過去」の姿“the American girl”、そして“the girl”から、現在の“the American wife”あるいは“the wife”を時間が経過することで暗示するためである。

「過去」の妻の姿を暗示するためだと考えられる理由は、この作品中で使われている動詞“want”の使われ方にある。“want”という語はこの短編の中で、都合17回使われている。さらに詳しくみていくと現在形が11回、過去形が6回使われている。この6回の過去形の“wanted”の主語は、一つの例外を除いて、すべてI (=妻) である。その一つの例外では“‘She liked the way he wanted to serve her.’” (OT 92) と、主語が“he”であるが、ここで“wanted”と過去形が使われているのは、“liked”と時制の一致のためであり、例外的な状況だと考えられる。従って、今回の考察の対象から外しても良いと思われる。

同じ行に2回も表れるのを含めて、その5回表れる“wanted” (OT p.92, l.30; 31. p.93, l4; 15) は、例えば、“‘I wanted it so much,’ she said.” (OT 93) のように、“said”と共に用いられている。つまり、妻が“wanted”したのは“said”よりも「以前の過去」だったことを表している。妻の「以前の過去」の願望を表しているのだ。“wanted”が使われている場面では、先に指摘したように妻が“girl”と表されている。だから“girl”は、“wife”より「以前の過去」の妻の姿を暗示していると考えられる。そして「以前の過去」における妻の願望が表されている場面で、以下の語りがある。

As the American girl passed the office, the padrone bowed from his desk. Something felt very small and tight inside the girl. The padrone made her feel very small and at the same time really important. She had a momentary feeling of being

of supreme importance. (OT 93)

この文を素直に解釈してみると、次のようになる。宿の主人は、当地の文化と違うアメリカからやってきた女性を、きちんと世話をしようと考えている。宿の主人のその計らいや動作により、その主人の視線を感じて、女性は自身の中に「とても小さくて引き締まった」(=“very small and tight”)ものを感じる。宿の主人の振る舞いが、アメリカ人の妻に自分がとても小さなものであると感じさせる。すなわち、ヨーロッパのような長い歴史のないアメリカからやってきたことを感じさせると考えられるのだ。また同時に宿の主人の対応に接して、妻は自分がなにか偉くなったように感じたのである。宿の主人の振る舞いが、何か自分がとても“supreme importance”な存在であるように感じさせたのである。そうした感覚が“tight”と表現される。つまり、宿の主人の部屋の前を通り、2階にある自分の部屋に戻るほんのつかの間の妻の心の動きを描いた部分と解することが出来る。

しかしヘミングウェイの「冰山理論」を考えると、“very small and tight”が別のものにみえてくる。それは“kitty”という語の使われ方からもわかる。“kitty”という語の使われ方をみると“kitty”はすべて妻の会話の中に表れる。その場合主語は“the American wife”、“the American girl”、“the girl”そして“the wife”の4つある。まず作品の最初で妻(=“the American wife”)が窓から見つけた猫を“kitty”と2回言う。次にメイドとの会話の中で妻(=“the American girl”)が“kitty”を欲しいと1回言う。この文の前の妻は“the American girl”と表されている。それがこの文の中では妻は“the girl”と表されている。そして、この文の後に次のくだりがある。夫が妻(=“the American girl”)に“Did you get the cat?”(OT 93)という問いに対して妻(=“the girl”)は2回“kitty”を使っている。その後、夫との会話の中に“kitty”は2回使われている。このように執拗に妻はメイドにそして夫に“kitty”が欲しいと言う。

妻の「以前の過去」であった“girl”が“wanted”していたもの、その「願望していたもの」が“kitty”すなわち新しい生命であると考え。そして“girl”は自分の中で“very small and tight”なものを感じるのだ。つまり“girl”は受胎を感じたのである。つまり、先ほど指摘したように、妻が“wanted”したのは“said”よりも「以前の過去」だったことを表し

ている。妻の「以前の過去」の願望を表しているのだ。ヘミングウェイがこの作品で、“want”の過去形を使うことにより、“very small and tight”という受胎を感じ取ったアメリカ人の女性を表現したのだ。この文について、今村楯夫は次のように指摘している。

「小さな固いもの」が一体何なのかは不明である。子猫を膝の上に抱いてみたい、という願望と重ねて、あるいは子猫に執拗にこだわる心と重ね、さらにさまざまな「もの」を欲する心情も重ねて二つの仮説が成り立つ。一つは、即物的に「小さな固いもの」を胎児とみなし、この女性がすでに妊娠しており、それを自分の内に感じ取ったのだ、と考える説である。もう一方で、全く逆に、「固いもの」を感じたのは、あくまで彼女の妊娠願望の投影であり、子猫に対する異常なこだわりは、その願望の無意識的な代償行為を裏付けるものである、という説が成り立つ。（この妊娠説と妊娠願望説は、これまでも多くの批評家が問題とし、大きく意見の分かれるところであるが、いまだ決定的な論は出ていない。）（『猫と女たち』120）

二つの仮説のうち、今村は「小さな固いもの」が胎児である（『猫と女たち』120）と指摘している。妊娠願望という二つ目の仮説については、高野泰志は妻の髪の毛から言及して以下のように述べている。

髪を長く伸ばしたいという女性の願望は、妊娠したいという隠れた願望の発露であると考えられる。つまり髪の長さが妊娠能力を指し示しているのである。

「少年のように刈り込まれ」た髪型ではなく、もっと女性らしい髪型をすることで、もっと女性になりたい、自分が女性であることのジェンダー・アイデンティティを再認識したいという願望を、すなわち妊娠して子供を生みたいという願望を表すことになるのである。（『引き裂かれた身体』234）

上述したようにこの文を子細にみてゆけばやはりここにも確定のできない不安定さがある。作品からは素直に読み取れることと、妊娠あるいは妊娠願望ともとれるよう

に、作品に潜む不安定さが表れるのだ。また、妊娠ということは肉体的にも精神的にもかなり不安定な時期なので、「アメリカ人の妻」や「アメリカ人の若い女性」という不安定な表現で、妻を表したのだ。この点においても作者ヘミングウェイが不安定さを意図していると読み取れる。

1.3 透けて見える不安定さ

この作品にインスピレーションを与えたと思われる行動を作家ヘミングウェイはしている。実際にヘミングウェイは、雨の降るイタリアのラッパロ (Rapallo) のホテルに、妻ハドリーと投宿していたのである。その時期は 1923 年 2 月 18 日頃である (SL 79)。

雨のホテルのイメージと作品の持つイメージが醸し出すじめじめとした雰囲気と、薄暗く感じるものは、ヘミングウェイがガートルード・スタイン (Gertrude Stein) に宛てた手紙の中の“The weather is good today after seven days muggy.” (SL 79) ということから、そして、また、この建造物は当初ホテルとして建設されたのではなく、中世の男性用の修道院 (monastery) を改装してホテルとして利用されていたことから想像できる。中世の修道院は、また、当時の医療機関の役目も兼ねていた。高橋保行によると、修道院は「社会福祉の面を初めとして社会生活改善に役立っていた。教育施設や病院設置などだけではなく、変わったところでは、修道院が刑務所の役割を果たした」(105) ということである。この短編「雨の中の猫」はまさしくそのような場所と雰囲気が舞台になっていた。

フィッツジェラルド宛に書いた次の様な書簡がある。その手紙の日付は 1925 年 12 月 24 日である。

Cat in the Rain wasnt about Hadley. I know that you and Zelda always thought it was. When I wrote that we were at Rapallo but Hadley was 4 months pregnant with Bumby. [...] Hadley never made a speech in her life about wanting a baby because she had been told various things by her doctor and I'd – no use going into all that. (SL 180)

この書簡の中で、ヘミングウェイはこの宿に滞在していた時のハドリーは妊娠4か月だったから、この作品の中のアメリカ人の妻はハドリーではないと伝えている。また、ハドリーは子供を欲しがったとは言っていないと言っている。作家が言うことをそのまま信じることもできないが、仮に作者ヘミングウェイの言葉通り、作品の中のアメリカ人の妻がハドリーではないとしてみよう。ヘミングウェイはフィッツジェラルドに、作品の中で描いた女性は、ハドリーと共にイタリアに旅行していた時期と妊娠の期間が合わないので、ハドリーではないと否定しているわけである。あるいは、また、作品のアメリカ人の妻は妊娠していないから、ハドリーではない、と言っていると解釈することもできるのである。このあたりにもやはり不安定さが見て取れる。

ところで、ハドリーの受胎時期について考えてみると、ヘミングウェイとハドリーの第一子が1923年10月10日に生まれていることから、1923年1月の第1週または第2週あたりであったことが予測計算される。作品の題材になったイタリアへの旅行が1923年2月18日頃である。つまりヘミングウェイの第一子の誕生日から逆算して、おおよそ考えられるその頃の妊娠時期はおそらく妊娠2か月弱（7週前後）であると推測される。産科の医学書によれば、医学的に妊娠（妊娠期間）、出産について次のように定義されている。

医学的にはWHOの提案する方法が用いられており、これによれば最終正常月経第1日（開始日）を起算点とし、すべて「満」で計算します。[...] 統計データによると、ほとんどの妊娠は 280 ± 15 で出産に至ります。したがって、正常妊娠維持期間を280日とし、これを10で割った28日を妊娠歴の1か月と定めます。つまり、分娩予定日は正常月経第1日の280日後（満280日）、妊娠40週0日となります。（可世木 11）

このようなことからヘミングウェイがフィッツジェラルドにハドリーは妊娠4か月なので、作品の中のアメリカ人の妻はハドリーではない、と否定しているのは、先ほどの計算からもわかるように、おそらくヘミングウェイの妊娠期間の計算の誤りか、

あるいはあえて不正確な妊娠期間を意図的にフィッツジェラルドに伝えたのではないかということが考えられる。

いずれにせよ、ヘミングウェイがフィッツジェラルドにハドリーは当時妊娠4カ月だったと言うことにより、作品中のアメリカ人の妻とハドリーとを切り離して考えることをフィッツジェラルドに求めていることは間違いない。そしてヘミングウェイのハドリーの妊娠期間の計算の誤り、あるいは意図的に不正確な妊娠期間を伝えたとしても、フィッツジェラルドには意識を切り離すように仕向けているにもかかわらず、ヘミングウェイは自分の意識の中で作品の中のアメリカ人の妻と妊娠を結びつけていることから、この作品の中のアメリカ人の妻は実は妊娠していたということを言外に認めていることを読み解くこともできるのだ。その根拠としては、あえてハドリーが妊娠4カ月だからと否定していることと、ハドリーは「子供を欲しがったこと」がないと、ヘミングウェイが語っているからである。つまり、ヘミングウェイの意識の中では、作品中のアメリカ人の妻と妊娠とは結びついているからだとも考えることもできる。ひるがえって、作品のアメリカ人の妻が妊娠していないと考えると、前述の「以前の過去」における妻の願望が表されているとも考えることができるのである。フィッツジェラルドへの書簡の中で、ハドリーは妊娠4カ月なので、作品の中の女性はハドリーでないと言うことにより、あるいは前述した「以前の過去」における妻の願望を表すことにより、作品の中のアメリカ人の妻は、実は妊娠していたのではないかと思わせるように、事実と願望を混在させることにより、作者ヘミングウェイは意図してより一層不安定さを表現したと考えられるのである。

1.4 「猫」が示すもの

作品の後半部分では、猫を手に入れることをひたすら願望する妻と夫がいさかひになる。そこへメイドが支配人から持って行くように言われた三毛猫 (a big tortoise-shell cat) が届くわけである。あれほど猫を欲しがっていたアメリカ人の妻の前に三毛猫という形で物理的に姿を表したわけである。なぜ、“a cat”、“the cat”、“a kitty”、あるいは“the kitty”ではなく、“a big tortoise-shell cat”なのであろうか。アメリカ人の妻が欲しがっ

ていた猫を、簡単に“a cat”とすればよいはずである。また、これまでに出てきた猫 (cat) は“a cat”、“the cat”であり、“big”という形容詞が付いていない。“a big tortoise-shell cat”で“big”が付いているということは、前述した猫の同定化についても、最初に出てきた猫と同じ猫だと同定化することが困難であることが、ここでもわかる。最後になぜヘミングウェイが最後に“a big tortoise-shell cat”という語を使ったのかを考察する。

ラッパロに宿泊当時、既にハドリーは妊娠しており、ヘミングウェイもその事を知っていた。しかしヘミングウェイは自分の子供を望んでいなかったのだ。メイドがその三毛猫を持ってくるときのしぐさが、“She[maid] held a big tortoise-shell cat pressed tight against her and swung down against her body.” (OT94) と語られている。妊婦のようにあたかも重い荷物を自分のお腹のところで抱えて持っているような格好で、メイドが“a big tortoise-shell cat”を妻のために持ってきた。その語りからは、いかにも妊婦が想像できるのだ。さらにヘミングウェイは、この短編の最後で、““Excuse me, ” she said, “the padrone asked me to bring this for the Signora.”” (OT94) と三毛猫を“this”と表現した。メイドが支配人から携えられた三毛猫を最後には、“cat”あるいは“kitty”と言わないで、“this”と表すのだ。もちろん英文の構造の中でこの“this”は表面上特異な表現ではない。ただ、作者ヘミングウェイの理論から推測すると、“this cat”、“this kitty”あるいは“this tortoise-shell cat”とは表現していないのは、また、メイドが宿の主人から頼まれた三毛猫を、まるでなにかの物体でも扱うような表現で終わっているのは、そこに様々な解釈ができる余地をとともに残しているのである。言い換えれば読者に解釈を委ねているとも考えられるのである。この短編の大きな特徴がそれである。

“a tortoise-shell cat”は三毛猫である。“tortoise”の原義をみると、中期フランス語“tortues”（カメ、“tortue”の複数形）より発生し、その意味の一つに「悪魔のような動物」がある。ハドリーの妊娠がわかったときのヘミングウェイの正直な感想を、ヤングは次のように推測している。

Then, too, Hadley was “enceinte,” in the phrase of the time; according to Miss Stein the young writer was a little bitter about this (Young 138) .

とすれば、これからもいろいろな経験をして、様々な作品を書こうと思っていたその当時のヘミングウェイは生まれてくる子供を、執筆の邪魔になり全くいらぬもの、そして、不要なものということで、「悪魔のような動物」として扱ったと考えることもできるかもしれない。当時ヘミングウェイは23歳、ハドリーは31歳だった。ハドリーは十分に子供を産んでよい年齢であるが、ヘミングウェイは自分が子供を持つには、まだあまりにも早すぎると考えていたと推察される。これから生まれてくる子供が、創作、執筆活動に支障をきたすので「悪魔のような動物」とも見なし、そして“this”という語でその気持ちを表し最後まで読者に解釈を委ねたのである。つまりヘミングウェイは生まれてくる子供を、この原義「悪魔のような動物」を入念に作品の中へ埋め込んだとも考えられるのだ。それはこの作品のタイトルに始まり、猫の特定化を阻む数々の表現の変化、妻の願望を作品の中で何度も繰り返すことなどにより表現されている。また、作品の視点の配置を俯瞰的、アメリカ人の妻、メイド、宿の主人、そして夫というように、いかにも錯綜するように様々に配置したのである。作者ヘミングウェイは作品に入念に埋め込んだ表現により、言葉を変えていけば、8分の7を隠すことによって逆に浮かび上がり、醸し出される作品の醍醐味を読者に味わわそうとしたのである。我々読者はその幾重にも隠された不安定な8分の7を推理し、かたち作らなければならない。

作者ヘミングウェイは、読者がより面白くこの作品を読むことができるように、緻密に計算された表現を配置したのである。ヘミングウェイにとって猫という最も好きな動物ではあるが、ここでは三毛猫という形で現れた猫を執筆の邪魔になり全くいらぬもの、不要なものとして使い、最後まで不安定なまま残したと考えられるのだ。

1.5 仕掛けられた「混乱」と「反復」

ポール・スミス (Paul Smith) によれば、「十人のインディアン」は完成まで、1925年 (KL/EH 202 C) ^(注8)、1926年 (KL/EH 728, 729) ^(注9)、そして1927年 (KL/EH 730) ^(注10) に書かれた3つのヴァージョンが存在している (*Reader's* 197-98)。1925年のヴァージョンは、プルーデンス (Prudence Mitchell) の裏切りはなく、ニック (Nick Adams)

にとり幸せな深夜の逢瀬で終わる物語である。1926年のヴァージョンには、父がニックにブルーデンスの裏切りを伝えた内容の“A Broken Heart”という仮のタイトルとともにここで初めて“Ten Indians”というタイトルが考えられた。そして、1927年のヴァージョンでは、“After the Fourth”という仮のタイトルが付けられていた。スミスは、“After the Fourth”ではニックの眠れない夜が描かれており、1927年に出版された“Ten Indians”の内容で語られている（*Reader's* 197-98）と言及している。「十人のインディアン」は7ページ程度の短編である。また、この作品はニックの失恋を通した、ヤングの指摘するイニシエーションの物語と位置付けることができる（*Reconsideration* 31）。

物語は、ニックが独立記念日にジョー（Joe Garner）の荷車に乗せてもらい、独立記念日の行事の帰路から始まる。帰路ニックは泥酔して道に寝ているインディアンをジョーが道の端まで運んでいるのを見ている。ガーナー家の家族はニックがブルーデンスと親しくしているのをからかう。ガーナー家の夕食の誘いを断り、父の待つコテージへと急ぎ帰る。父と夕食を取りながら話していると、その日の午後、ブルーデンスがフランク（Frank Washburn）との逢瀬を楽しんでいたことを聞く。ニックは失恋を経験し、翌朝目覚めた時、自分の心が砕かれているのを思い出したという物語である。

この作品に現れる「混乱」は、タイトルが「十人のインディアン」であるにもかかわらず、7月4日の夜道端に酔って寝てしまっているのは九人のインディアンで、作者ヘミングウェイは作中で十人目のインディアンを明らかに示していないということである。作品の中でオジブウェイ・インディアンのビリー（Billy Tabeshaw）の名前がジョーの息子のカールから語られるが、同じく息子であるフランクは見なかったと荷車の中で話していることから、読者の「混乱」を誘うかのように、ビリーの名前が出たものの十人目のインディアンではないと考える。家で食事をしている最中ニックは、父からその日の午後のフランクとブルーデンスの逢瀬を知ることになる。父がその日の午後実際にブルーデンスを見ていたこと、また、前述した3つのヴァージョンに示されるように、ブルーデンスが軸になり書き換えられていることの2つの点から、ブルーデンスが十人目のインディアンであるとみなしてよいと思われる。スミスを始め多くの研究者も十人目のインディアンはブルーデンスであると断定している（“Tenth” 68; Tilton 80; Lewis 203; 日下 27）。ただ、十人目のインディアンはニックがブルーデ

ンスを恋人だと思い自分と同化しているとして、主人公ニックを十人目のインディアンだと主張する意見もある（野依 86）。

「世の光」にも同じような「混乱」が現れる。語り手と思われるニックはトム (Tom) と北ミシガンの町のバーでいざこざをおこし、町を出るために駅へ向かう。電車を待つ駅の待合室には白人が 6 人、インディアンが 4 人、そして娼婦が 5 人いた。二人の娼婦のはかない恋心が、一人の元ボクサーの思い出話に語られる物語である。

1933 年、ハバナに滞在していたヘミングウェイは、ギングリッチ (Arnold W. Gingrich) に宛てた手紙に、「世の光」は、モーパッサン (Henri René Albert Guy de Maupassant) の「テリエ館」(“La Maison Tellier,” 1881) の売春婦の物語よりとても面白い物語だ (SL 393) と記している。ヘミングウェイ自身この作品についてかなりの自信があったように思われる。

この作品でも人数の齟齬で「混乱」が現れる。それは電車を待つ駅の待合室の人数である。白人が 6 人、インディアンが 4 人、そして娼婦が 5 人いた。しかし、再度の情景描写ではインディアンが 3 人になっており 1 人消えている。この 4 人から 3 人へと減ったインディアンについて論考は少ない。その当時のインディアンの置かれた状況や行動がしっかりと描かれていて、どこかへ去ったインディアン (千葉 153) とする考察や、切符を買って外へ出て、プラットフォームへ向かった (Hannum 324) と言及するものもある。あるいは正直な 3 人のインディアン (Reader's 261) と最初から減数に言及していないものもあり、消えた 1 人のインディアンについての明確な解釈はいまだなされていない。

「混乱」は、「殺し屋」の中にも現れる。この作品はハリウッドを含め、過去三回映画化されている。もっとも古いものが、1946 年のシオドマク (Robert Siodmak) 監督によるもので、次に 1956 年の旧ソビエトのタルコフスキー (Andrei Tarkovsky) 監督のもの。三つ目は 1964 年のシーゲル (Donald Siegel) 監督によるもので、過去の内容を表現するためにフラッシュバック^(注11)という技法を使ったことでも知られている。3 本の映画では「殺し屋」では語られていない部分、つまり隠された 8 分の 7 をそれぞれ異なった内容で映画化している。

この作品は禁酒法の時代、舞台はイリノイ州にあるサミットという町での物語であ

る。アル (Al) とマックス (Max) という二人の殺し屋は、夕食を食べにくるはずのスウェーデン人のアンダーソン (Ole Anderson) を殺すために食堂へやってきたが、やってくるはずのアンダーソンはやってこず、失敗に終わり食堂を後にする。その事をニックはアンダーソンに伝えにゆくが、アンダーソンは動こうとせずただ死を待つのみであった。そういった状況にニックは耐え切れず、町を出てゆくことを決意するという物語である。作品の「混乱」は次のように始まる。

“I’ll take ham and eggs,” the man called Al said. ...

“Give me bacon and eggs,” said the other man[Max]. ... (NAS 59)

“Which is yours?” he [George] asked Al.

“Don’t you remember?” [Al]

“Ham and eggs.” [George]

“Just a bright boy,” Max said. He leaned forward and took the ham and eggs.

Both men ate with their gloves on. George watched them eat. (NAS 59-60)

アルが注文したのは“ham and eggs”でマックスが注文したのは“bacon and eggs”である。そしてジョージ (George) が、念を押すようにアルが注文したものを再度“ham and eggs”と言うのだが、それにもかかわらず、マックスはアルの注文した“ham and eggs”を無造作に食べる。ジョージは二人が互いに注文したサンドイッチと違う方の手袋をはめたまま食べる様子を観察するかのようじっと見ている。このことから二人の殺し屋も同様に極度の緊張状態であると読み取ることができる。また、対話している人物を “one of the man”, “the first man”, “the second man” や “the other man” と特定を困難にして、あたかも隠ぺいするかのようじすぐに判別できない「混乱」の工夫が施されていると考えられる。「混乱」はさらに時間の「混乱」へと続く。

George looked at the clock on the wall behind the counter.

“It’s five o’clock.” [George]

“The clock says twenty minutes past five,” the second man [Max] said.

“It’s twenty minutes fast.” [George] (NAS 58)

正確な時計の時間は時計の示す時間の 20 分前である（以下、カッコ内は正しい時間を示す）。つまり、壁の時計は 20 分進んでいる。この後、時間の「混乱」は次のように執拗に「反復」される。

George looked up at the clock. It was a quarter past six [5.55].

The door from the street opened. A street-car motorman came in. (NAS 63)

George looked at the clock. It was twenty minutes past six [6.00].

“That was nice, bright boy,” Max said. “You’re a regular little gentleman.”

“He knew I’d blow his head off,” Al said from the kitchen.

“No,” said Max. “It ain’t that. Bright boy is nice. He’s a nice boy. I like him.”

At six fifty-five [6.35] George said: “He’s not coming.” (NAS 64)

Max watched the mirror and the clock. The hands of the clock marked seven

o’clock [6.40], and then five minutes past seven [6.45]. (NAS 64)

ジョージが時計を見ると 6 時 15 分（5 時 55 分）だった。そこへ市電の運転手が入ってきた。扉が開いた時、店内は緊張したに違いない。再びジョージが時計を見ると 6 時 20 分（6 時）である。夕食のメニューが注文できる時間である。「殺し屋」とジョージの間に交わされるわずかな対話の後にジョージが時計を見る。6 時 55 分（6 時 35 分）である。時間の経過は、殺し屋たちとジョージの対話の中だけに現れる。35 分間二人のこのわずかな数行の対話に圧縮され、時間経過の違和感が物語に異様な恐怖感を与える。ジョージがアンダーソンは来ないだろうと言う。そして時計は 7 時（6 時 40 分）を示す。ジョージが見る時間の主語は“it”であったが、殺し屋たちが鏡を通して時計を見ると、“The hands of the clock”とあるように時計の針が主語になっている。

とりわけこの作品の場合には、この繰り返しが切迫した緊張感を盛り上げる(西尾 81)。読み手はその都度時間の経過を再考/再計算しながら作品を読まねばならない。Llosaの言うように、語り手は情報を隠すが、その隠された情報がかえって雄弁に語りかけ、読者が入手した材料をもとに仮定と推測を通して物語の空白部分を埋めて行かなければならないように想像力を刺激する (Llosa 122)。

すなわち、すでに論じた時間の混乱で、作者ヘミングウェイによって読者にその混乱で作品に描かれていない部分である殺し屋たちの持つ緊張感が想像させられ、店内にいる者や店にやってくるの者の状況から、いやがうえにも更なる張り詰める緊張感が作品に漂うのである。

作品の中で二人の殺し屋たちの対話の中に“bright”という語が 30 回繰り返される。表現は、“bright boy”が 21 回、“a bright boy”が 3 回、そして、“a pretty bright boy”、“another bright boy”、“my bright boy”、“the two bright boys”、“full of bright boys”、“the bright boy’s name”がそれぞれ 1 回現れる。対話や場面状況などで「反復」される“bright”にさまざまな語が接続され構成されている。殺し屋が“bright”を何度も繰り返すことで、「混乱」が生じ殺し屋が“bright”ではないと含意される。つまり、「反復」される殺し屋の言葉がアイロニーとして徐々に「混乱」し間の抜けたものを感じ始めるのだ。

前項で考察した「雨の中の猫」でも「混乱」と「反復」が現れていた。武藤の言葉を使えば、これは選択された物・情景の「変奏反復」の効果といえるだろう。「変奏反復」は「変奏」の効果によって連続性と変化を示し、かつ反復の効果によって人生と世界の明暗のメタファーとなるのだ。何気ない道具立てが言及される毎に次第に意味深くなっていくというヘミングウェイらしい技巧といえるだろう(『印象と効果』305)。この「反復」をカウイン(Bruce F. Kawin)は、次のように解説する。

Hemingway uses repetition constructively, in style and plot, to reinforce the solidity of his objects, emotions—such as they emerge—and preoccupations; he castrates his characters not with repetition but with some personal plot-linked idiosyncrasy. The state his characters are in after he has castrated them, however, is analogous to the state brought about in the emotional memory by a process of destructive repetition that I choose to call

“falsification of reality.” (Kawin 26)

カウインは、ヘミングウェイの「反復」の技法を“falsification of reality”と呼ぶ。ヘミングウェイは先入観をより効果的に維持させるために「反復」を使っていると断言している。つまり、「反復」に徐々に抵抗できなくなり身をゆだねてしまうのである。あたかも神秘的な魔力を付与されているかのように、反覆され、語りかけられることによって幻想的な強度を獲得する（プラツ 81）。

1.6 作品間における「冰山理論」

『午後の死』の中で示された「冰山理論」を考えると、今回取り上げた短編には「混乱」と「反復」の技巧が入念に練り上げられていることがわかる。プラツは、彼[ヘミングウェイ]は[反復]される言葉によって物を取り込む。…ヘミングウェイはセンテンスを半分だけ綴ると、顔の表情と、唇のぴくつくさまを素描する。そしてそれだけだ。しかしこの、それだけだが全体の状況に光を投げかける。最小の手段を用いることによって、最大の喚起を呼び起こすこと（92[]は筆者）と指摘している。ヘミングウェイの表現形式は計算の結果であり、厳密に言えば無意識で単純なものではない。彼の表現形式は、それで、劇的な工夫であり、彼が意図して与えようとする全体の効果に適応性があるために作り出されたものである（Brooks & Warren 311）。

ロッジは、英作文を作る場合、同じ語を何度も使うとき教師から異なった語や表現を使うように指導される。また、同じ語を何度も使うことは教養がないと言われることにもつながる。すぐれた文学的文章の伝統的なお手本に従うなら、文章には「優美な変化」を持たせなければならない。何かに二度以上言及するときには、二度目は別の言い方を考えるべきであって、構文にも同じく変化をつけるべきである。しかしヘミングウェイは伝統的なレトリックを拒絶し、そのような「美文」は経験を嘘に変えてしまうと考え、単純な、文彩を配した明示的な言葉使いによって「現場で本当に起きたこと、実際に経験した感情を生み出した実際の出来事」を書こうと努めた（Lodge 90）と指摘している。

The traditional model of good literary prose requires “elegant variation”: if you have to refer to something more than once, you should try to find alternative ways of describing it; and you should give your syntax the same kind of variety. ... Hemingway, however, rejected traditional rhetoric, for reasons that were partly literary and partly philosophical. He thought that “fine writing” falsified experience, and strove to “put down what really happened in action, what the actual things were which produced the emotion that you experienced” by using simple, denotative language purged of stylistic decoration.(Lodge 90)

「反復」で表現しようとする物をより正確にそして克明にすることをスタインから習ったとヤングは考察している (*Reconsideration* 190)。一語一語の組み合わせは単純なものではなく、その語の最も役割を果たす位置に配置されているのだ。

作品の中で密接に結び付くさまざまな「混乱」と執拗に繰り返される「反復」は、まさしく幾重にも重なる色で構成される版画である。版木の色を幾重にも重ね合わせることで、一色（一枚）だけでは意味を持たなかったものが、重なりあうことで一枚の版画がみごとに完成するのに似ている。「混乱」と「反復」の構成により、分からなかった情報が細部まで明らかになるのだ。注意深く思惟して読んでいかないと気づかず見過ごされてしまう「混乱」と「反復」が、計算された「意図するもの」になるとき、水面に現れている 8 分の 1 を支えるのだ。

更に「冰山理論」を考察する際、単一の物語の中でそれを表現しているものが今までの研究である。前田一平を始め先行研究では、「三発の銃声」は『ニック・アダムズ物語』で遺稿出版されたが、もともと草稿では「インディアン・キャンプ」の前半部分として、ひとつのストーリーを形成していた。1924年に『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載すべく提出された「インディアン・キャンプ」（ただし雑誌には“Work in Progress III”の表題で掲載）の原稿では、すでにこの前半部は削除されていた。削除の理由はわかっていないと言及している。『ニック・アダムズ物語』は 1972年、フィリップ・ヤングにより編纂され Charles Scribner’s Sons から出版された。この

作品は短編群と新たな8つの未発表の作品を加えて、ニック・アダムズを年齢順にクロノジカルに排列されている。クロノジカルに排列されることにより、ニックの人生の出来事は意味のあるひとつの物語を形成し、子供から思春期の若者、そして兵士、退役軍人、作家、親へと成長するとヤングは序文で言及している。この一連のシーケンスから、ニックはヘミングウェイを映し出す姿として浮かび上がってくるのである（中村 50）。ヤングが言及する、首尾一貫してニック・アダムズ物語の再編成の計画が物語の重要なギャップを埋めること（“fills substantial gaps in the narrative”）、さらにすべてこの新しい作品はヘミングウェイの人生の中の出来事に何らかの形で関係しており、作品を読む読者は興味を抱き続けること、そして最後に最も重要なことはこれらの作品が私たちの最も重要な作家のひとりであるヘミングウェイの作品とパーソナリティーに新たな光を投げかけ、ヘミングウェイについて我々の理解を真に高めるという事実は、ヘミングウェイの作品を読み解くうえで極めて意味深いと考える。

中でも、「再編成が物語の重要なギャップを埋める」という点に着目すると、「3発の銃声」と「インディアン・キャンプ」に隠された作者ヘミングウェイの意図が読み解けるとともに、なぜ生前「3発の銃声」が削除されたかが明らかとなる。「3発の銃声」をクロノジカルな点からみると、「インディアン・キャンプ」の前に時間が設定されている。この2作がクロノジカルに設定され、「3発の銃声」がなぜヘミングウェイの生前に発表されなかったかを考察する。考察するにあたり、「インディアン・キャンプ」の内容を概観してみたい。

闇の中、二人のインディアンが2艘のボートに乗り込み、湖をわたってゆく。ニックは医師の父と叔父のジョージとともにインディアンの居留地へ向かっている。難産で苦しむインディアンの妊婦を助けるために呼ばれたのだ。手術道具も麻酔薬もない。ジャックナイフで帝王切開を行い、無事成功する。しかし、三日前に斧で片足を傷つけた妊婦の夫がベッドの上段で剃刀で自分の喉を掻き切って死んでいた。医師の父はその光景をニックに見せまいとしたが、ニックはすべてを見ていた。夜が明け、父の漕ぐボートに乗って、「僕は決して死なない」と強く思うのだった。

「インディアン・キャンプ」は前述のように、夜の闇の中、キャンプへ向かうニックたちの描写で幕をあける。2つの作品をクロノジカルに読むと、この闇の中の夜

の時間は、ニックが銃を3発撃った翌日の夜であることがわかる。

「3発の銃声」の出だしである“Nick was undressing in the tent.” (NAS 13) から“*He had kept it out of his mind all day.*” (NAS 13) の6行は、服を脱ぐという行為が強烈に昨夜の行為を思い出させ、ニックを“*very uncomfortable*”で“*ashamed*”に感じさせるのだ。つまり、その行為は、ニックが夜の闇を怖がりついに銃を三発撃ったことを蘇らせるのだ。次に作品の最後の部分“*Now he was undressing again in the tent.*” (NAS 15) から“*Put your coat on, Nick,*” his father said.” (NAS 15) の9行をみると、出だしの6行と最後の部分は見事につながってゆく。その間の回想はフラッシュバックで構成されている。その回想は“*That night he sat in the hall*”で始まり、“*under the hall light until morning*”で終わる2層の過去に分かれておりその部分はさらに深い過去の出来事である。その後「インディアン・キャンプ」へとつながるのである。ヘミングウェイの死後、このようにヤングの編集による『ニック・アダムズ物語』の「3発の銃声」から「インディアン・キャンプ」へとクロノジカルに読むと、ニックの心の描写は見事に流れてゆく。「3発の銃声」が発表される前「インディアン・キャンプ」をクロノジカルに、ニック・アダムズの最初の作品として読む読者は、ニックが目撃する生と死のドラマを軸に、死に対峙しながらも生を選ぶ彼の意志が暗示的に描かれるというように、それはニックが受ける衝撃と、その経験を通して成長する過程が描かれる「イニシエーション」の物語、またあるいは「父と子」の物語として読むことができる。しかし、「3発の銃声」がヤングによって「インディアン・キャンプ」の前に排列されたとき、「3発の銃声」が氷山の水面に隠れた部分であることが明らかになる。しかしこの流れは作者ヘミングウェイの意図するものではなかったのではないか。なぜなら、「3発の銃声」を生前発表してしまうと、ヘミングウェイの「冰山理論」が成り立たなくなるからに他ならない。「冰山理論」のことは1932年にヘミングウェイが述べているが、1924年に『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載すべく提出された「インディアン・キャンプ」の原稿ではすでにこの前半部は削除されていた。作品は彼の作家生活に置かれた、いわば、飛び石のごときのものであり、飛び石は飛び石であってこそ意味がある。間隙を埋められてしまったのではその存在の意味を失うと考察している(中村 56-7)。ヘミングウェイが「冰山理論」あるいは「省略の理論」としての考え方を表明す

るはるか8年前ではあるが、すでにその技法はすでに考案され完成されていたと考えられるのである。

第2章

伝記を辿る「病気」、「事故（怪我）」の詳細な軌跡

—ヘミングウェイの生誕から自殺まで—

2.1 誕生から10代（1899—1919） 両親の家系・第一次世界大戦へ

2.1.1 家系

アーネスト・ヘミングウェイの曾祖父であるアレン・ヘミングウェイ（1808-85）は、1854年コネチカット州のイースト・プリマスから農場を探すためにシカゴへやってきた。そのシカゴへやってくる前年は、コネチカット州で時計会社に勤めていた。最初の妻マリエッタ・リンズレイ（1808-42）との間に5人の子供をもうけた。彼女の死後、再婚した妻ハリエット・ルイザ・テイラー（1819-95）との間にも一人の息子がいた。アンソン・ヘミングウェイ（1844-1926）、アーネストの祖父である。アンソンは美男子ではあったが、生まれつきの骨格異常である胸骨と胸郭の突出する鳩胸であった（Dearborn 13）。1859年、アンソンは後に妻となる3歳年上の学校の教員のエドモンズと出会い2年後に結婚する。

アンソンはその後、シカゴのオークパークで不動産業を始める。その時代のシカゴは、まさにアメリカの最も大きな鉄道網の中心地として、さらに不動産業がビッグビジネスとして成長していた都市でもあった。そんな繁栄の中、アーネストの父、クラレンス・エドモンズ・ヘミングウェイ（1871-1928）が産声を上げる。オハイオ州オーバリン大学を卒業後、シカゴのラッシュ医科大学から博士号を取得し開業医となる。

一方、アーネストの母グレース・ホール（1872-1951）の父アーネスト・ホール（1840-1905）の祖先を18世紀まで遡ると、ウィリアム・エドワード・ミラーという教会のオルガン奏者で作曲家としても有名な音楽家がいた。そのような家系であったため、グレースの父は子供にできる限りの音楽教育を施した。その甲斐あってグレースはプロ歌手として、マディソン・スクエア・ガーデンで初舞台を踏むほどの音楽の才能を持つまでとなった。グレースの母キャロライン・ハンコック（1843-1895）は1984年にガンと診断され翌年亡くなった。グレースが23歳になったばかりのときのことであ

った。

ヘミングウェイの最初の妻ハドリー・リチャードソン（1891-1979）の家系に少し言及する。彼女の母方の祖父は2つの小学校を開設するほどの教育者であった。父方の祖父は最初学校の教員となった。次に雑貨商店を経営し、その後ミシシッピ州の西部で最大の製薬会社であるリチャードソン製薬会社を創り上げた。祖父にはクリフォードとジェームズ（ハドリーの父親）の二人の息子がいた。クリフォードは家庭用医薬品ビジネスのパートナーになったが、ジェームズはあまり仕事には熱心ではなくほとんどの時間を飲酒に費やしていた。父親が亡くなった後に会社が2人の兄弟に分けられたとき、クリフォードはその収益を使ってセントルイスの大手銀行になる銀行業を始め、一方ジェームズは株式市場で投機をおこなった。その後、ジェームズは株式市場で相場の損失に落ち込み、アルコール依存症により銃で自殺した。ハドリーが13歳のときのことであった（Dearborn 100）。

2.1.2 10代

1899年7月21日午前8時、シカゴのオークパークで開業医のクラレンス・エドモンド・ヘミングウェイを父に、音楽に才能を持つグレース・ホールを母に、アーネスト・ミラー・ヘミングウェイが生まれた。フロンティアの消滅が公式に宣言され7年が経過した頃であった。消滅後も開拓時代の名残があった頃、父親からは自然の中で狩りや釣りの生活を教えられ、魚や肉が好物で食通ぶりはまさに父親譲りのものであった。猟銃の扱い方もその父親に学んだといわれているが、その端緒はアーネストが3歳を迎えるまでにすでに始まっていた。母グレースの育児日記には「もう自分で弾を装てんして、内ち金を起し、上手に打つことができる」とある。また、4歳の誕生日前には、祖父ホールから「素晴らしい狩猟家」と言われていた（Dearborn 21）。その頃から父クラレンスは鬱病を発症する。その後も不動産投資などの金銭のストレスでたびたび鬱病を発症し、パラノイアの症状も出始め、高血圧症にも悩まされていった。

1914年、第一次世界大戦が始まった。アンソン譲りの立派な体格になるにはその頃のヘミングウェイにはまだ少し時間が必要であった。背が低くくてフットボールの正

選手にはなれず劣等感を秘めていた。また、生来の左眼の視力の悪さもその一因だった。それについては、ひそかに母親からの遺伝であると強く信じていた。母グレースが、幼少期に罹患した猩紅熱とリウマチ熱の影響で著しく視力が低下してしばらくの間盲目になり、そのため強い光にも弱くなっていたからである。現代の医学では視力が弱いのは遺伝に関与するものがあると考えられているが因果関係ははっきりしていない（日本眼科学会）。

高校を卒業したヘミングウェイには考えていたいくつかの進路があった。大学へ進むか、就職をするか、あるいは戦争に参加するかというものであった。父親からはいくつかの大学を推薦されたもののその道には進まなかった。その頃のヘミングウェイは、母グレースがグレース荘と名付けた家を建てるのに大金を使ったために、自分は大学生になれなかったと嘆いていた。また、母は「アーネストには大学なんかいらない」とも言っていた。従軍については父の反対もあり、また左眼の視力の悪さのため一時は戦場へ行くのをあきらめていた。その後、カンザス・シティの「スター」社で記者として採用されることになった。

1917年4月、アメリカがドイツに宣戦を布告したことで、ヘミングウェイの戦争に参加したいという気持ちが徐々に芽生え始めた。1918年、春のある夜大きな怪我をすることになる。ヘミングウェイの同僚レオ・パトリックと食事に出かけた際、一人の暴漢がレオに因縁をつけてきた。義侠心も手伝ってヘミングウェイがその暴漢を打ちのめしたとき、勢い余って葉巻の入ったショーケースまでも打ち砕いてしまいしばらく包帯の世話になった（*Baker, Life* 54-55）。その行動とは裏腹に劣等感は消えなかった。

その頃になると、ヘミングウェイは自分も戦争に行きたいという気持ちを抑えることができず、何とかして参加できないものかと模索していた。そんな矢先、テッドという同僚から戦地へ行く方法が得られたのである。テッド自身は、不幸にもゴルフの最中に打ったボールが樹に当たって跳ね返り、彼の顔を直撃し失明したのだった（*Baker, Life* 55）。その話というのは、テッドが直接従軍したのではなく、疾病兵運搬車の運転をするということで戦争に参加したということだった。その話を聞いたヘミングウェイは、自身も眼が悪いため入隊できない可能性があったので、赤十字の車を

運転するという道を見つけてフランスへ渡った。

7月、フォサルタで任務について2か月ほど経った頃である。最前線の部隊にタバコやコーヒーを配達していたその時、地獄が出現した。オーストリア軍の迫撃砲弾がヘミングウェイのいた塹壕に打ち込まれたのである。その時の様子をヘミングウェイは後に、「溶鉱炉の扉が開いたようだった」と形容している（FTA 50）。外気がはっきりすると、金切り声とマシンガン掃射の音が聞こえてきた。つい先ほどまで隣で話していた兵士はすでに死んでいた。別の兵士は吹き飛ばされた自分の脚をつかんでいた。ヘミングウェイ自身も脚に砲弾の破片が突き刺さり出血していた。3人目の兵士の体を肩に抱えて運んでいる間も、ゴム製の軍靴のブーツから血があふれ出ていた。よろめきながら150ヤード（約137メートル）先の赤十字の退避壕へと向かっていた。その途中、彼の軍服は担いでいた虫の息だった兵士の傷からの出血でさらに血まみれになっていた。そして、退避壕へ着くなり倒れこんだのである。ヘミングウェイはそこで2時間ほど横たわり、赤十字の運転手にフォルナーチにある救護所まで運ばれる途中、意識は薄れたり戻ったりを繰り返していた。その後、ミラノの赤十字病院に入院する。そこで看護婦のアグネス・フォン・クロウスキーと出会い恋に落ちる。しかし、その恋はヘミングウェイの思うようにはいかず、結局失恋することになりショックで寝込んでしまう。この時の経験が「とても短い話」や『武器よさらば』で描かれている。また、この話は『ラブ・アンド・ウォー』の名でも映画化された。

10月、ひどい黄だんにかかる。ヘミングウェイの帰国後、母のグレースは脚の傷が治っても定職に就かないで自分の思い通りにならないでいる息子に激高し別荘から追い出してしまう。そのことで謝りにきたヘミングウェイにグレースは会おうともしなかった。そんな母親に対しヘミングウェイは、息子として母親への愛情を抱きつつもその愛情を母親に出すことがかなわず、また母親の愛情を受けることなくその反動で母への感情が憎しみとなり終生忌み嫌ってゆくことになる。ヘミングウェイにとってこのときが北ミシガンで過ごした最後の夏になった。その夏に彼を診たミシガン州ボイン市の医師は、一人のヘミングウェイ研究者に、「彼が1919年の夏、治療のためにやってきたときはとても重症のシェルショックであった。・・・患者として、彼は立派ではあるが、とても不安になっている」と伝えている（Dearborn 63）。この戦争体験は

「大きな二つの心臓のある川」(“Big Two-Hearted River”)、「異国にて」(“In Another Country”)、「身を横たえて」(“Now I Lay Me”)、「誰も知らない」(“A Way You’ll Never Be”)、そして『武器よさらば』など、さまざまな作品で描かれている。

2.2 20代から40代(1919-1949) 「病気」と「事故(怪我)」のデパート、そして「頭部外傷」

2.2.1 20代

1920年、ハドリー・リチャードソン(1891-1979)と出会い、その翌年結婚しパリに移り住む。時代は狂乱の20年代に入っていた。1922年4月、イタリアのジェノヴァにビル・バードとともに到着し、一足先にヘミングウェイが入浴している最中、近くに置いてあった湯沸かし器が爆発し、飛び散った金属の破片が彼の上半身を傷つけた。幸い怪我は軽傷で済んだが、さながらバスルームはボクシングの試合の後の敗者の更衣室のように、血の付いたバスタオルが散らかっていたとビルが後述している(Baker, *Life* 134)。その年の10月、ギリシャトルコ戦争の取材中、滞在していたコンスタンチノーブルでマラリアになる。

12月、ハドリーがローザンヌで会議の仕事のあったヘミングウェイに会うために、後から出かけた際リヨン駅で、それまでヘミングウェイが書き溜めておいてあった小説とその写しを含めてすべて盗難にあう。作家ヘミングウェイのショックは形容すべくもなかった。この事件のことは『エデンの園』に描かれている。この事件について島村法夫は、原稿の盗難はアーネストにとってむしろプラス面を多とした出来事だと思っていると考察している。またこの事件について様々な先行研究でヘミングウェイの盗難のショックに関してマイナスに言及している中、島村は、彼がこれまで書き溜めていた作品への未練を完全に断ち切ることができただけでなく、彼が過去のしがらみから解き放たれて、飛躍する端緒が開かれたからであると考察している(島村、『世界の文学 ヘミングウェイ一人と文学』58)。

1923年2月、ハドリーが妊娠していることを知る。その事実を知ると、ヘミングウ

エイは喜ぶどころか自分には書くことがあり、まだ子供を持つには若すぎると逆に激怒したのである。その年の10月、初めての子ジョン（通称バンビ）が誕生する。しかしそんなヘミングウェイもバンビが生後1か月になると、ガートルード・スタインに「子供が可愛いと思うようになりました」と書き送っている（SL 101）。1923年以降は、ヘミングウェイの傑作がつぎつぎに発表される。『三つの短編と十の詩』、1924年パリ版『ワレラノ時代ニ』、1925年アメリカ版『われらの時代に』などの作品が量産された時代であるが、1920年代から30年代にかけてヘミングウェイは軽度の鬱症候群を発症し、自殺について言及していた（Dearborn 171）。

1926年、『春の奔流』、『日はまた昇る』が刊行された年、ヘミングウェイはそれらの作品の完成に疲れ果てていた。その頃、自殺願望の端緒がみられた。船から飛び降りて死ぬことや、スキーの最中雪崩にあって死ぬことまでも想像していたのである（Baker, *Life* 253-54）。1925年の暮れから1926年にかけて、オーストリアのシュルンスに家族でスキー旅行に行った。その旅行中、ヘミングウェイは風邪からひどい扁桃炎を起こし、しばらくの間ベッドでの生活になっていた。

1927年の暮れ、悪性の風邪にやられ、痔を患い、虫歯に悩まされていた。モントルーで夜中に息子をトイレに連れて行ったとき、息子が寝ぼけた拍子に、彼の正常な方の眼に指を突っ込んだため、眼に傷がつきしばらく視野がぼやけるようになった。さんざんな暮れのようにだったが『女のいない男たち』が1万5千部売れた。

1928年3月、自分は事故に逢いやすいというわけではないと後述しているが、洗面所の鎖をさわるのを誤って天窓のガラスの鎖を触ってしまい、すでにひびが入っていたガラスが頭上に落下し、額から眼の上を9針縫う怪我をおった。ちょうど「異国にて」を書いている最中のことだった（Baker, *Life* 287-88）。その年の12月、父が銃で自殺した。その銃はアンソンから父が譲り受けたもので、南北戦争で使われた「Long John」といういわばヘミングウェイ家の家宝でもあった。父エドはヘミングウェイが4歳のころから発症した鬱病、13歳の頃から発症した糖尿病とそれによる精神的鬱状態を呈していたのである。病気が徐々に進行し不動産への投資がうまくいかず経済的な損失も相まって、ヘミングウェイが体調を心配していた矢先のことであった。ヘミングウェイは父を自殺にまで追い込んだのは母のせいであると決めつけ、埋めることができ

ない溝がさらに広がったのである。

2.2.2 30代

1929年10月、腎臓の調子が悪くなる。ヘミングウェイはスペインの山奥で長靴を履かず冷たい水に漬かりながら釣りをしていたせいだと考えた。その後、バレンシアで鼠蹊部の筋肉を切る。『武器よさらば』が出版される。世界恐慌の中、名声は更なる高みへと上っていったときのことである。1930年8月、モンタナ州で乗馬中、急に暴れ出した馬にまたがったまま降りる機会を失い、繁みの中で腕と脚を怪我し顎の左側に深い傷をおった。その縫合で顔が歪んでしまった (Baker, *Life* 324)。11月には更なる不幸が続いた。ヘミングウェイの運転で、ドス・パソスとフロイド・アリントンが同乗し、モンタナ州のビリングスに向かっている最中のことであった。ドスによれば3人ともたっぷりバーボンを飲んでいて、ヘミングウェイが細い砂利道を走っていたとき、対向車のヘッドライトで目がくらみ、運転を誤って車は側溝にひっくり返り、上下逆さまになってしまったのである。幸いドスとフロイドにはたいした怪我はなかったが、ヘミングウェイは商売道具の右腕を複雑骨折していて、約7週間の入院を余儀なくされた。

1931年の暮れ、キー・ウエストへの引っ越しの最中、家族は疲れて病気になり、ヘミングウェイは喉をやられた。1932年、船で釣りを終えたあとキー・ウエストへ戻る途中風邪から気管支炎になる。その年『午後の死』が出版される。1933年には『勝者には何もやるな』が出版される。1934年1月、初めてのアフリカ旅行の最中にアメーバ赤痢に罹患し、同時に脱腸にもなりナイロビの病院に入院する。この経験が後に「キリマンジャロの雪」として描かれることになる。1935年1月、赤痢を再発する。サファリ旅行から帰ってきたヘミングウェイは船を購入して『ピラール号』と名付けた。

その船でドスと漁に行ったとき、サメを釣り上げたあとそのサメを殺そうとして、誤って自分の両脚を打ってしまう。その年、『アフリカの緑の丘』が出版される。1936年に入ると不眠症になり、鬱病を発症するようになる。2月、怒りにまかせてポーションによってカギをかけられていた表の門を力任せに蹴り足の親指を骨折する。この

頃から自殺を口にし始める。「キリマンジャロの雪」、「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」を発表する。1937年、その年から終生悩まされる肝臓の不調が現れ始め、翌年にはさらに悪化し医師ロバート・ウォリッチに食事制限と禁酒を言い渡される。『持つと持たぬと』が出版される。1938年、夏には悪い方の左眼の瞳を自分で傷つけてしまう。『第五列と最初の四十九の短編』が出版される。

2.2.3 40代

1939年夏、サン・ヴァリーで口述筆記を頼んだことから仲良くなったクララ・スピーゲルとの語らいの中で自殺の話題が持ちあがり、どちらかが自殺の衝動にかられたらすぐに相手に知らせる約束をしようとするも断られる (Baker, *Life* 522)。1940年に出版された『誰がために鐘は鳴る』の一節に、ヘミングウェイの両親をモデルにしたジョーダンの両親が描かれている。ジョーダンの父は南北戦争に使われた銃で自殺している。作中では父親のふがいなさや威張り散らす母親を批判して描いている。その年、三度目の結婚相手マーサ・ゲルフォーンと父の自殺について話しているとき、「にっちもさっちもいかない事態に立ち至った場合は、自殺は常にゆるされるさ」と、足で銃の引き金を引くしぐさまでして丁寧に説明している (Baker, *Life* 534-35)。

1944年5月、ロバート・キャパの自宅でのパーティーの帰り、早朝、灯火管制が敷かれて真っ暗な中、運転を誤りスチール製の給水タンクに激突した。ヘミングウェイの両膝はダッシュボードに当たりひどく腫れてしまい、重度の脳震盪を起し、頭は2時間かけて57針縫うこととなった。その影響で何か月にもわたりひどい頭痛が続いた。その脳震盪のためアルコールを禁じられていたにもかかわらず、ウイスキーを飲み始めてさらなる頭痛に悩まされた (Baker, *Life* 596)。

8月、ノルマンディーでキャパの運転するオートバイのサイドカーに乗っていたとき、ドイツ軍の砲撃が始まった。キャパがその砲撃を避けようと急に止まったため、ヘミングウェイは側溝に投げ出され、頭と背中をととも強く石に打ちつけられた。その結果、血尿が出て5月の脳震盪の後遺症が回復したところに再び頭を強打したため、物が2重に見える視覚障害、頭痛、言語障害、性機能障害などが現れて後遺症に悩ま

される。12月には前線でひいた風邪を悪化させ洗面所に吐血するまでの肺炎になり、そのままパリに戻るがなかなか回復しなかった。

1945年2月から3月にかけて、それまでの度重なる交通事故の脳震盪でひどい頭痛の後遺症に悩まされる。6月、5度目の交通事故を起こす。車が道路でスリップし、側溝を飛び越え立ち木に激突したのである。その事故でヘミングウェイは頭をバックミラーに強打し、ハンドルで肋骨を4本折り、左膝を割ってしまう。これも飲酒運転の末の事故だった。ヘミングウェイはこの事故で急性硬膜下血腫^(注12)、つまり頭部外傷により脳表に脳挫傷が起こり、その部分の血管が損傷して出血し、短時間で硬膜下に溜まるという症状だった。現在の治療方法は血腫を完全に除去し、出血源を確認して止血しなければならぬ(日本脳神経外科学会)。そのまま放置すると重篤な後遺症を残したり、或いは近い将来死亡する危険性も考えられるものだった。もちろんその当時、1970年代から使われ始めたMRIやCTスキャンというものはなく、ヘミングウェイの頭部にはそのまま血腫が残ったものと思われる。1947年8月、事故の後遺症とは別に、まず耳鳴りから始まった高血圧の症状が出た。血圧は215-125という値になり、体重は256ポンド(約116キログラム)になっていた。医師により治療が始められ、年末までの食事療法と降圧剤の投与で、なんとか体重は25ポンド(約11.4キログラム)減量され、血圧は150-104にまで下がった。

2.3 50代、60代、(1949-1961) アフリカ旅行の果ての制御不能な身体

2.3.1 50代

1949年1月、休みなく続く耳鳴りに悩まされ、4時間おきに薬を服用しなければならなかった。2月にはひどい喉風邪で2週間横になっていた。3月になると左眼の引っ掻き傷が化膿し、放っておくと菌が脳まで感染する可能性があったのでパドヴァの病院に入院し、ペニシリンの大量投与でなんとか回復に向かった。1950年2月、火薬アレルギーで炎症が起きたという医師の判断で、ペニシリンやその他の薬と軟膏を処方された。7月、『ピラール号』で3日間の釣り旅行に出かけた際高波で船体が大きく

傾いたため、ヘミングウェイは甲板の上で足を滑らせ頭を材木に打ちつけ、骨にまで達する傷で3針縫うことになった。幸い骨には異常はなかったがその後ひどい頭痛になった。9月、1918年に右足に被弾したときの破片が残っており、その破片のため水腫と激しい痛みが出た。手術はしないで高熱波透熱療法とマッサージで済ました。『河を渡って木立の中へ』が出版される。1951年1月、気管支炎のため高熱を発症し寝込む。6月、母グレースが亡くなる。葬儀には列席しなかった。1952年、『老人と海』が単行本として出版される。

1953年、そして54年は、良いことと悪いことが隣り合わせのようにやってきた。5月、1940年にもう一步というところで取り損ねたピューリッツァー賞を『老人と海』で受賞する。8月から2度目のアフリカ旅行へ行く。10月、ケニアで酔ってカーブを曲がっていた車から転落し、顔面裂傷と肩を打つ怪我をする。1954年1月、遊覧飛行の最中、鳥の大群が飛行機の行く手を遮ったため操縦士が避けようと急降下した際、峡谷に張られていた電線に接触して墜落した。幸いにもヘミングウェイは右肩を挫いただけですんだ。翌日、乗り込んだ飛行機が今度はうねった滑走路からうまく離陸することができず、そのまま地面に激突して爆発を起こした。この事故でヘミングウェイは頭からは出血して漿液が流れ出し、右腕は脱臼し、全身打撲、肝臓、腎臓と脾臓の破裂、左眼の一時的失明、背骨の故障、左足の捻挫、顔、腕と頭の第一次火傷、そして視力にも障害を受けたのである。この事故で一時ヘミングウェイの死亡説が世界中に配信された。2月、釣りに出かけたとき、雑木林で発生した火事を消そうとして火の中へ飛び出していったのだが、先の事故で体の動きがままならなかったのも、つまりいてしまいそのまま炎の中へ倒れた。助け出されたときは、第二度火傷を脚、腹部、胸、そして唇に、第三度の火傷を左手と右腕に受けていた。10月、ノーベル文学賞を受賞する。健康がすぐれないため授賞式には参加できず、アメリカ大使のジョン・キャボットが代理で受け取った。

1955年5月、『ピラルール号』での航海から帰ってくると、体重は230ポンド（約104キログラム）まで落ちて体は軽く感じていたが、疲れると背中に痛みが出て、左眼の視力が低下し、左耳はまったく聞こえない状態となっていた。その後、体重がさらに4ポンド（約1.8キログラム）減り、最高血圧は158になった。11月、風邪をひき右

足が腫れあがり、その結果右の腎臓まで菌が広がった。その後、もう一方の腎臓と肝臓にも感染が拡がり腎炎と肝炎の兆候まで現れた。2年間に2つの大きな賞を受賞したのだが、度重なる事故と好き勝手な食生活、そして過度の飲酒のために体は治ることなくさらに蝕まれていたのである。

1956年11月、鼻血がよく出るようになり、脛に浮腫が現れるようになる。血圧は210-105と依然高く、コレステロール値も380とかなり高く、大動脈の周りには炎症がいくつもみられた。医師より厳しい食事制限、アルコールの制限、そして性行為の制限を言い渡される。1957年1月、ジャン・モニエ医師より大量のビタミン注射とコレステロールを減らす薬を処方してもらい、1週間の船旅から帰ってくると血圧はかなり下がっていた。

2.3.2 60代、そして自殺

1959年7月、風邪をこじらせる。ヘミングウェイの寝室には尿のサンプルが入ったコップなどが並んでいた。それは悪化した腎臓の治療をしていた頃である。この収集はフィンカに住んでいた1949年頃に始まり、その当時はバスルームに10から20個の瓶が並んでいた。彼の60歳の誕生パーティー前後には、更に重度の精神の不調が現れた。その席上、パック・ラナムの献辞に突然涙にくれたかと思うと、そのラナムがパーティーの席上ヘミングウェイの後ろを通った際、かすかに頭に手が触れたのに激怒し大声で「頭に触るな」と怒鳴り、またその後すぐラナムに泣きじゃくりながら謝った (Baker, *Life* 835)。

1960年、昨年暮れから「運動をして体調を整えたい」と周囲に漏らしていた。1月、血圧が上がり不眠に悩まされた。7月、鬱の兆候が現れ始めた。8月に入ると、恐怖感、孤独感、倦怠感、他人への猜疑心、不眠症、罪悪感、記憶の減退などの強い神経衰弱の様子が現れた。9月、被害妄想に取りつかれ、怒りの状態が特に目立ち、感情をコントロールできなくなり始めた。車を駐車場から出すとき事故を起こした。11月、FBIに付け狙われているという妄想に取りつかれた。ヘミングウェイに講演を頼みに来た二人の教授が見た状態は、青白く血管が透けてみえ、腕と脚は痩せこけて、

言語障害がひどく 61 歳には見えなく、重病以外の何ものでもないと感じたと語っている (Baker, *Life* 846)。入院しなければならない日がそこまで迫っていた。血圧は、250-125 という高い数値だった。

親しくしていた年下の友人 A・E・ホッチナーが、ニューヨークの精神科医にヘミングウェイの状況を送ったところ、「症状診断と治療計画を系統立てなければならず、それには系統的な病院に入院し、発病原因の有効な仮説に基づいて精神療法計画を立ててもらふ必要がある」と回答を得ている。その後の治療のため、極秘裏にジョージ・セーヴィアズという偽名で、セント・メアリー病院 (メイヨー診療所) に入院した。病院では肝臓病や腎臓病などの多臓器障害の治療が始まった。鬱病は降圧剤が原因とも考えられたため、一時中止しようとしたが鬱の状態がかなり重症だったため、1 週間に 2 度の割合で 12 月の後半から翌 1961 年 1 月の中旬にかけて電気ショック療法を実施した。しかしその治療は記憶障害と失語症を伴い、作家ヘミングウェイにとり致命的な治療となった。鼻風邪をひきしばらく入院していた。2 月から 3 月にかけて体調が戻り始めたように思われたが、書けなくなったことを主治医に涙ながらに語るのであった。3 月、顔の癌の手術を受けた。この癌については、30 代から 40 代にかけて日光に曝されたために、すでに彼の皮膚は損傷していたのである。癌の手術のあと、ヘミングウェイは体重が減るのは癌のせいではないかと疑っていた。

4 月、ヘミングウェイは手に散弾銃を握り自殺をしようとした。メアリーの機転と医師の来訪によりかろうじて防ぐことができた。再度病院に入院せざるを得なくなり、その準備のために自宅へ戻った日、再び銃で自殺をしようとしたところをすんでのところで止めることができた (Baker, *Life* 853-54)。セント・メアリー病院 (メイヨー診療所) に入院する日、そこへ行く飛行機に乗る間もヘミングウェイは銃がないかと探し回わり、とうとう飛行機のプロペラめがけて歩き出したのである。このときもすんでのところでパイロットがエンジンを切ってことなきを得た (Baker, *Life* 855)。

入院後、同じような電気ショック療法を受けた。自宅ではメアリーが銃をしまっている倉庫に鍵をかけたのだが、2 度にわたる自殺未遂が頭から離れなかった。6 月下旬、退院したヘミングウェイは自宅のあるケチャムへ向かった。そして、7 月 2 日の早朝、玄関に銃声が轟いた。そこには頭がすっかり吹き飛び、かろうじて顎だけが残

ったヘミングウェイの体が横たわっていた。使われた銃は 1928 年 12 月に父が自殺に使ったもので、アンソンから父が譲り受けたあの「Long John」であった。その銃は、今後記念品あさりの連中にわたるのを防ぐという理由で、幾つかに焼切られ埋められた。

2.4 繋がる負の遺産

ヘミングウェイが4歳の誕生日を迎える頃から、父クラレンスに鬱病が発症した。その後も不動産投資などの金銭のストレスでたびたび鬱病を発症し、パラノイアの症状も出始め、高血圧症にも悩まされていった。1926年の秋、祖父アンソンが亡くなって以降、クラレンスはとても落ち込みがひどかったと生前の妻グレースが語っていた (Dearborn 242)。翌年、クラレンスは再び狭心症を発症し、糖尿病が重症化して精神不安定となり、28年12月に銃で自殺している。このことから父クラレンスからアーネストへまで二世代に渡り、鬱病の遺伝的傾向があったことが考えられる。鬱病をもつ親と生活を共にする子供は否応なしに親の異常体験に巻き込まれる。そのため、子供の精神構造に大きく影響すると考えられている (長江、土田 88)。

40代を振り返ると、作家ヘミングウェイにとり空白の期間だったと言える。40歳で『誰が為に鐘は鳴る』を出版して以来、51歳に『河を渡って木立の中へ』まで、幾つかの雑誌への寄稿などを除き、作品は発表されていない。1942年、43年は執筆活動らしきこともしていない。43年の夏、友人のアーチボルト・マクリーシュにこの1年の間に一行も書いていないと書き送っている (SL 549)。同じ頃、カルロス・ベーカーがヘミングウェイはその夏深刻な飲酒生活にもどったと指摘している (Dearborn 440)。過度の飲酒について、ヘミングウェイとポーリーンとの間の子、当時12歳のグレゴリーが、ここ数年信じられないほどの飲酒をしていたとも語っている (Dearborn 440)。午前10時からウイスキーのソーダ割り、ウォッカベースのアルコール度数の高いブラッディ・マリーなどを飲み始めていたとインタビューに答えている。マーサによれば、その挙句、毎日同じ服を着て風呂にも入らず裸足で街を歩いていたということである (Dearborn 442)。44年以降は、飲酒運転で度重なる交通事故を起し、重度の脳震

盪で後遺障害に苦しみ、さらに高血圧症で苦しむことになった。

40 代の過度の飲酒や不摂生による体調不良、度重なる事故による脳震盪の影響も、50 代に近づくころには一時的ではあるが経過も良くなる時期があった。53 歳でピューリッツァー賞を受賞、そして 54 歳でノーベル文学賞を受賞する。しかし、2 度目のアフリカ旅行での事故が、その後の作家ヘミングウェイの運命を大きく変えることになったのである。

本章では、ヘミングウェイの世代を渡る鬱の遺伝的要素、次に後天的な「事故」である外的要因による五回にも及ぶ脳震盪（外傷性脳傷害）、さらには過度の飲酒、高血圧、そして双極性障害（躁鬱病）から、後天的な「事故」と「病気」の問題を中心に据えて、遺伝的要素からもヘミングウェイの作品に影響を与えたと考えられる事象を取り上げて総括した。

第3章

ヘミングウェイの受け継いだ遺伝とトラウマ ヘミングウェイの遺伝疾患

3.1 隠蔽された暴力

1925年に発表された『我らの時代に』は、ヘミングウェイの最初の短編集であり、作家活動の最初の作品集でもある。それらの最初に載せられていたのが「インディアン・キャンプ」である。当初「インディアン・キャンプ」の冒頭に置かれていた、タイプ原稿にして約8ページにわたる導入部分は、ヘミングウェイの死後に「三発の銃声」というタイトルで、フィリップ・ヤング編集の『ニック・アダムズ物語』に収録された。Charles Scribner's Sonsから1972年に出版されたもので、ヤングの編集によりニック・アダムズが主人公となる24篇の短編をクロノジカルに1冊にまとめたものである。2.6で、「インディアン・キャンプ」とその前半部分としてストーリーを形成していた「三発の銃声」における作品間の未だ解決されていない「冰山理論」に新たな光を当てて論考した。この章では「三発の銃声」が示すヘミングウェイの受け継いだ「遺伝」について更に深く考察する。「三発の銃声」はヘミングウェイの生前には発表されなかった8編の内の1篇である。以下のように、「インディアン・キャンプ」はヤング以降の先行研究では、ニックのイニシエーションの成否の物語ととらえている。

A typical Nick Adams story is of an initiation, is the telling of an event which is violent of evil, or both, or at the very least is the description of an incident which brings the boy into contact with something that is perplexing and unpleasant. (Young, *Reconsideration* 31)

Plainly his closing thought in “Indian Camp”—“felt quite sure that he would never die”—is wishful and self-protective. (Spilka, *Hemingway's Quarrel* 194)

They serve as necessary conditions for the rest of the sentence: *only* in the early morning

and on the lake and sitting in the stern of the boat and with his father rowing, could Nick “feel quite sure that he would never die.” (Smith, Reader’s 39)

生前この作品が発表されなかったために、続く「インディアン・キャンプ」とともに語られることのなかった家族の問題と、ヘミングウェイが受け継いだ精神疾患を含む「遺伝」が隠蔽されることになったのである。

作品に語られることのなかった家族の問題と、ヘミングウェイの受け継いだ「遺伝」に焦点をあてると、「三発の銃声」はヘミングウェイの体験した恐怖が明らかになった物語としてとらえることができる。この作品からヘミングウェイの体験した恐怖を考え直すに当たり、「三発の銃声」の内容をまず概観してみたい。

ニックの父親とおじのジョージと3人で森の中にキャンプにきた。夕食後、父親と叔父は釣り用のライトを持って夜釣りに出かける。舟を出す前に父親が、自分たちがいない間に、もし何か急用が起こったら、ライフルを三発撃てば、すぐに戻ってくると言い出かけて行った。ニックはいつも夜の森は少し怖かった。テントに入り暗闇の中で服を脱ぎ毛布の間にくるまった。物音ひとつ聞こえなかった。だんだん恐ろしくなってきた。ついには突然死ぬのではないかと怖くなった。2、3週間前教会で「いつか銀のひもが切れるだろう」という讃美歌を歌ったのだ。ニックは自分がいつか死ななければならぬとそのときはっきりと理解した。

彼は終夜灯の下に座って、『ロビンソン・クルーソー』を読みながら、いつか銀のひもが切れるに違いないという事実から気をそらそうとした。乳母にベッドに行かないと父さんに言いつけるわよと脅かされた。しかし朝まで玄関の明かりの下で本を読んでいた。

テントの中でその夜、そのときと同じ恐怖を感じた。夜以外はその恐怖を感じたことはなかった。そして3度銃を撃った。銃を撃って彼は落ち着いた。父と叔父が戻ってきた。叔父は釣りができなかったことに愚痴をこぼす。父は小さな子供は仕方がないとニックを擁護する。そして、物語は後の作品である「インディアン・キャンプ」へと続くこととなる。この作品の中には明らかに物語とは異なった、ニックの過去の記憶が蘇ってくるところがある。それは、いつか銀のひもが切れるに違いない、そして

死ぬに違いないということを考えないようにしているところである。

「三発の銃声」の構成を詳細にみてゆく。一つ目は、物語の最初の部分“Nick was undressing in the tent. ... He had kept it out of his mind all day.” (NAS 13) の6行と、物語の最後の二つのパラグラフの部分である“Now he was undressing again the tent. ... “Put your coat on, Nick,” his father said.” (NAS 15) とのその間に挟まれる、ニックの回想で構成されているいわゆるフラッシュバックである。その回想は“*That night he sat in the hall*” (NAS 14) で始まり、“*under the hall light until morning*” (NAS 14) で終わる2層の過去に分かれており、その部分はさらに深い過去の出来事になる。この物語の最初のパラグラフでは“*He felt very uncomfortable and shamed and undressed as fast as he could.*” (NAS 14) とあるように、昨夜、恐怖に駆られてライフルを3発撃ったことへの何か居心地の悪さとその行動への恥じらいが表現されている。物語の構成は、ライフルを3発撃ったその翌日の夜に、テントの中で寝る準備をしている最中に昨夜のことが思い出され、「インディアン・キャンプ」へとつながるのである。このときにニックの感じる恐怖が描かれている。

He was not afraid of anything definite as yet. But he was getting very afraid. Then suddenly he was afraid of dying. Just a few weeks before at home, in church, they had sung a hymn, “Some day the silver cord will break.” While they were singing the hymn Nick had realized that some day he must die. It made him feel quite sick. It was the first time he had ever realized that he himself would have to die sometime. (NAS 14)

ヘミングウェイの後の作品である「大きな二つの心臓のある川」、「異国にて」、「身を横たえて」、そして、「誰も知らない」などの兵士の物語で、これまでの先行研究では、ニック・アダムズの闇に対する恐怖は、戦争体験に由来するものと解釈されてきた。しかしながら、高野は「後のニック・アダムズ物語で描かれる恐怖は戦場での負傷が原因とされているが、『三発の銃声』の場合、幼いニック・アダムズは戦争とは何のかかわりもない。まだ戦争体験のない幼いニックが、戦場で負傷兵ニックと似た恐怖にとらわれていることは非常に重要である。従来は当然のようにニック・アダムズ

物語に一貫して現れる闇への恐怖は、戦争後遺症によるものと解釈されてきたからである」と考察している（高野、『神との対話』28）。高野が指摘するように、戦争恐怖症である不眠症や闇を恐れる原因が、青年時代を遡る幼年時代のニックにあるはずがない。

「三発の銃声」が生前に発表されることがなかったために、続く「インディアン・キャンプ」とともに、語られることのなかった家族の問題とヘミングウェイが受け継いだ「闇」が隠ぺいされることになったのである。そして、その受け継いだ恐怖の「闇」のことを考えないように、玄関の明かりがあるところで『ロビンソン・クルーソー』を読み続けるのである。

He was not afraid of anything definite as yet. But he was getting very afraid. Then suddenly he was afraid of dying. Just a few weeks before at home, in church, they had sung a hymn, "Some day the silver cord will break." While they were singing the hymn Nick had realized that some day he must die. It made him feel quite sick. It was the first time he had ever realized that he himself would have to die sometime. That night he sat out in the hall under the night light trying to read Robinson Crusoe to keep his mind off the fact that some day the silver cord must break. The nurse found him there and threatened to tell his father on him if he did not go to bed. He went in to bed and as soon as the nurse was in her room came out again and read under the hall light until morning.
(NAS 14, emphasis mine)

“some day the silver cord must break”については、ラリー・グライムズ (Larry Grimes)、前田一平、高野泰志が指摘しているように、ファニー・クロスビーの「神の恵みに救われて」という讃美歌の一節である (Grimes, “Religious Odyssey” 53 ; 前田、「三発の銃声」62 ; 高野、『神との対話』37-38)。「神の恵みに救われて」という讃美歌は「伝道の書」の1節にあり、人の死を描いている (高野、41)。

この作品の中には、明らかに物語とは異なったニックの過去の記憶が蘇ってくる。それは、いつか銀のひもが切れるに違いない、そして死ぬに違いない、ということ

考えないようにしていることである。ニックは夜の森の中ではいつも少し怯えていた。ボートのオール音が聞こえなくなり、物音一つしなくなった。いままたテントの外では炭が下火になった。“Some day the silver cord will break.”から“some day the silver cord must break.”へと物語は続くのだ。“will break”から“must break”へと続くこの変化は、銀のひもはいつかは切れるということから必ず切れるということへ、2度の“realized”という語で明確に表現されている。

ニックは自分の死というものを思い浮かべることから、確実なことへとはっきり具体化すると信じたのである。それは“afraid”が“very afraid”へと変化し、やがて“afraid of dying”へと姿を変えるのと同様である。いやが上にも恐怖は増してくるのだ。そしていつか死んでしまうのだと悟るのである。さらに作品の中で、ニックは部屋に入らないとお父さんに言いつけますよと脅かされたにもかかわらず、再び部屋から出て終夜灯の下に戻って座り『ロビンソン・クルーソー』を読みながら、いつか銀のひもが切れるに違いないという事実から気をそらそうとした。

夜テントの中で暗く音もしないところでの死の恐怖を感じたのと同様に、明るいところで本を読んで死の恐怖を紛らわさなければならなかったのである。闇と無音が死を想起させた。その死とはすなわち、無（ナダ）の世界である。作者ヘミングウェイは、ここで無（“nada”）の世界の恐怖を、ニックを通して作品の中で表現したのである。このニックの恐怖は被弾以降の戦争後遺症での恐怖ではない。戦争体験のない幼年のニックが死の恐怖に怯えるのは、作者ヘミングウェイの体験させられた家族の問題なのである。ここに隠れている恐怖は罪を犯した者を罰する厳しいものでもあった。ニックは、父によるその罰が死そのものを連想させるほどの恐怖に置き換えて描いていたのである。そしてその奥に潜む彼の避けることのできなかつたものが、ヘミングウェイ家の世代間に渡り受け継がれていたのである。

3.2 受け継がれたもの

ヘミングウェイは、医者父クラレンス、音楽家母グレースの第2子で長男とし

て生まれた。第1子は長女マーセリンである。ヘミングウェイ家は8人家族で、グレースの父ホールも一時期一緒に住んでいた。ヘミングウェイの先祖は1630年頃イギリスから渡ってきた。母グレースの両親もイギリス生まれである。ピルグリム・ファーザーズが、信仰の自由を求めて初めてアメリカの地を踏んだのが1620年であったから、イギリスからアメリカへ渡ってきた最初期の人たちに属すると言えるだろう（島村、『ヘミングウェイ—人と文学』18）。クラレンスはラルフ・ヘミングウェイを先祖としたピューリタンの伝統を強く受け継いでいる。カードゲーム、ダンスのみならず、アルコールの飲酒や喫煙に至ってはもってのほかで許されるものではなかった。またモリス・バスケ（Morris Buske）が“The Heavenly Father of the Hemingway tradition was a stern Old Testament God who rewarded good deeds and punished transgressors.”（Buske, “Faces God” 74）と指摘するように、ヘミングウェイ家の伝統の父なる神は善い行いと罪を犯した者への厳しい旧約聖書の神であった。父クラレンスの“good deeds”については、「インディアン・キャンプ」に続く短編である「医者と医者の妻」（“The Doctor and the Doctor’s Wife” 1924）の中の医者が、ディック・ボウルトンの妻の病気の費用を受け取らずに治療をしたことが描かれている（NAS 25）。治療の対価としての費用を低額にしたり、またはその費用を取ることもしなかったことがうかがえるのである。マーセリン・ヘミングウェイ・サンフォード（Marcelline Hemingway Sanford）は無料で治療を施したり、ときには請求書を送ることもしなかったということに言及している（Sanford 30）。また、患者はクラレンスを信頼していたが、クラレンスは患者の悩みを抱え込み内に秘めてしまう傾向にあったとも言及している（Sanford 31）。善い行いをしているにもかかわらず、クラレンスは次第に心を病んでゆくのである。グライムズはクラレンスが受けた父アンソンからの影響を次のように考察している。

Clarence’s early religious experience under his father’s[Anson] influence registered heavily on him and made him most mindful of human sin and error and shaped him as melancholy, stern, and sober moralist. It is possible that Clarence’s religious temperament could be described psychologically as acute depression, but the greatest psychologist of his own time, William James, perceived personalities like Clarence’s in

religious terms: He said they suffered from sick soul. (Grimes, "Religious Odyssey"
47)

父クラレンスがヘミングウェイの祖父から受けた体験は強い影響を及ぼし、グライムズは心理学上急性鬱病であると言及している。当時の哲学者、心理学者として意識の流れの理論を提唱し、アメリカ文学のみならず日本文学にも強い影響を与えた人物であるウィリアム・ジェームズ (William James) は、クラレンスは"sick soul"に苦悩していると指摘している。この"sick soul"こそヘミングウェイ家に綿々と流れ続けるクラレンスが受けた体験が強く影響している。その後、その"sick soul"はヘミングウェイ家で猛威を振るうことになるのである。

父クラレンスは鬱病的ともいえる"sick soul"で子供たちをしつけていたのである。バスケは、ヘミングウェイの一つ年上の姉マーセリンによって書かれた伝記の出版されなかった原稿に光をあて、マーセリンが家庭内で受けた体罰 (仕置き) の暗い描写について次のように言及している。

At times, in our youth it seemed we were spanked for almost anything and everything. There was no talking to us about it, no trying to understand us, or so it seemed to me, no effort to find why we had done thus and so. . . . If we had done what our parents or the servants considered being naughty—if we had been, as they considered, bad, we were spanked and no questions asked. I can remember times when my mother and father would be away on a trip, and on the day of their return I would say to the nurse girl or cook or whoever was in charge "Can I say I've been good? Can I say I've been good?" Because I knew that if I had to say I had been bad, or had been naughty or had disobeyed, or if my parents asked on entering the house "Has Ernest been good? Has Marcelline behaved?" and the maid said "Well, not always, she was a little naughty, she wouldn't do just what I said sometimes," without another word, we were simply taken to my father's office, turned over his knee and spanked soundly, sometimes by hand, sometimes with a ruler, and sometimes with a razor strap. . . . (qtd. in Buske 76)

子供たちがどれほど父の体罰を恐れていたかをうかがい知ることができる。子守りや料理人あるいは世話をするだれかに私はちゃんとしていたということを書いてもらわないと体罰が待っていたのである。またこういった父による体罰は珍しいことではなく日常に行われていたのである。

一方、母グレースの家庭では父ホールがオークパークの **Episcopal Church** に通うとても信心深い人間だった。グレースは幼少期に猩紅熱に罹り、数か月に渡り盲目状態になった。しかし運よく再び視力が回復し、目が見えるようになったのは神のおかげであると強く信じた (Grimes, "Religious Odyssey" 44)。グライムズはグレースの神を心から信じ、神との関係を感じる気質があると考察している。「医者と医者妻」では、その医者妻が、神の正しい思考によって真理を悟れば罪や病気、死は治療を行わずとも信仰によって消滅するということを信じていることが描かれている (NAS25)。夫が医者であるにもかかわらず、その横でクリスチャン・サイエンスを信奉していることは皮肉なものである。

父ホールのリベラルなプロテスタント主義を受け継いだグレースは感傷的な信心と感性的な信心を共に持ち合わせていたのである (Grimes, "Religious Odyssey" 45)。それはまさに“healthy soul”である。クラレンスの家庭内で荒れ狂う“sick soul”は“healthy soul”を持つ母グレースも止めることはできなかったのである。どんな些細な事でも体罰の対象となっていたからである。

My father awaited me in the living room, his back to the fireplace. His hands were clenched. His face red. Mother was there too, with a handkerchief in her hand. "I have told you I will not have dancing in my home. You are to promise me now that you will never do this wicked thing again. Promise and mean it." I tried to explain that I was only being taught by kind classmates who felt sorry for me, as the only girl in the class who could not join in the class dancing. I said I had not danced with any boy. "But you wanted to dance. You would have learned and then next you would have been found in ----- dance halls. I will not have it. No matter what your mother says. You will now get down

on your knees and ask God to forgive you." I knelt. I repeated the dictated words...
When I rose to my feet I saw my mother sobbing quietly in a corner of the room. She
wouldn't look at my father. (qtd. in Buske 78)

クラレンスが学校へやってきて、彼女が女の子とダンスをしているのを見て、それがたとえ男の子でなくとも、ダンスをしているというだけで「すぐに家に帰るんだ」と言い、その後家庭での体罰が描かれている。ヘミングウェイ家では父親の体罰が些細なことで行われていたが、母グレースはそのときどのようにしていたのかが、マーセリーンの原稿から読み取ることができる。そのときの母の姿は父の方も見ずただ泣いているだけで止めようとしなかったのだ。マーセリーンが父のいうことを聞かずにダンスをしたために。止めることができないほど荒れ狂ったクラレンスがいたのだ。突然豹変する父クラレンスのことをマーセリーンは次のように述懐している。

My father's dimpled cheeks and charming smile could change in an instant to the stern, taut mouth and piercing look was his disciplinary self. Sometimes the change from being gay to being stern was so abrupt that we were not prepared for the shock that came, when one minute Daddy would have his arm around one of us or we would be sitting on his lap, laughing and talking, and a minute or so later — because of something we had said or done, or some neglected duty of ours he suddenly thought about — we would be ordered to our rooms and perhaps made to go without supper. Sometimes we were spanked hard, our bodies across his knee. Always after punishment we were told to kneel down and ask God to forgive us. (Marcelline 31)

この行動はまさしく精神に異常をきたした者の行動である。クラレンスは自分の子供に対しては一切の妥協なく体罰を与えていたのである。またグレースはクラレンスの行動を止めることができなかった。まさしく、そこには罪を犯した者を罰する厳しいものがあつたのだ。

ヘミングウェイの両親は、会派は違うがともにプロテスタント信仰の厚い家庭に育

っていたことは事実である。ヘミングウェイが4歳の誕生日を迎える頃から、父クラレンスに鬱病が発症していた。その後も不動産投資などの金銭のストレスでたびたび鬱病を発症し、精神障害の症状も出始め、糖尿病と高血圧症にも悩まされていった。1927年には再び狭心症を発症し、糖尿病が重症化し、精神不安定となり、28年12月に銃で自殺している。すでにカトリックに改宗していたヘミングウェイは父親の自殺を契機に、自殺を戒めるカトリックへの関心を強めることとなった。カトリックでは命は神からの賜物であり、いつ死ぬかというのを決めるのは神であり、自殺は加害者と被害者が同じであるというだけで、根本は殺人である。したがって自殺は神を冒瀆するのとともに挑戦でもあるため、許されないものとして考えられているのである。歴史上、一時期は自殺者の葬儀ミサも行えなかった。

以上のことから論考すると、父クラレンスから息子のアーネストへ、そしてアーネストの二人の妹アーシュラとライセスターへと世代を超えて鬱病の遺伝的傾向があったことが考えられる。アーネストの三歳年下の妹（6人兄弟の次女）は最もアーネストのお気に入りの妹だった。1919年、アーネストが戦場から戻ってきた際に大変力になったとされているが、アーネストの自殺の5年後の1966年に強度の鬱病で服毒自殺を遂げている。6人兄弟の末っ子ライセスターはアーネストと16歳違いの弟である。そのライセスターも糖尿病と強度の鬱病でやはり1982年にピストルで自殺している。

精神科医のアンドリュー・ファラー（Andrew Farah）によれば精神疾患は間違いなく世代から世代へ受け継がれ、長期における鬱症候群は治らない。現代においても鬱病性障害が治療されないままにしている時間が長いほど治癒は困難であるとしている（Farah 11）。つまり、鬱病をもつ親と生活を共にする子供は、本人が母親の精神状態に気付くこと無く、親の異常体験の犠牲者となる。そのため、知らず知らずのうちにその子供の精神構造に大きな影響を与えていると考えられる。

3.3 「におい」が示すもの

ヘミングウェイが「三発の銃声」を削除し、生前発表しなかったのはヘミングウェイ

イの考える技巧（「冰山理論」）もさることながら、父の存命中に、家族の中を吹き荒れた恐怖の体罰という名の出来事を書くことは憚られたに違いない。生前に伝記を書かれることに対して強く拒絶していたヘミングウェイが、家庭内の暴力を描いた作品を発表することはできなかつたはずである。“If he wrote it he could get rid of it. He had gotten rid of many things by writing them. But it was still too early for that. There were still too many people.”（NAS 259-60）とヘミングウェイが述懐しているように、様々な人に様々な影響がでるため発表することはできなかつたのである。ヘミングウェイは、父クラレンスの持っていた“sick soul”の恐怖から逃れるために、夜寝ないで本を読んだりさまざまな方法で考えないようにしていたのだ。その頃、その“sick soul”の恐怖から逃れるために取っていた行動が示すものは、すでにヘミングウェイの中に父からの異常な体験を形として宿し始めた頃でもあつたのだ。

“sick soul”の恐怖は、父ホールのリベラルなプロテスタント主義を受け継いだ母グレースの感傷的な信心と感性的な信心である“healthy soul”をも凌駕し打ち砕いていたのである。精神疾患は間違いなく世代から世代へ受け継がれていた。鬱病をもつ父親と生活を共にするヘミングウェイ兄弟は否応なしに親の異常体験に巻き込まれていたのである。つまりヘミングウェイをはじめとする子供たちも例外ではなく、彼らの精神構造に大きく影響していたと考えられるのである。この父の恐怖をヘミングウェイは「三発の銃声」に描きこんでいたのである。また、子供の繊細な神経を「におい」という語で父のことを暗示して描かれている「父と子」という作品がある。

Nick loved his father but hated the smell of him and once when he had to wear a suit of his father's underwear that had gotten too small for his father it made him feel sick and he took it off and put it under two stones in the creek and said that he had lost it. He had told his father how it was when his father had made him put it on but his father had said it was freshly washed. It had been, too. When Nick had asked him to smell of it his father sniffed at it indignantly and said it was clean and fresh. When Nick came home from fishing without it and said he lost he was whipped for lying. (NAS 265)

「におい」を嗅げばその「におい」を発するものが想起される。「におい」それ自体の性質を、ものとの結びつくことなしに表現することは容易ではない。壯司は「桜の花の香りはどんな香りですかと質問されても答えようがありません。そこで、β-フェニルエチルアルコールとクマリン(桜餅の香り)とが混ざった香りだと答えています。『におい』は言葉で説明することが非常に困難なのです。ですから成分名で答えざるを得ません」(壯司 8)と言及している。

ヘミングウェイはあえて作品の中で、「脂のにおい」、「かび」、「汗」、「土」、「加齢臭」、「湿った埃」、「父の体臭」などとは書かず、つまり「におい」を発するものとその状況を描かず、ただ“smell”(におい)とだけ描いたのである。作品を読む者自身がそれぞれ想像するであろうその「におい」を、一般的なものへと誘導した状況を描き出している。その意味で、ヘミングウェイはここで“smell”という語を、あえて使ったと考えられるのである。なぜならテキストからは“smell”をあたかも悪臭であるかのように表わし誘導し、すなわち負のイメージとして描き出しているからである。しかしながら、“smell”という語が表現するのは、芳香から悪臭までなのである。つまり読み手はヘミングウェイによって見事に負のイメージへと導かれているのである。

「におい」の素材を限定して表現するための方法を暗示として使っているのである。その素材とは父のことである。ヘミングウェイはニックが父を嫌っているということ婉曲的に拒絶の意味を暗示して描いたのだ。つまり、ニックは自分に与えられた“whip”が嫌だったということ表現するために、父の行動を「におい」という表現で諷意したのである。父の行動がニックを“sick”にさせ、どうしても従うことができなかったのである。度々ヘミングウェイ家で行われていた“whip”の様子を考えれば、ニックが嫌う理由も明白のものとなる。作品の中のニックは、暗示として父の“smell”を限りなく“hate”しているのである。その父の“smell”こそしつけという名のもとに、ヘミングウェイ家で行われていたまさに父の“whip”そのものなのである。その「におい」を嗅げばその「におい」を発するものが想起される。つまり父の「におい」は“whip”がイメージされるのである。その父の“whip”に対して殺したいほどの欲求が高まる。しかし、ふと気が付けばいつきではあるが、狂気にかられた自分がいやになると同時に怒りも収まっていく。その描写が「父と子」に描かれている。

Afterward he had sat inside the woodshed with the door open, his shotgun loaded and cocked, looking across at his father sitting on the screen porch reading the paper, and thought, “I can blow him to hell. I can kill him.” Finally he felt his anger go out of him and he felt a little sick about it being the gun that his father had given him. (NAS 265)

ニックの受けた父の“whip”に対する怒りで、弾を込めたショットガンで父に狙いをつけ、殺してやれるんだけれど、と思うと怒りはおさまるのだが、父に狙いをつけたその銃は、父から譲り受けたものだということを思い出し、気分がわるく (“sick”) なったのである。この心の動きをヘミングウェイは「医者と医者妻」にも描き出している。妻に強く言われるのであるが、それには答えず、自室で銃に触れる場面である。

Her husband did not answer. He was sitting on his bed now, cleaning a shotgun. He pushed the magazine full of the heavy yellow shells and pumped them out again. They were scattered on the bed. ... His wife was silent. The doctor wiped his gun carefully with a rag. He pushed the shells back in against the spring of the magazine. He sat with the gun on his knees. He was very fond of it. (NAS 25-6)

「医者と医者妻」では、ライフルを磨き、そして弾を装てんし撃つことなく弾を吐き出すと、怒りが静まることが描かれている。銃を手にして撃つ真似をすることで怒りが静まるのは、ニックが父にライフルを向けて、「あいつを地獄に吹っ飛ばしてやれるんだ。殺してやれるんだ」、という行動をする子と、多く語らぬ医者が示す同じ思考が、世代間で物語を通して受け継がれていると考えられる。それは、『ニック・アダムズ物語』の最初の作品が「三発の銃声」で始まり、そして「医者と医者妻」へと続き、最後の作品が「父と子」であることから、書かれた時系列からもそれと考えられる。作品の中の父と子にそれぞれ銃に対して描いたことからわかるように、作品間において父から子へと同じ思考が流れていることが露呈するのである。すなわち作品に描かれる父が、すでに息子に内在し、それが「遺産」として受け継がれていたと考えられるのだ。

第4章

「大きな二つの心臓のある川」、「異国にて」、「身を横たえて」、そして「誰も知らない」にみる時制

4.1 時制から見るヘミングウェイの解かれたところ

タイトルである「身を横たえて」は、子供が寝る時に唱える祈りの言葉で、アメリカの読本である *New England Primer* (1737) の中の一節である。この作品を俯瞰して読むとき、10個の回想のパラグラフに区切られていることが、まずわかる。それらのパラグラフの回想の場所により、さらにまとまった「記憶の塊」^(注13)に割り振ることができる。割り振りの方法には、幾つかの方向性がある。武藤脩二は次のように分析している。

「‘Sometime...’で始まる幾つかの文章は、場合・場所の違いによって記憶が整理されていることを示している。・・・「私」の頭は整理整頓されている、というよりは整理整頓されていなければならなかったのである。まさしく「非常に注意深く」整理整頓されているのだ」(『英語青年』 297・・・は筆者)

ジェイムズ・フェラン (James Phelan) は、“Apparently not yet ready to return to what happened “that night,” Nick offers his recollections of two different kinds of memories: of fishing and of his parents.” (53) と、釣りの記憶と両親の記憶という二つの異なった記憶の割り振りが存在することを示している。また、ミリアム・マーティン・クラーク (Miriam Marty Clark) は、Nick が戦争のトラウマにより、死の考えと暗闇が示す神聖な謎の感覚という二つの割り振りをしている (173)。さらに、島村は次のように分析している。「この物語が、そのほぼ中間で、「その年の夏のその夜」に想起されたそれ以前の記憶、つまり眠らないように意識を研ぎ澄まして辿った数多くの夜の記憶と、「今」から回顧された「その年の夏のその夜」の記憶、つまり眠れないでいた「私」が「私」の当番兵のジョンと交わした会話の記憶とに分割されていることである」(『ヘミングウェイを横断する』 64)。つまり、この10ページ余りの作品を子細に分析する

と、方法は異なるが幾つかに割り振ることができることを示唆している。ただし、現在形は「記憶の塊」の中の会話にも現れるが、それらは「記憶の塊」の中の時間帯であるためここでは分析の対象にはならないので省いてもよいと思われる。

ここで新たにこの記憶を詳細に分析する。まず、「記憶の塊」は5つに割り振ることができる。それら5つの「記憶の塊」の割り振りの区切れを示すサインポストは、“am”(NAS 144, 148), “remember”(NAS 146), “think”(NAS 146), “are”(NAS 146), “know”(NAS 146, 153), “remember”(NAS 147), “do not remember”(NAS 148), “can hear”(NAS 148)という10個の現在形である。それらの現在形が、「誰も知らない」で被弾した兵士の精神状態が、「身を横たえて」で語られる「死」への恐怖にとりつかれたニックの感覚を通して、「大きな二つの心臓のある川」で語られる「眠り」を明らかにする。

一つ目の「記憶の塊」は、作品の冒頭“*That night*”(NAS 144)で始まり、“*to make the experiment.*”(NAS 144)で区切られ、蚕室での回想が一人称で書かれている第1パラグラフである。ニックは被弾したことによって起きた、逃れられない「死」への恐怖の精神構造を、次のように語っている。“*I had been living for a long time with the knowledge that if I ever shut my eyes in the dark and let myself go, my soul would go out of my body.*”

(NAS 144 emphasis mine) 文中に位置する“*knowledge*”の語義からも明らかのように、ニックはその被弾の経験後に起きた、暗闇の中で目を閉じて意識が薄れてゆくと魂が体から遊離する経験が、空想や思い込みの感覚ではなく、明白な事実であると語っている。ニックのこの一見幽体離脱のようにも取れる表現から、被弾したことが原因で不眠症 (insomnia) になったと解釈するリチャード・B・ハーヴィ (Richard B. Hovey) は、“*The first half of the narrative is taken up with Nick’s insomniac ruminations.*” (181) と結論づけている。しかし、フェランはニックが、“*I myself did not want to sleep.*” (144) と語っていることから、“*He does not have insomnia but fear.*” (52) と指摘する。不眠症のように眠ろうと努力して眠れないのではなく、意識的に眠ろうとしていないと論じているのだ。フェランのいう“*fear*”の示すこと、そしてニックが、“*If I could have a light I was not afraid to sleep, because I knew my soul would only go out of me if it were dark.* (NAS 148 emphasis mine) と語る中で“*afraid to sleep*”の意味することは、暗闇で目を閉じて意識が薄れてゆくと魂が身体から離れてゆくということを恐れているわけであって不眠

症ではない。さらにニックが、“If I could have a light I was not afraid to sleep, because I knew my soul would only go out of me if it were dark.” (NAS 148 emphasis mine) と語るように、“light”があれば恐れることなく安心して眠ることができたのである。

一つ目の「記憶の塊」の最後に現在形が現れる。“So while now I am fairly sure that it would not really have gone out, yet then, that summer, I was unwilling to make the experience.”

(NAS 144 emphasis mine) この突然の“am”という現在形の出現は、この“am”が物語の状況をニックと時間的に共有することにより、蚕室で被弾が起因する奇妙な現象の起こる過去の記憶を回想しているニックと、作品の中の時間の流れを過去完了から過去、そして一気に現在へと引き戻す効果を合わせ持つ、「現在の語り手」のニックの存在を明示している。その現在とはこの作品の時間の流れの中心軸であるその年の夏のその夜ではなく、まぎれもなくこの作品を執筆していた時（1927年）なのだ。スコット・マクドナルド (Scott MacDonald) は、二人のニックの対比を次のように分析している。

“The most important aspect of the narrative perspective of ‘Now I Lay Me’ involves the careful distinction between the ‘Nick’ who convalesced in Italy and the ‘Nick’ who narrates the story.” (NAS 214)

二つ目の「記憶の塊」は、“I had different ways” (144) で始まり、“and use him for bait.” (NAS 145) で区切られる第2パラグラフと、“Sometimes I found insects” (NAS 145) で始まり、“about the hook.” (NAS 145) で区切られる第3パラグラフ、そして、“Sometimes the stream ran” (NAS 145) で始まり、“to get to them.” (NAS 146) で区切られる第4パラグラフで構成される回想である。この「記憶の塊」は、幼いころとても楽しかった川での鱒釣りの情景である。その情景は、「大きな二つの心臓のある川」で語られる鱒釣りとは重なる。この「記憶の塊」を構成する第4パラグラフにも現在形が現れる。“Some of those streams I still remember and think that I have fished in them, and they are confused with streams I really know.” (NAS 146 emphasis mine) この現在形は、過去の楽しい鱒釣りの空想の川で釣りを回想しているニックであるとすれば、実際の川を知る「現在の語り手」のニックが存在していることを明らかにしている。

三つ目の「記憶の塊」は、“But some nights” (NAS 146) で始まり、“in the daylight.” (NAS 146) で区切られる第5パラグラフと、“On those nights” (NAS 146) で始まり、

“pray for them.” (NAS 147) で区切られる第 6 パラグラフで構成されている。

四つ目の「記憶の塊」は、“About the new house” (NAS 147) で始まり、“I would pray for them both.” (NAS 148) で区切られる第 7 パラグラフと、“Some nights, though,” (NAS 148) で始まり、“and listened to them.” (NAS 148) で区切られる第 8 パラグラフで構成されている。

この三つ目と四つ目の「記憶の塊」は共に物語の最も古い（深い）過去の記憶の回想である。三つ目の「記憶の塊」は、ニックの生家の屋根裏部屋の状況が語られ、そこにある両親のウェディングケーキの入ったスズ製の箱と、父の少年時代のアルコール液に漬けられた蛇などの標本の回想である。祖父の死後、母が設計して建てた新しい家に引っ越すわけだが、母の持って行ってはいけないものという判断で、父の少年時代のアルコール液に漬けられた蛇の標本が焼かれてしまう。三つ目の「記憶の塊」でも現在形が現れる。“I remember those jars from the attic being thrown in the fire, and how they popped in the heat and the fire flamed up from the alcohol.” (NAS 147 emphasis mine) と、“I remember the snakes burning in the fire in the back yard.” (NAS 147 emphasis mine) である。これらの現在形の出現は、火の中に標本を投げられ、アルコールで燃えあがり、蛇も焼かれてしまったという好ましくない最も深い過去の嫌な記憶を回想するニックと、2 度の“remember”の出現で強調される衝撃的な事実を記憶している「現在の語り手」のニックの存在を明らかにしている。四つ目の「記憶の塊」は、整理好きな母が、父が狩猟に行っている間、父が大切にしていた石斧の数々、何本かの石の皮はぎナイフ、鍬を作るための道具類、陶器の破片の数々、そして、たくさんの鍬を焼いていたという記憶の回想である。

「インディアン・キャンプ」や「医者と医者妻」で描かれているニックの父と、インディアンの関係からもわかるように、狩猟に関する父のコレクションの数々が、父が関係のあったインディアンから譲り受けたものであると推測される。その品々を母によって焼かれるのを見ていたという好ましくない記憶が語られる。この四つ目の「記憶の塊」にも現在形が現れる。

And I do not remember a night on which you could not hear things. If I could have a

light I was not afraid to sleep, because I knew my soul would only go out of me if it were dark. So, of course, many nights I was where I could have a light And I am sure many times, too, that I slept without knowing it—but I never slept knowing it, and on this night I listened to the silkworms. You can hear silkworms eating very clearly in the night and I lay with my eyes open and listened to them. (NAS 148 emphasis mine)

この四つ目の「記憶の塊」の回想の時間軸と、一つ目の「記憶の塊」の回想の時間軸がここで合流する。これらの現在形は、暗闇の蚕室で蚕が静かに繰り返し桑の葉を食べている音に耳を傾け眠るまいと神経を集中しながら回想するニックと、戦争中は始終爆撃の音が絶え間なく聞えていて静かな夜などはなかったと語り、魂が抜けだすのは暗闇の時だからということを知り、“light”があれば眠ることができたと再び告白している「現在の語り手」のニックの存在を明らかにしているのである。

五つ目となる最後の「記憶の塊」は、“There was only one other person” (148) で始まり、“I hope you sleep, Signor Tanente.” (NAS 152) で区切られる第 9 パラグラフと“I heard him roll in his blankets”で始まり、“it would fix up everything.”で区切られる第 10 パラグラフである。この「記憶の塊」では、結婚がすべてを救ってくれると信じている 3 人の娘を持つ妻帯者のイタリア人兵士ジョンと、ニックの会話が大半を占める。ここでも現在形が現れる。“He came to the hospital in Milan to see me several months after and was very disappointed that I had not yet married, and I know he would feel very badly if he knew that ,so far, I have never married.” (NAS 153 emphasis mine) この現在形は、蚕室での会話の記憶を回想するニックと、未だ結婚していない「現在の語り手」のニックが存在することを示している。

4.2 2 人のニック

ヘミングウェイは自身の戦争体験を次のように語っている。

“I can remember feeling so awful about the first war that I couldn’t write about it for ten

years,” he said, suddenly very angry. “The wound combat makes in you, as a writer, is a very slow-healing one. I wrote three stories about it in the old days—‘In Another Country,’ ‘A Way You’ll Never Be,’ and ‘Now I Lay Me.’” (Ross 18)

1949年11月、リリアン・ロス（Lillian Ross）とのインタビュー記事で、『ニューヨーカー』に掲載されたものである。

「大きな二つの心臓のある川」を含めた4作品を時系列でみると、「大きな二つの心臓のある川」（1925）、「異国にて」（1927）、「身を横たえて」（1927）、そして「誰も知らない」（1933）の順になる。これら4つの作品はニックの人生の時系列とは逆の時系列で書かれている（島村、『大事典』123）。4作品の起点の作品は、ニックが被弾したことからはまる「誰も知らない」である。「誰も知らない」と「身を横たえて」に現れる現在形が過去形と過去完了形に重なり合う時、この現在形こそがまさしく眠れないニックから眠られるニックへと解かれたところが明示されているのである。ある晩砲弾に吹っ飛ばされ、魂が身体から抜け出して、いったん遠くに漂ってから戻ってきたのを感じて以来、暗闇の中で目を閉じて意識が薄れてゆくと魂が身体から遊離してしまうために眠りたくなくなる。しかし“light”（光）があれば恐れることなく安心して眠ることができる。「誰も知らない」の被弾直後に、ニックは次のように述べる。“I might just lie down,” Nick said. Nick lay on the bunk.”” (NAS 160) さらに、三人称で“and why would he wake, soaking wet, more frightened than he had ever been in a bombardment, because of a house and a long stable and a canal?” (NAS 162 emphasis mine) と語られ、再び1人称と現在形で、“I can’t sleep without a light of some sort.” (NAS 162 emphasis mine) と語られている。この三人称と、現在形で語られる効果は、「身を横たえて」で現在形を論考したように、「現在の語り手」のニックの存在を明らかにしていることに他ならない。

「大きな二つの心臓のある川」では、“He looked up at the sky, through the branches, and then shut his eyes. He opened them and looked up again. There was a wind high up in the branches. He shut his eyes again and went to sleep.” (NAS 182 emphasis mine) と語られているように、昼間の明るい日差しの中で昼寝をするニックがいる。そして、“The mosquito made a satisfactory hiss in the flame. The match went out. Nick lay down again under

the blankets. He turned on his side and shut his eyes. He was sleepy. He felt sleep coming. He curled up under the blanket and went to sleep.” (NAS 187 emphasis mine) とあるように、夜テントの中で、マッチで蚊を殺した後にその火を消して眠りに落ちるニックがいる。つまり、蚊を火で殺してから眠りに入ることからも「記憶の塊」の中に暗喩されている「死」への恐怖からも解放されたのである。

作品の中の過去形と過去完了形が、そこに現れる現在形と重なり合うとき、ニックの人生の時系列の逆に書かれた起点の作品「誰も知らない」から、帰還した兵の物語「大きな二つの心臓のある川」で、ニックは夜に明かりがなくとも眠ることができたことを作者ヘミングウェイは明かしているのだ。つまり、「身を横たえて」で弁明した5つの「記憶の塊」の中に現れる現在形が、精神の傷が治癒した「現在の語り手」ニックがいることを証明しているのだ。何もおきない戦争から帰還した兵の物語「大きな二つの心臓のある川」でニックの精神の傷は癒されて、解かれたところが表現されていると解釈できるのである。

第5章

死に至る脳の変容 慢性外傷性脳症

5.1 作品に表れる変容

2015年、一本の映画が公開された。その名は『コンカッション』(Concussion, 2015)。ウィル・スミス (Willard Carroll Smith Jr.) 演じるナイジェリア出身の医師ベネット・オマル (Bennet Omalu) が、ナショナル・フットボール・リーグ (National Football League: NFL) を引退した後の2002年9月24日に、心筋梗塞で亡くなったマイク・ウェブスター (Michael Lewis Webster) の病理解剖をする。享年50歳であった。オマルはマイクの頭部の病理解剖から、フットボールの試合の最中の、頭部への激しいタックルが原因である脳の病気、慢性外傷性脳症を発見し、その詳細を論文に発表したのであるが、NFLから全否定を受け、さらにさまざまな形で責め苛まれる行為を受け、一時は片田舎で住むことを余儀なくされる。しかしながら、その後オマルの研究内容は世間に認められることとなる。

ヘミングウェイは一般的にマッシュョで冒険好きな作家として知られているが、その人生では数多くの事故や病気に遭遇している。また、その体験が多く作品に描き出されている。最も大きな事故として挙げられるのは、いくつもの作品に描かれている第1次世界大戦での被弾である。そして、最後にして致命的となった事故が、アフリカ旅行での2度にわたる飛行機事故である。実はその間にも過度の飲酒における交通事故や、天窓の落下を含めた大小様々な頭部外傷事故に遭っている。

第1次世界大戦中の1918年に体験した、ピアーヴェ川近くでの被弾から、1961年の自死に至るまで、多くの作品に医学的言及が描きこまれたのは、自身の体験にもよるものであるが、当時の医学の進歩を自分自身で体験したと離れては語れないであろう。現代の医療技術としてのCTスキャンやMRIは、普段の検診に日常使われているが、ヘミングウェイの生きた時代に、そのような細部にわたる検査機器はエックス線検査をのぞき存在しなかった。

ヘミングウェイの生涯は広く研究され多くの伝記が書かれているが、ヘミングウェイの頭部外傷が起因した精神的な外傷と作品に言及した先行研究は、作品の中のヘミン

グウェイの精神分析を取り扱ったものが中心となっていた。そうした中で 2017 年に新たに 2 冊の書籍が出版された。一冊はメアリー・V・ディアボーンの伝記『アーネスト・ヘミングウェイ』で、もう一冊はアンドリューファラーの『ヘミングウェイの脳』である。ファラーは自身が脳神経科医という立場で、ヘミングウェイの生涯と病歴の研究に 17 年の歳月を費やし、アルコールの乱用などの伝記的事実を重視した、本格的に精神分析と作品に関する研究の嚆矢であると考えられる。

様々な事故に遭い、特に度重なる頭部外傷を経験したヘミングウェイと作品に描かれた頭部外傷に着目すると、作品はこれまでに解釈されなかったまったく新たな姿として浮かび上がってくる。戦争での被弾や事故における頭部外傷を描いているように見えるが、実はその背後にはヘミングウェイの経験した頭部外傷を原因として生まれた、言えば「奇妙な感覚」が大きく影響していると考えられる。つまり、慢性外傷性脳症・脳震盪後症候群の影響による頭部外傷の後に起こる、作品の中に現れる時間と場所の変容は短時間の場合もあるが、長い時間に渡る場合もある。エレン・アンドリュー・ノット (Ellen Andrews Knodt) は、ヘミングウェイが 1918 年に負傷した時のことを書いた 1959 年の未発表の回想を引用し次のように考察している。

It is very bad for writers to be hit on the head too much. Sometimes you lose months when you should have and perhaps would have worked well but sometimes a long time after the memory of the sensory distortions of these woundings will produce a story which, while not justifying the temporary cerebral damage, will palliate it. "A Way You'll Never Be" was written at Key West, Florida, some fifteen years after the damage it depicts, both to a man, a village and a countryside, had occurred." ("The Art of the Short Story" qtd. in Flora Ernest Hemingway 138-39)

ノットは頭部外傷が生み出す可能性があるものを“sensory distortions”と言及し、ニックのストーリーに特に関連があり、最近の科学的発見と一致している (Knodt 78) と考察している。

5.2 慢性外傷性脳症

ヘミングウェイの短編小説「格闘家」(“The Battler,” 1925)、長編小説『日はまた昇る』、そして精神の癒しの最終段階を描いた「誰も知らない」の3作品に描かれている「奇妙な感覚」に着目すると、実はその背後に潜むヘミングウェイが遭遇した事故で頭部外傷が深くかかわっている可能性が明らかになる。ガートルード・スタインの言葉である「あなたがたはみんなロスト・ジェネレーションよ」という言葉が、エピローグとして描かれている『日はまた昇る』という作品の中で、自堕落な生活を送っているロバート・コーンとのボクシングの闘いで描かれている「奇妙な感覚」。「格闘家」では、アド・フランシスが突然おかしくなり、ニック・アダムズに暴力をふるおうとする場面における、「奇妙な感覚」に支配されたアドを第三者からの視点で描いている。そして、「誰も知らない」においては、全編に漂う時間と場所の変容が描かれている「奇妙な感覚」である。ヘミングウェイが体験した頭部外傷とこれらの作品との関係性について述べるにあたり、まず頭部外傷について現代の医学的見地を概観してみる。そうすることにより頭部外傷である慢性外傷性脳症とヘミングウェイの体験した頭部外傷と作品との関係性がより明確になる。

前述のウェブスターは、貧困、認知障害、知的障害、人格障害、人格変化、記憶障害、気分障害、うつ病、薬物乱用、そして、ついには自殺未遂を企てた後、数年後に突然死亡した。解剖ではウェブスターの脳は、一見正常に見えた。最初、オマルはウェブスターの脳が、ボクサーで以前によく見られた状態である頭への繰り返しの衝撃、すなわちパンチドランク症候群 (Punch-drunk Syndrome) ^(注14) によって引き起こされる認知症の一種にかかっていると疑っていた。まず、脳を固定して認知症関連の種々の蛋白について免疫染色 ^(注15) を行った。検査を始めてから数か月後、免疫染色の結果を見てオマルは驚愕した。タウ蛋白 ^(注16) 陽性の神経原繊維濃縮体が脳皮質の広範な領域に認められたのである。一方、 β -アミロイド ^(注17) の集積も認められたもののその局在はアルツハイマー病 ^(注18) のそれとは異なった。神経原繊維濃縮体の分布は、ボクサーに見られる脳障害 (いわゆるパンチドランク症候群) と酷似し、頭部への衝撃 (つまり軽度の脳震盪) が慢性的に繰り返されたことが病因である可能性が強く示唆された (李)。CTE の顕著な特徴は、タウと呼ばれるタンパク質の異常な形態の蓄積であ

る。タウタンパク質は過剰リン酸化され（p-タウと呼ばれる）、脳細胞の構造と機能に重要な役割を果たすのではなく、有毒になり、最終的に細胞を破壊する（Stern 4）。

Tau tangles were kind of like sludge, clogging up the works, killing healthy brain cells — in this case cells in regions of the brain responsible for mood, emotions, and executive functioning. This was why boxers went crazy. This was why Mike Webster went crazy, too. (*Concussion* 124)

つまり、健康なニューロン^(注19)にはすべてタウと呼ばれるたんぱく質が存在し、ニューロンからニューロンへ情報を伝達する神経セルが、脳に衝撃が与えられた後、タウたんぱく質は泥のようになり神経セルは死滅してしまうということである。ウェブスターの脳には、この泥のようなタウたんぱく質が数多くみられたのである。オマルがさらに脳を検査していくにつれて、さらなる脳損傷が明らかになった。CTEは脳震盪が唯一の原因ではなく、低レベルの半脳震盪的な怪我も原因であることがわかった。

CTEはここ数年、脳震盪との関連で脚光を浴びている変性脳疾患である。その原因は、脳震盪等の比較的軽微な脳損傷を繰り返すことにあると考えられているのだが、これまでの報告例は、アメリカン・フットボールやアイスホッケーなどの、いわゆる「コンタクト・スポーツ」の選手、あるいは、従軍経験のある兵士に限られてきた。従軍経験のある兵士は爆弾がさく裂した爆風で強度の脳震盪になるからである（李）。またオマルは、27歳のイラク戦争での退役軍人の脳内でもCTEを発見した。その退役軍人は、心的外傷後ストレス障害（Post-traumatic Stress Disorder : PTSD）にも苦しみ、後に自殺で亡くなった。ウェブスターの例が報告された2005年以降、CTE症例の蓄積が進み、「変性脳疾患」として認知されるようになった。映画でも描かれているように、オマルは2005年の*Neurosurgery*というジャーナルに、ピッツバーグ大学の病理学部門の同僚と共に、「ナショナルフットボールリーグプレーヤーの慢性外傷性脳症」という題名で論文を発表した（*Neurosurgery*, 128–134）。

「脳震盪等、比較的軽微な頭部外傷を繰り返すことが行動の異常や人格の変化をもたらす変性脳疾患の原因となる」というCTEの概念が、ようやく医療の領域を越えて

一般にもアナウンスされるようになったのは、2007年以降のことであった(李)。2016年、アメリカ医師会は、CTEに関する研究に対して、オマルに最高の栄誉である *Distinguished Service Award* を授与した。CTEの「恐怖」を、アメリカ国民がどのように周知されたかということを実に物語る発言が、*ニュー Yorker* 誌の2014年1月27日号の記事で紹介された。NFLにおける脳震盪問題について聞かれた際に、「もし私に息子がいたら、プロ・フットボールはさせないだろう」と、CTEの「恐怖」を認めたのは誰だろう、米国大統領バラク・フセイン・オバマ2世(Barack Hussein Obama II)だったのである。

5.3 「格闘家」のアド・フランシス

次にヘミングウェイの受けた頭部外傷について考察するにあたり、彼がいったいどれだけの回数の頭部外傷を受けたかを詳細に辿る。ヘミングウェイは思春期から成人期にかけて、男らしさの証をボクシングに求めていた。サム・ラングフォード(Sam Langford)、ジャック・ブラックバーン(Jack Blackburn)、トミーギボンズ(Tommy Gibbons)、そしてハリー・グレップ(Harry Greb)のような、伝説に残る有名なプロフェッショナルなボクサーとスパークリングの相手としていたことを鼻にかけていた(Lynn 59)。結果として、繰り返される頭部への殴打に耐え、軽微なものから厳しい頭部外傷による損傷があったことは容易に推測できる。

ヘミングウェイの人生を振り返ってみれば、様々なスポーツに満ちていると言えるだろう。ボクシング、カリブ海での釣り、アフリカでの狩り、スイスでのスキー、そしてスペインでの闘牛である。闘牛については『午後の死』(*DIA*, 1932)で書かれているように、70枚の写真が掲載され、用語小事典や日程表までもが付いてあり、素晴らしい闘牛の解説書でもある。ボクシングについて書かれているものでは、ロバート・コーンとのやりとりが描かれている『日はまた昇る』、『ニック・アダムズ物語』の中の短編小説「格闘家」や「殺し屋」などがある。

ヘミングウェイは出版されている幾つもの伝記にあるように、18歳以降に数多くの事故に遭遇している。詳しく見てみると、少なくとも13回の事故(うち、頭部外傷に

限れば12回)に遭っている。つまり彼の身体の負傷と頭部外傷は頻繁に繰り返され、損傷を受けていたのである。ファラーが50歳頃には脳細胞は回復ができないほど変化しており、遺伝子は時期尚早の衰えがプログラムされていたと考察しているように、すでに脳の衰退が確実となっていた(Farah 27)。

最初の重大な生命にかかわる頭部の損傷は、第一次世界大戦時に受けたものである。イタリアで赤十字の救急車のドライバーとして参加していた1918年である。6月22日、前線に近いところで軍務についていた時である。彼はイタリア到着後、軍務について1か月以内で負傷したアメリカ人として歴史に残ったかもしれないが、実際にはエドワード・マイケル・マッケイ(Edward Michael McKey)が6月18日に犠牲になっていた(Farah 28)。最前線の部隊にタバコやコーヒーを配達していたまさにその時、地獄が出現した。オーストリア軍の迫撃砲弾が、ヘミングウェイのいた塹壕に打ち込まれたのである。その様子をヘミングウェイは後に、「溶鉱炉の扉が開いたようだった」と形容している(FTA 50)。外気がはっきりすると、金切り声とマシンガン掃射の音が聞こえてきた。つい先ほどまで隣で話していた兵士はすでに死んでいた。別の兵士は吹き飛ばされた自分の脚をつかんでいた。ヘミングウェイ自身も脚に砲弾の破片が突き刺さり出血していた。3人目の兵士の体を肩に抱えて運んでいる間も、ゴム製の軍靴のブーツから血があふれ出ていた。よろめきながら150ヤード(約137メートル)先の赤十字の退避壕へと向かっていた。その途中、彼の軍服は担いでいた虫の息だった兵士の傷からの出血でさらに血まみれになっていた。そして退避壕へ着くなり倒れこんだのである。ヘミングウェイはそこで2時間ほど横たわり、赤十字の運転手によってフォルナーチにある救護所まで運ばれる途中、意識は薄れたり戻ったりを繰り返していた。その後、ミラノの赤十字病院に入院する。『武器よさらば』など幾つもの作品で、その状況が描かれることになる。夏から秋にかけて、ミラノの赤十字病院でフォッサルタで受けた迫撃砲と機関銃の銃撃のため、237か所から断片や弾の摘出をする手術を受けた。その爆発に遭った時の状況を要約すれば、「魂が口の中に飛び出してきて、気絶してしまった。呼吸が止まって死んだと思っていたら、やがて呼吸が戻ってきて生き返ったのだ」という状況だったようだ(島村、『ヘミングウェイ—人と文学』35)。

その7年後に発表された「格闘家」の中で、頭部外傷の影響について次のように語られる場面がある。貨物列車に無賃乗車をしているのをとがめられ、列車から殴り落されたニックは、痛む体をかばいながら、線路に沿って歩いていると、焚火をしている男に出会う。その男は元ファイターで、グロテスクな顔で外観を損なう肉体的な傷だけではなく気分や行動が恐ろしく暴力的で、すぐに暴力をふるおうとするのである。アドというその男は「俺は気が狂っている」と話し、食事の準備中にナイフを貸さなかったニックに喧嘩をふっかけ、殴りかかってくる場面がある。しかし、すんでのところアドとともに放浪生活をしているバグズが、アドの後頭部を鯨骨でできた棍棒で後頭部を殴り気を失わせ、ニックは難を逃れる。

“Listen,” the little man[Ad] said. “I’m not quite right,”

“What’s the matter?”

“I’m crazy.”

He put on his cap. Nick felt like laughing.

“You’re all right,” he said.

“No, I’m not. I’m crazy. Listen, you ever been crazy?”

“No,” Nick said. “How does it get you?”

“I don’t know,” Ad said. “When you got it you don’t know about it. You know me, don’t you?”

“No.” (NAS 50)

さらに物語は続く。

The little man[Ad] looked down at Nick’s feet. As he looked down the negro, who had followed behind him as he moved away from the fire, set himself and tapped him across the base of the skull. He fell forward and Bugs dropped the cloth-wrapped blackjack on the grass. The little man lay there, his face in the grass. The negro picked him up, his head hanging, and carried him to the fire. His face looked bad, the eyes open. Bugs laid him

down gently. “What made him crazy?” Nick asked. “He took too many beatings, for one thing,” the Negro slipped the coffee. (*NAS* 55)

アドは顔に傷を持つ元プロボクサーであるが、ただ傷があるだけではなくボクシングで脳をも損傷し、怒る理由がないにもかかわらず自制がきかなくなり、すぐに暴力をふるうのである。その場面は、ニック自身が脳を損傷して起こしたことを描いたのではない。ニックの視点を通して、脳に損傷を受けた人間が、自分が脳に損傷を受けた影響で行動していると知らずに行動する人間を、冷徹に観察しているのだ。

また、マイケル・レイノルズは被弾後に、ヘミングウェイが故郷へ帰還した後、さまざまな文献に目を通し、自分に起こる症状を調べていた事を探し、その状況を当時の医学的知見とともに次のように考察している。

In the *American Medical Association Journal*, stacked in his father’s office, he read about “shell shock,” only they called it neurasthesia. Maybe he had neurasthesia. It was a hot item in the magazines. No one really understood it, but some of the vets had it. . . . Even the Oak Park newspaper knew about shell shock. It said that laymen and professionals would be interested in the survey of vets being done by the Epiloptographic Society. It was a safe thing to be interested in. But the more Hemingway read, the less he thought that he had it. If he did, he did not have it bad, except a little maybe in the night. He would not tell his father about that either. Or anyone else just yet. A few years later when he invented Nick Adams, he gave him the shell shock. Nick would lie awake at night listening to the silkworms eat the mulberry leaves. Hemingway had heard the silkworms munch but that was before he was blown up in the night. He too had spent sleepless nights after the wounding, but he did not have in the way Nick would have it, nor as badly.

(*Young Hemingway* 47)

当時は神経衰弱（症）と呼ばれたシェルショックについて、ヘミングウェイは父の診療室に積まれていた医学雑誌に目を通していたのだ。シェルショックはまだ一部の

人たちだけに知られ本当に理解している人は少なく、ヘミングウェイはいくら読んで
も自分がそれを持っているとは思わなかった。万一持っていたとしても、夜に少しだ
け症状が出ることを除けば悪い状態とは思わなかった。自分の頭がおかしくなったと
思われたくなく、そのことは誰にも口を閉ざしていた。作家ヘミングウェイは、父で
あり医師でもあるクラレンス・ヘミングウェイの雑誌に丹念に目を通し自分の経験と
その結果に現れる症状について調べていたのだ。しかし、病を持った患者の多くがそ
うであるように、症状が出ていても自分はそうではないと思い込もうとしていたこと
が読み取れる。ただ、最もひどい症状である、夜眠れずにいてつい眠ってしまうと、
自分がこのまま死んでしまうのではないかという考えに取りつかれていたのだ。この
症状についてはすでに拙論で考察したように、ある晩砲弾に吹っ飛ばされ、魂が身体
から抜け出して、いったん遠くに漂ってから戻ってきたのを感じて以来、暗闇の中で
目を閉じて意識が薄れてゆくと魂が身体から遊離してしまうために眠りたくなる。
しかし“light”（光）があれば恐れることなく安心して眠ることができるのである（坂田
55-6）。ここでは被弾による後遺症（PTSD）も描かれているのだ。アドと同様に、ヘミ
ングウェイもいつか自分の脳がこのような形で永遠に変化し、それでもいくぶんかは
洞察力があることに気づくだろう（Farah 4）、とファラーが言及するように、この時期
以前に既に自分の脳の変容に気が付いていたことがうかがえる。1929年のオーウェ
ン・ウィスターに宛てた手紙の中に、1919年には脳震盪を起こしていた影響で寝るこ
とができなかったと告白している（*SL* vol. 3, 537-38）。作品は被弾から数えて7年後の
ものである。この被弾以降、約15年に渡り、時間と空間の変容である「奇妙な感覚」
が作品に現れる。

5.4 『日はまた昇る』に表れる「奇妙な感覚」

1926年に発表された『日はまた昇る』では、あたかもボクサーが頭部に強烈なパン
チを受けたあとの様子が、ロバート・コーン（Robert Cohn）とスパニッシュ・カフェ
での殴り合いの場面で、次のように描かれている。作品は第一次世界大戦中のパリで
の出来事である。アメリカ人の新聞特派員、ジェイク・バーンズ（Jake Barnes）は戦争

中の負傷が原因で性的不能者となる。戦後の世界で価値観を見つけ出そうとしながら、自分の生き方を探っている。ジェイクはパリで、かつてボクシング選手だったロバート・コーンと出会う。ロバートはすでに妻と離婚して、事業も失敗した後、文芸評論もうまくいかずにパリにやってきて小説を書いている。ジェイクは戦時中入院していた病院の看護婦であったブレット・アシュレー (Brett Ashley) と成就できない恋愛に虚しさを感じている。そんな中、ジェイクとロバートが、仕事の帰りカフェ・スイズでブレットのことで諍いを始める。その際、ジェイクはロバートのパンチを2度受ける。しかし、ここにはそれだけではないさらに深い意味が隠されているように思える。パンチを受けた後のジェイクの様子をみてみたい。

I swung at him and he ducked. I saw his face duck sideways in the light. He hit me and I sat down on the pavement. As I started to get on my feet he hit me twice. I went down backward under a table. I tried to get up and felt I did not have any legs. I felt I must get on my feet and try and hit him. Mike helped me up. Some one poured a carafe of water on my head. Mike had an arm around me, and I found I was sitting on a chair. Mike was pulling at my ears. 'I say, you were cold,' Mike said. (SAR 168)

ここでジェイクはロバートのパンチを2度受け、しばらくのあいだ意識を失っていたのである。いわゆるボクサーによく見られる状態の、頭への繰り返しの衝撃である。これこそがボクサーの経験する頭部外傷による脳震盪である。カフェで強烈なパンチを2度食らった後気を失い、正気を取り戻すのだが、その間に「奇妙な感覚」が訪れるのである。ファラーは脳科学者からの視点でヘミングウェイの脳機能について綿密に調べ、彼の脳にもボクサーの受ける数多くの強力なパンチや、フットボール選手が経験している頭部への衝撃が考えられると考察している。これがすなわちパンチドランク症候群と言われるもので、その頭部への衝撃によって引き起こされる認知症の一種である認知障害である (Farah 38)。ヘミングウェイの脳震盪の表現はこれで終わることなく、続くカフェからの帰り道でも「奇妙な感覚」が現れる。

Walking across the square to the hotel everything looked new and changed. I had never seen the trees before. I had never seen the flagpoles before, nor the front of the theatre. It was all different. I felt as I felt once coming home from an out-of-town football game. I was carrying a suitcase with my football things in it, and I walked up the street from the station in the town I had lived in all my life and it was all new. They were raking the lawns and burning leaves in the road, and I stopped for a long time and watched. It was all strange. Then I went on, and my feet seemed to be a long way off, and everything seemed to come from a long way off, and I could hear my feet walking a great distance away. I had been kicked in the head early in the game. It was like that crossing the square. It was like that going up the stairs in the hotel. Going up the stairs took a long time, and I had the feeling that I was carrying my suitcase. There was a light in the room. Bill came out and met me in the hall. (SAR 170, emphasis mine)

その喧嘩で受けたパンチによる脳震盪の影響で、ホテルに向かって歩いている時、突然まわりの様子が一変する。まるで高校時代に戻ったようで、試合で訪れた知らない街を歩き、遠くから歩いているような感じがしたり、自分の足音も遠くから聞こえてくるような感じがするのだ。意識と記憶は、試合が始まってすぐに頭を蹴られてから消失し、その後「奇妙な感覚」が訪れるのである。高校時代にフットボールで頭に受けた衝撃の影響で、時間と場所が変容する不思議な情景が浮かぶのだ。ファラーはヘミングウェイの治療の跡を綿密に追い、“he was no stranger to the bizarre sensory changes that can accompany a head injury.” (Farah 40) であると考察している。『日はまた昇る』が出版されたのは1926年であるから、ヘミングウェイにはその年までに、既に幾つかの後遺障があったと考えられるのである。

5.5 「誰も知らない」に表れる恐怖の **it** と **them**

2度目に頭部に大きな損傷を受けたのは、パリ時代の1928年3月4日のことである。2度目の妻との生活の最中であつた。「ヘミングウェイ天窓の落下事故で切り傷を

負う」と、ヘラルド紙はヘミングウェイの事故を伝えた。パリのヌイイにあるアメリカの病院の関係者によれば、ヘミングウェイは自宅で日曜の朝、昨日取り換えられた天窓が落下し、頭部の内側に3針、外側に6針の傷を負ったということだった。天井からガラスが落ちてきて頭部の左目からわずか2インチのところに深い傷ができた。被弾以降にヘミングウェイは、自分の顔を流れる血の匂いと外科医の治療中にそんなに大量の血が流れるのを見たことはなかった。Reynoldsはその状況を次のように語っている。

What the paper could not report was the odor of his blood as it streamed across his face, or the pricking of the surgeon's needle closing the wound. He had not seen so much of himself exposed since the night in Italy when the mortar blast turned his right knee to jelly, filling his boot with blood. Giddy with shock, he tried to explain to Archie in the night cab streaking to the hospital how the blood tasted and how the smell of it was like being in the ambulance again with the men dripping in the back, but it all came out wrong. The stranger's face in the hospital mirror was too white to be his own, and the bandage swathing his head too large for civilian times. (Reynolds, *Homecoming* 166-67)。

また、ヘミングウェイは自分は事故に逢いやすいというわけではないと後述しているが、ちょうど「異国にて」を書いている最中のことだった (Baker, *Life* 287-88)。

3度目の事故は、2年後の8月22日、モンタナ州で乗馬中、急に暴れ出した馬にまたがったまま降りる機会を失い、繁みの中で腕と脚を怪我し、頭部に衝撃を受け顎の左側に深い傷をおった。その縫合で顔が歪んでしまった (Baker, *Life* 324)。4度目の頭部への衝撃を受けたのは、ドス・パソスと10日間のハンティング旅行の後の1930年11月1日だった。対向車のヘッドライトに目がくらみ、車が道路わきの水路に突っ込む交通事故で右腕に大けがを負った。5度目の事故は第2次世界大戦中の1944年5月25日（前日午後10時頃から飲酒）で、ロバート・キャパの自宅でのパーティーの帰り、早朝、灯火管制が敷かれて真っ暗な中、運転を誤りスチール製の給水タンクに激突した。ヘミングウェイの両膝はダッシュボードに当たりひどく腫れてしまった。彼

の頭皮は 1928 年以來 2 度目になる病院の救急処置室に連れていかれることになった。浅いところではきれいに裂けていたが醜く長く深い切り傷であった (Reynolds, *Final* 94)。そして重度の頭部外傷を受け、頭は約 2 時間半かけて 57 針縫うこととなった。その影響で何か月にもわたりひどい頭痛が続いた。その頭部外傷による脳震盪のため、アルコールを禁じられていたにもかかわらず、ウイスキーを飲み続けさらなる頭痛に悩まされた (Baker, *Life* 596)。次の大きな事故は前の事故から 3 カ月も経過していない同年 8 月 5 日に起きた。キャパと同乗中に、ヘミングウェイの 3 ヤード前方のドイツ軍の砲撃を避けようとして、車が側溝に突っ込み頭を石に打ちつけたのである。キャパによれば、ヘミングウェイが瀕死の重傷だった時、ドイツ軍にはなく、キャパが有名な作家の死体の最初の写真を撮るために待機していたことにたいそう腹を立てたということだった。

In Capa's words. Hemingway "was furious. Not so much at the Germans as at me, and accused me of standing by during his crisis so that I might take the first picture of the famous writer's deadbody." (Capa. *Slightly* 166)。

ヘミングウェイはこの事故で死の淵を覗いたのであるが、頭部外傷の後遺症である物が二重に見える視覚障害、記憶障害、言語障害などが顕著になった。その 6 年後、ヘミングウェイはチャールズ・スクリブナーズに宛てた書簡で、その時の様子を戦車の砲撃が私を持ち上げて頭から落としたと述べている。(SL 723)。

1933 年、ヘミングウェイは戦争経験を「誰も知らない」で、癒しの最終段階として描いた。その作品は、主人公のニックが自転車に乗ってパラヴィチーニ隊長が指揮をする大隊が駐屯しているところへやってくるころから始まる。ニックは、米軍が来ると思わせるために、米軍の軍服を着ている。パラヴィチーニ隊長ととりとめのない会話の最中、“Nick remembered suddenly and completely.” (CSS 309) とあるように、ニックは突然フラッシュバック^(注 11) であの時の記憶を完全に思い出したのだ。あの時の記憶とは、“This was not as large a dugout as the one...because of a house and a long stable and a canal?” (CSS 310-11) とあるように、作者ヘミングウェイが実際に体験した、オ

オーストリア軍の迫撃砲弾で被弾したものに他ならない。ニックがパラヴィチーニ隊長の勧めで、テントの中の寝棚で横になった時、その情景が生々しく一連の状況として思い出されたのである。

but those were the nights the river ran so much wider and stiller than it should and outside of Fossalta there was a low house painted yellow with willows all around it and a low stable and there was a canal, and he had been there a thousand times and never seen it, but there it was every night as plain as the hill, only it frightened him. That house meant more than anything and every night he had it. That was what he needed but it frightened him especially when the boat lay there quietly in the willows on the canal, but the banks weren't like this river. (CSS 310-11 emphasis mine)

あの時の記憶が完全によみがえったのは砲撃の恐怖だけではなく、黄色く塗られ長い厩を備えた一軒の家と、何千回も行ったのに、その運河を見たことがなかったからである。そして、その運河は目の前のこの川のようにではなく、見たこともない不思議な運河の恐怖が混じりあうのである。思考が現実に戻った時、周囲を見回すと皆がじっと自分を見ていることに気付くのである。再び横になると、次によみがえる記憶は戦闘ではなく、長い厩を持つ黄色い家と運河で、戦闘よりも恐怖となり汗だくで目が覚める。パラヴィチーニの指揮する大隊本部の寝棚に横たわっている最中に、記憶の中でその混沌とした時間と場所がさまざまに変容している。再び思考が現実に戻り目を覚ましたニックは、戸口で自分を凝視している副官、通信兵、そして二人の伝令の顔を見返した。つまりここから導き出されるニックの状態は、静かにベッドに横たわっていたのではなく、大声を出していたのか、あるいはあたかも悪夢に苛まれているような様子で誰もが気づくようだったと推察される。

ニックに突如あの時の記憶が完全によみがえったのだが、その記憶の中に、“...it was that started them.” (CSS 310) とあるように、その被弾の時以来、“them”がニックに起こり始めたのだ。この“them”と以下の it”については島村が精神的な外傷という内容で詳述しているが、本論においては頭部外傷における影響という視点で考察する。まず始め

は、“He felt it coming on now.” (CSS 311) の“it”が示す内容である。その内容とは、“I am demonstrating the American uniform,” から始まり、“That is all, gentlemen. Good-day,” (CSS 312) で終わる、長尾が考察しているイナゴとバッタに関してのとても長い話である (長尾 51)。ニックの様子があまにも奇妙なので、副官は二人の伝令に少佐を捜すように命じたのである。現れたパラヴィチーニ隊長もニックの様子がおかしいのを察し、再び横になるように勧めた。二人の会話の最中、また同じような状況が起こり、“He felt it coming on again.” (CSS 313) とあるように、再び“it”が現れるのを感じたのである。“He was trying to hold it in.” (CSS 314) 一度は抑えようとしたのが、“He knew he could not stop it now.” (CSS 314) 抑えることができなかった。その内容とは、“He shut his eyes.”で始まり、“yellow house with a low stable and the river much wider than it was and stiller.” (CSS 314) とあるように、再び被弾したあの時の記憶がよみがえり、前述の恐怖の二つの“it”の纏まりである“them”が起こり始めたため記憶が混沌となるのである。しかしながら、ニックが最後にパラヴィチーニ隊長に話をしている中で、“I’m all right now for quite a while. I had one then but it was easy. They’re getting much better. I can tell when I’m going to have one because I talk so much.” (CSS 314) とあるように、自分がおかしくなることがあるということを認識しているのである。それでも“it”には抵抗できない。“it”の纏まりである“them”とはまさしく、ヘミングウェイ自身が経験した被弾後の頭部外傷による PTSD に他ならない。

結 論

戦争がどれだけ作家に深い傷を与えるかということについて、この作品以前では全く触れてこなかった。戦争で傷を負ったヘミングウェイ自身が語るように、戦争から受けた精神の傷を癒すのにはとても長い時間が必要だったということである。ヘミングウェイがこれまで描くのを避けていた被弾の瞬間にまで迫り、そこから派生した深刻な精神的外傷を、赤裸々にニックの幻覚の中に炙り出したからである（島村、『ヘミングウェイを横断する』 66）。つまり島村が論じるようにヘミングウェイは書くことによって癒されたと考えられる。この作品では、従軍経験のある兵士に見られる、明らかかな頭部外傷を受けた後の状態が描かれている。すなわち「誰も知らない」というこの作品は作者ヘミングウェイが被弾の状況を書くことによって癒されたと考えられるのであるが、翻って考えると、終始被弾や後天的な事故などの頭部外傷（脳震盪）とその影響下の PTSD に苛まれた物語であると捉えることができる。

1950年代の医学は「脳震盪後症候群」（Post-concussion Syndrome: PCS）^(注20)をまだ定義していなかったが、頭部外傷がさまざまな神経学的および精神医学的症状を引き起こす可能性があることはよく知られていた。病状は変化し、時間とともに断続的になるのである。一般に患者の年齢が高いほど、脳の回復力が弱くなり、症状が重くなり、長く持続する。典型的な例として、いらいらと気分のむら、記憶と集中力の欠如、騒音と光過敏、めまい、疲労、耳鳴り、不眠症、判断障害である。ヘミングウェイは、これらの脳震盪後のさまざまな時点で、上記のすべてを有していた（Farah 36-37）。このようにヘミングウェイは度重なる脳震盪をおこしているが、急性期^(注21)から引き続き起こる脳振盪後症候群があり、これらの病態は軽症頭部外傷を繰り返すことによって発生するリスクが高くなるといわれているものと、スポーツ選手や軍事活動に従事する兵士のように、軽症頭部外傷を繰り返し受傷した人たちが、受傷から数年後に慢性的な認知機能障害や抑うつ状態を呈することが報告され、繰り返される軽症頭部外傷に関連する慢性外傷性脳症がある（宮内 191、Farah 39）。

ヘミングウェイは1945年6月20日、7度目の事故を起こした。彼は4人目の妻になるメアリーがシカゴへ向かうために飛行場へ運転の途中、車が道路でスリップし、

側溝を飛び越え立ち木に激突したのである。その事故でヘミングウェイは頭をバックミラーに強打し、ハンドルで肋骨を4本折り、左膝を割ってしまう。これも飲酒運転の末の事故だった (Reynolds, *Final* 131-32)。8度目の事故は1950年7月1日。『ピラール号』の濡れた甲板で足を滑らせ大きな材木に頭を強く打ちつける。頭に手をやると手は血で真っ赤に染まった。偶然近くにいた別の船に乗っていた医師により三針で傷口を塞げたが、深い裂傷で骨にまで達する傷だった (Baker, *Life* 738)。9度目は1953年10月、「ルック」の編集長のビル・ローと10日間ほど狩りをしていた時のことだった。急カーブを曲がっている時、ヘミングウェイはランドローバーから転落して顔面を切り、肩をねん挫した (Baker, *Life* 788)。車から転落したのち、肩をねん挫し顔に裂傷を負ったというこの事故の様子からうかがえることは、頭部への強い衝撃 (顔の裂傷)、すなわち脳震盪だったと考えられる。

10度目と11度目の事故は共に最も深刻な頭部外傷であった。1954年1月23日、2度にわたるアフリカでの飛行機事故でのことである。頭部を含む全身に怪我をした。旅行中の体験した1度目の事故は、突然黒色と白色のトキの群れが飛行機の行く手を遮り、それを避けようとしたパイロットは飛行機を急降下させた。その際、峡谷の上に張られてあった古い電線に機体を接触させてしまい、藪の中につこんだ。かろうじて着陸には成功したが、ヘミングウェイは背骨、右腕と右肩をひどく打撲し痛みが続いた。おそらくこの事故においても状況から、頭部への衝撃があったことは容易に推測できる。翌日に起こった2度目の事故は1度目の事故の後に乗った飛行機が、整備されていない穴だらけの滑走路からの離陸に失敗して停止し炎上して爆発したのだ。その際のヘミングウェイは頭から出血して漿液が流れ出し、右腕は脱臼し、全身打撲、肝臓、腎臓と脾臓の破裂、左眼の一時的失明、背骨の故障、左足の捻挫、顔、腕と頭の第一次火傷、そして視力にも障害を受けたのである。これが、ヘミングウェイが最後にして最も深刻な脳震盪事故となったのである (Reynolds, *Final* 272-74)。12度目の事故は、同年2月2日、釣りに出かけた時、雑木林で発生した火事を消そうとして火の中へ飛び出していったのだが、先のアフリカでの飛行機事故で体の動きがままならなかったため、つまずいてしまいそのまま炎の中へ倒れた。助け出された時は、着ていた服から煙がくすぶっていて、第二次火傷 (火ぶくれ程度) を脚、腹部、胸、そし

て唇に、第三度の火傷（黒こげになる程度）を左手と右腕に受けていた。この時の事故においても状況から何らかの衝撃が頭部にあった。

ヘミングウェイの受けた頭部外傷は、まず急性期の PCS で、後の度重なる事故で CTE に移行したと考えられる。個人の脳は個別であり、治療により解決される場合とそうでない場合がある。何年も症状を抱えている理由はわからない。回復のパターンはほとんどないが、高齢で脳震盪に苦しむ患者と非常に重度の頭部の外傷を負った患者は、一生神経障害を持っている可能性が高くなる。CTE は、ヘミングウェイが経験したような脳震盪による損傷だけでなく、複数の「閾値以下」の脳外傷、つまり、脳震盪を引き起こすほど強力ではないが、それでも損傷を与える多数の打撃から生じる可能性があるというファラーは考察している（Farah 39）。

『ニック・アダムズ物語』の中の「格闘家」、「誰も知らない」、そして『日はまた昇る』が書かれたのは、ヘミングウェイが遭遇した度重なる大事故の最中である。作者ヘミングウェイは、頭部外傷に伴う「奇妙な感覚」を知らぬ人ではなかったということである。その「奇妙な感覚」を天賦の才能であると確信して、そのことを自分のものにして描いていたのであるが、彼は度重なる頭部への怪我を伴って、次第に贈り物としてのそれから、実際に CTE の後遺症である「奇妙な感覚」の変容と自身の PTSD には気づいていたが、その先に進んだ認知症になっていることに本人は気が付いていなかったのである。

註

(1) 頭部外傷の一般的な原因には、転倒や転落、自動車事故、暴行、スポーツやレクリエーション活動中の事故などがある。軽症の頭部外傷では頭痛やめまいが起こることがある。重症の頭部外傷では、意識を失ったり、脳機能障害の症状が現れたりすることがある。重症の頭部外傷かどうかを調べるには、CT（コンピュータ断層撮影）検査を行う。重症の頭部外傷の治療では、脳に十分な酸素を供給することや、脳圧を正常に保つことが目標になる。脳は、硬く分厚い頭蓋骨によって外傷から守られている。また、脳は内部が脳脊髄液（髄液）で満たされた組織の層（髄膜）に覆われていて、これがクッションの役目を果さない。このおかげで頭をぶつけても、多くの場合、脳は傷つくことがない。脳への影響がない頭部外傷は軽症とみなす。しかし、頭部外傷により脳の損傷（外傷性脳損傷）が起こることがある。米国では毎年約1万人に50人が頭部外傷を負っている。2013年には、外傷性脳損傷が原因で以下のイベントが報告された。

外傷性脳損傷は、あらゆる種類のけがによる死亡の約30%を占めている。米国では、重度の頭部外傷を負った人のうち25～33%が死亡している。頭部外傷によって永久的な身体障害が残った患者数は約530万人に上る。頭部外傷には次のようなものがある。頭皮の損傷、頭蓋骨の骨折、脳しんとう、多くの場合スポーツに関連する脳の打撲（脳挫傷）や裂けた状態（脳裂傷）、脳内または脳と頭蓋骨の間に血液がたまった状態（頭蓋内血腫）、脳全体の神経細胞の損傷（びまん性軸索損傷）、脳を覆う層と層の間への出血（くも膜下出血など）。外側の傷がひどくても、脳は損傷していないこともある。

出典：<https://www.msmanuals.com/ja->

[jp/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0/25-%E5%A4%96%E5%82%B7%E3%81%A8%E4%B8%AD%E6%AF%92/%E9%A0%AD%E9%83%A8%E5%A4%96%E5%82%B7/%E9%A0%AD%E9%83%A8%E5%A4%96%E5%82%B7%E3%81%AE%E6%A6%82%E8%A6%81/2021/08/15](https://www.msmanuals.com/ja-jp/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0/25-%E5%A4%96%E5%82%B7%E3%81%A8%E4%B8%AD%E6%AF%92/%E9%A0%AD%E9%83%A8%E5%A4%96%E5%82%B7/%E9%A0%AD%E9%83%A8%E5%A4%96%E5%82%B7%E3%81%AE%E6%A6%82%E8%A6%81/2021/08/15)

- (2) 概要:さまざまな原因で脳の神経細胞が破壊・減少し、日常生活が正常に送れない状態になることをいう。認知症にはさまざまな種類があり、脳にあるアミロイド β やタウと呼ばれる特殊なタンパク質が蓄積されることで起こる「アルツハイマー型認知症（通称アルツハイマー）」は中でも最も患者数が多い。その他、脳梗塞や脳出血、くも膜下出血をきっかけに発症する「脳血管性認知症」、神経細胞にできる特殊なたんぱく質のレビー小体が脳の大脳皮質や脳幹にたくさん集まったことで発症する「レビー小体型認知症」などがある。

原因:脳細胞が減少・壊死することで起こる認知症は、その種類によって原因は異なる。男性よりも女性が発症することが多いアルツハイマー型認知症は、脳にアミロイド β という特殊なたんぱく質がたまり、脳細胞が壊れて死んでしまい減っていくことで起こる。このアミロイド β は加齢により増えやすくなるため、高齢者が発症することが多い。ただ、30～50代の若い人が発症することも（若年性アルツハイマー型認知症）。その場合は遺伝が関係しているといわれる。脳血管性認知症は脳梗塞や脳出血、くも膜下出血などにより脳血管が損傷したことで発症。糖尿病や高脂血症、高血圧といった生活習慣病を持つ人がなりやすい。ストレスや喫煙も危険因子だといわれている。レビー小体型認知症は、神経細胞にできた特殊なたんぱく質のレビー小体が脳の大脳皮質や脳幹に増えすぎたことが原因。高齢の男性が発症しやすい。

出典: <https://doctorsfile.jp/medication/7/2021/08/20>

- (3) 『午後の死』第16章を「書こうとしていることを作家がよく知っていれば、それを敢えて書かないことで作品により高い効果を付与できる。氷山の動きに威厳があるのは、水面下にあって見えない氷山の八分の七があるからだ」という文章で結んでいる（DIA 192）。
- (4) ボクサー認知症とも言い、CTEは、繰り返す頭部外傷または爆発負傷に続発する進行性の脳変性疾患である。ボクサー認知症は1920年代に同定され、より新しい用語である慢性外傷性脳症はこれと同じ疾患であると考えられている。慢性外傷性脳症については広く研究が行われてきた。この疾患は、頭部外傷を繰り返

したアスリート（大学のアメリカン・フットボール選手など）の引退後や、爆発による閉鎖性頭部外傷のために脳損傷を負った兵士にみられることがある。繰り返し頭部外傷を起こした人の中でも、なぜ一部の人だけが慢性外傷性脳症を発症するのか、また様々な頭部外傷を経験した後にこの疾患を発症するリスクとしてどのようなものがあるのか（例、頭部外傷の回数、加わった力の強さ）は、今のところ不明である。脳震盪（一見軽いものも含む）を複数回起こしたアスリートの約3%が、慢性外傷性脳症を発症している。

慢性外傷性脳症の病態生理学的特徴は、過剰にリン酸化されたタウタンパク質の沈着による神経原線維変化であり、これが血管周囲、皮質溝の深部、および軟膜下と脳室周囲領域に最も顕著にみられる。

出典: <https://www.msmanuals.com/ja->

[https://www.msmanuals.com/ja-
jp/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82%B7
%E3%83%A7%E3%83%8A%E3%83%AB/07-%E7%A5%9E%E7%B5%8C%E7%96
%BE%E6%82%A3/%E3%81%9B%E3%82%93%E5%A6%84%E3%81%8A%E3%82
%88%E3%81%B3%E8%AA%8D%E7%9F%A5%E7%97%87/%E6%85%A2%E6%80
%A7%E5%A4%96%E5%82%B7%E6%80%A7%E8%84%B3%E7%97%87-cte-
chronic-traumatic-encephalopathy/2019/07/27](https://www.msmanuals.com/ja-
jp/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82%B7
%E3%83%A7%E3%83%8A%E3%83%AB/07-%E7%A5%9E%E7%B5%8C%E7%96
%BE%E6%82%A3/%E3%81%9B%E3%82%93%E5%A6%84%E3%81%8A%E3%82
%88%E3%81%B3%E8%AA%8D%E7%9F%A5%E7%97%87/%E6%85%A2%E6%80
%A7%E5%A4%96%E5%82%B7%E6%80%A7%E8%84%B3%E7%97%87-cte-
chronic-traumatic-encephalopathy/2019/07/27)

- (5) 体と体が接触する機会が多いスポーツのこと。
- (6) 圧倒的な外傷的出来事の侵入的な想起が反復して生じる病態であり、その想起は1カ月以上続き、出来事から6カ月以内に始まる。本疾患の病態生理は完全には解明されていない。症状としては、外傷的出来事に関連する刺激の回避、悪夢、フラッシュバックなどもある。診断は病歴に基づく。治療は曝露療法および薬物療法から成る。恐ろしい出来事が起こると、多くの人はその影響を長く受けるが、人によっては、その影響があまりに長く持続し、重度であるために、衰弱して疾患に陥る。一般的にPTSDを誘発する可能性の高い出来事は、恐怖感、無力感、または戦慄の感情を引き起こす出来事である。これらの出来事は直接的に経験される場合（例、重篤な損傷もしくは死の脅威として）また

は、間接的に経験される場合（例、他者が重篤な外傷を負う、殺害される、もしくは死の脅威を受けている状況を目撃する；近親者もしくは友人に生じた出来事を知る）がある。戦闘、性的暴行、および自然災害、または人災は PTSD のよくみられる原因である。

出典: [https://www.msdmanuals.com/ja-
jp/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82%B7
%E3%83%A7%E3%83%8A%E3%83%AB/07-%E7%A5%9E%E7%B5%8C%E7%96
%BE%E6%82%A3/%E3%81%9B%E3%82%93%E5%A6%84%E3%81%8A%E3%82
%88%E3%81%B3%E8%AA%8D%E7%9F%A5%E7%97%87/%E6%85%A2%E6%80
%A7%E5%A4%96%E5%82%B7%E6%80%A7%E8%84%B3%E7%97%87-cte-
chronic-traumatic-encephalopathy/2019/07/27](https://www.msdmanuals.com/ja-
jp/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82%B7
%E3%83%A7%E3%83%8A%E3%83%AB/07-%E7%A5%9E%E7%B5%8C%E7%96
%BE%E6%82%A3/%E3%81%9B%E3%82%93%E5%A6%84%E3%81%8A%E3%82
%88%E3%81%B3%E8%AA%8D%E7%9F%A5%E7%97%87/%E6%85%A2%E6%80
%A7%E5%A4%96%E5%82%B7%E6%80%A7%E8%84%B3%E7%97%87-cte-
chronic-traumatic-encephalopathy/2019/07/27)

- (7) 「奇妙な感覚」とは、慢性外傷性脳症・脳震盪後症候群の影響による頭部外傷の後に起こる、作品の中に現れる時間と場所の変容のことを筆者が表現した。
- (8)、(9)、(10) With a folder number, an item in the Hemingway Collection, John F. Kennedy Library.
- (11) 映画・映像などで、物語の進行中に過去の出来事を挿入すること。回想を表現するための技法のこと。または、強いトラウマ体験（心的外傷）を受けた場合に、後になってその記憶が、突然かつ非常に鮮明に思い出されたり、同様に夢に見たりする現象。心的外傷後ストレス障害(PTSD)や急性ストレス障害の特徴的な症状のうちの1つである。
- (12) 硬膜は頭蓋骨のすぐ内側にあり、頭蓋内で脳を覆っている結合織性の強い膜である。この硬膜の内側で脳の表面に出血が起こると、出血した血液が硬膜の直下で脳と硬膜の間に溜り、短時間のうちにゼリー状にかたまって、脳を圧迫する。これが急性硬膜下血腫で（図 1）ほとんどが大腦の表面に発生するが、ごく稀には左右の大腦半球の間や小脳表面（後頭蓋窩）に発生することもある。急性硬膜下血腫は予後不良を示唆する所見として重要である。

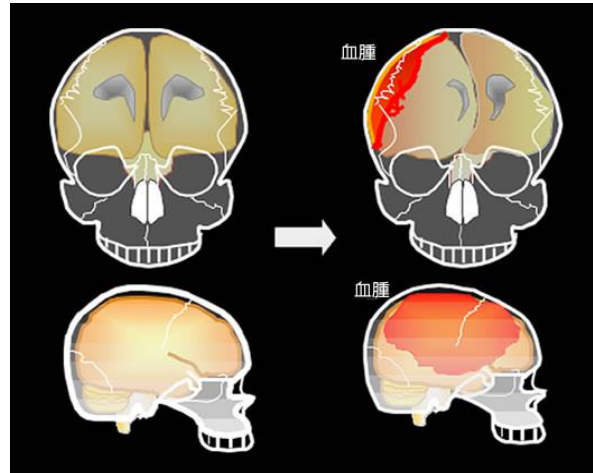


図1 急性硬膜下血腫

出典: <https://square.umin.ac.jp/neuroinf/medical/305.html/2018/10/13>

- (13) 本論の複雑な流れを示す時間の流れの中で、現れる現在形をサインポストとして、回想する時間・内容・場所で割り振るものである。その割り振りを本論では「記憶の塊」と筆者が表現した。
- (14) 最初にボクサーで見出されたことから俗にパンチドランカー（和製英語）と呼ばれており、他にもパンチドランク症候群(punch-drunk syndrome)、拳闘家痴呆(dementia pugilistica; DP)、慢性ボクサー脳症、外傷性ボクサー脳症、慢性ボクシング外傷性脳損傷などの別称がある。しかしこの疾患は、アメリカン・フットボール、アイスホッケー、サッカー、プロレスリング、野球などの接触の多いスポーツ（コンタクトスポーツ）の多くで見られているほか、脳震盪を繰り返した兵士にもみられている。頭部(脳)への衝撃による外傷性脳損傷が発症の起因となる点が、アルツハイマー病やパーキンソン病など他の神経変性疾患と異なっているが、タウタンパク質の過剰なリン酸化によって神経変性が引き起こされるタウオパチーであることは共通しており、死後に脳を解剖することによってしか最終的な診断ができないことから、これらの疾患と混同されることが非常に多い。

出典: <https://www.herbal-organic.com/ja/disease/43739/2021/08/20>

- (15) 患者から採取された検体は通常ヘマトキシリン・エオジン (HE) 染色という方法で赤色 (細胞質) と紫色 (核) に染め分けることで顕微鏡観察を容易にしている。免疫染色とは正式には免疫組織化学とよばれ、HE 染色などでは通常不可視な特定の構造を有するタンパク質の一部である抗原を可視化する技術のこと。この反応は、生体の異物排除機能の一つである抗原・抗体反応を応用することで可能となり、1955 年に蛍光色素を用いた方法で開発され現在では、多くの病理検査室で自動化された機器を用いて染色が行われている。免疫染色は、いまや原発不明癌の原発巣推定や腫瘍の組織亜型分類など病理診断には必須の技術となっている。近年開発される抗がん剤は乳癌に対する HER2 タンパクに代表されるように、腫瘍細胞に特異的に高発現している物質をターゲットにするものが多く、これらの抗原タンパク発現を定量化するために免疫染色が用いられ治療の可否の判断に重要な役割を果たすようになってきている。

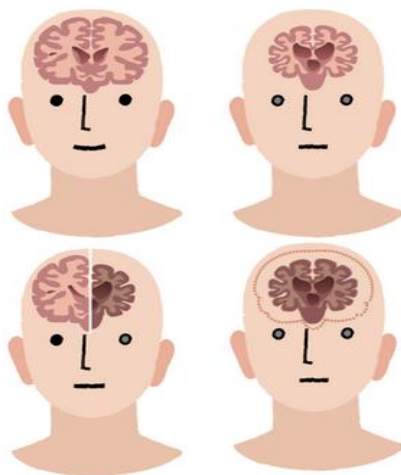
出典:<http://www.kmu.ac.jp/hirakata/hospital/knowledge/knowledge077.html?channel=main/2021/08/20>

- (16) タウ蛋白は神経軸索内に存在する分子量約 5 万の蛋白で、細胞骨格を形成し細胞内の蛋白質の輸送や細胞内小器官輸送機能を有する微小管を構造的に安定化させる。脳内にもっとも多く存在することから、神経変性疾患では、脳脊髄液中に多量に放出される。また、リン酸化酵素によりタウ蛋白が過剰にリン酸化されると微小管結合能を失い、遊離したタウ蛋白同士がお互いに結合し、不溶性の凝集体を形成する。この凝集体がアルツハイマー型認知症に特徴的な神経原線維変化の原因物質とされ、同認知症患者の脳脊髄液中にはリン酸化タウ蛋白が過剰に存在することから、アルツハイマー型認知症の診断マーカーとして利用されている。

出典: <https://www.okayama-u.ac.jp/user/kensa/kensa/protein/tau.htm/2021/08/20>

- (17) アミロイド β は、アルツハイマー型認知症に見られる老人斑の大部分を構成しているたんぱく質で、健康な人の脳にも存在し、通常は脳内のゴミとして短期間で分解され排出される。しかし、正常なアミロイド β よりも大きな異常なた

んばく質ができてしまうと、排出されずに蓄積してしまう。実は認知症を発症する 20 年も前から脳に溜まり始めていると言われている。蓄積したアミロイド β は、脳細胞を死滅させると考えられている。記憶の主体である脳細胞が死滅すれば物忘れが起こると考えれば、イメージしやすい。また、アミロイド β は血管の壁に沈着することもあり、脳出血の原因となることもある。かつてはアミロイド β の蓄積を確認するには、死後の脳組織を顕微鏡で観察するしかなかった。しかし、今ではアミロイド PET (アミロイドイメージング) という検査により、画像診断で生きている人の脳内のアミロイド β の蓄積量が分かるようになった。

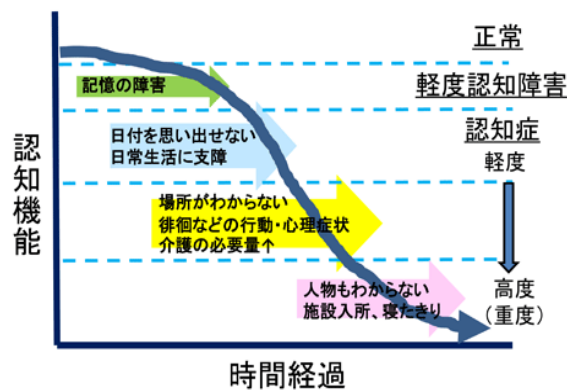


出典: <https://info.ninchisho.net/mci/k130/2021/08/20>

- (18) ドイツのアルツハイマー博士は 50 歳台の認知症の患者を詳しく診て、それを 1906 年に発表した。その病気が後にアルツハイマー病とよばれるようになった。脳の中の海馬とよばれる場所は記憶の中核として知られている。アルツハイマー病では、脳の萎縮 (小さくなること) がこの海馬のあたりから始まって広がっていく。そのため、症状は記憶の障害 (もの忘れ) から始まり、徐々に認知機能全体が低下してくる (図 2)。最初は、もの忘れ (「少し前のことが思い出せない」) が目立つものの日常生活にはほぼ支障がない (アルツハイマー病による軽度認知障害)。次第に生活にも支障がでてきて認知症となり (アルツハイマー病による認知症あるいはアルツハイマー型認知症)、認知症は軽度、中等度、

高度と徐々に進んでいく（図2）。軽度の認知症ではもの忘れに加えて日付がわからなくなり、中等度になると自分のいる場所がわからなくなる。妄想や徘徊などの症状が問題になることもある。さらに高度（重度）になると家族など親しい人の顔もわからなくなり、最終的には寝たきりになる。アルツハイマー病では、脳にアミロイドβ蛋白というタンパク質がたまり、さらにタウというタンパク質がたまって、神経細胞が減少し脳が萎縮していく。アルツハイマー病の診断では、病気の経過や症状の特徴が重要である。補助検査として脳の画像 [MRI, CT, SPECT（スペクト）, PET（ペット）] や脳脊髄液などの検査を行うことで、高い確実度でアルツハイマー病を診断することが可能である。

図2. アルツハイマー病の進行



山田正仁(金沢大学)・図

出典: <https://www.neurology-jp.org/public/disease/alzheimer.html/2021/08/20>

- (19) ニューロン (neuron) とは、生物の脳を構成する神経細胞のことである。この神経細胞は、図 2.1 のような構造になっており、核が存在する細胞体、ニューロンの入力である樹状突起、出力部分であるシナプス、伝送路に当たる軸索がある。人間の脳の場合にはこの細胞が 100 億から 1000 億程度あるといわれている。

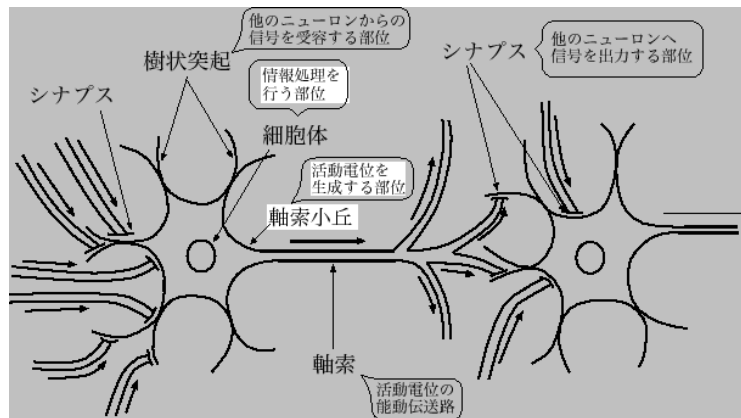


図 2.1: 神経細胞の構造

出典: <http://www.gifu-nct.ac.jp/elec/deguchi/sotsuron/makino/node4.html/2021/08/20>

- (20) 意識の消失を生ずるほど重い頭部外傷に引き続いて、さまざまな精神および身体的な症状が現れる。例えば、頭痛、めまい、疲労感、音や光への過敏性、集中と課題遂行の困難、記憶障害、不眠、ストレスや情緒的興奮、あるいはアルコールに対する耐性の低下などである。これらの症状によって自尊心が喪失することがある。また、症状が永遠に続くのでは、といった恐怖心から、抑うつと不安感が生じることもある。そうした感情がますます症状を悪化させ、悪循環になる人もいる。患者によっては「自分は大変な病気だ」と思い込み、たびたび診断と治療を求めるようになる。また、脳震盪を含む頭部外傷全般でいえば、症状を 2 つに大別することができる。一つは「認知障害」である。主に、情報処理速度の低下、注意力の欠損、ものごとを記憶したり、新しい情報を学習したりすることに関する問題、加えて言語能力の低下などが見られる。もう一つは、「行動に関する続発症」である。抑うつ、衝動性や攻撃性の亢進、人格変化などがあげられる。これらの症状は、お酒を飲むことによって悪化する場合がある。軽症頭部外傷は救急外来を受診する頭部外傷のなかで最も多い。近年、スポーツ選手や軍事活動に従事する兵士のように、軽症頭部外傷を繰り返し受傷した人たちが、受傷から数年後に慢性的な認知機能障害や抑うつ状態を呈することが報告され、繰り返される軽症頭部外傷に関連する慢性外傷性脳症 (chronic traumatic encephalopathy: CTE) が注目されている。軽症頭部外傷の患

者の多くは比較的若年者であり社会的な影響が大きいため、海外ではその病態の解明や診断、治療法の研究が盛んにおこなわれている。軽症頭部外傷のうち受傷直後から頭痛、めまい、嘔気、意識消失などの一過性の症状を呈し、画像上明らかな異常を認めないものを脳振盪と呼ぶ。脳振盪は明確な診断基準がないため、アセスメントツールを用いて症状の経過をフォローして診断を試みる。脳振盪を含む軽症頭部外傷に関連する病態として CTE の他、急性期に発生するセカンドインパクトシンドローム (second impact syndrome: SIS)、急性期から引き続き起こる脳振盪後症候群 (post-concussion syndrome: PCS) がある。これらの病態は軽症頭部外傷を繰り返すことによって発生するリスクが高くなるといわれているが、そのメカニズムは明確ではない。現在のところ、軽症頭部外傷を受傷した患者に対しては再度頭部に衝撃を与えないように安静を保つことが重要である。スポーツでは、プレー中に受傷した選手は直ちにプレーを中止させる。またプレーへの復帰は段階的に行い、症状の変化を経時的に観察し、重症化の徴候を見逃さないように注意する。治療は対症療法が中心で、重症化、慢性化の予防に対する薬物療法などの有用な治療法はない。

出典: https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjaam/25/5/25_191/_pdf/2021/08/22

(21) 症状が急激に現れる時期のこと。

出典: <https://www.kango-roo.com/word/3685>

References

- Adair, William. "Landscapes of the Mind: 'Big Two-Hearted River'" *College Literature* Vol.4, No. 2 (Spring. 1977), 144-151.
- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer as Artist*. Princeton: Princeton UP, 1980.
- . *Ernest Hemingway: A Life Story*. NY: Scribner's, 1969.
- Brooks, Cleanth & Robert Penn Warren. *Understanding Fiction*. Second Edition. New York: Meredith, 1959.
- Brucoli, Mathew J. *The Only Thing that Counts: The Ernest Hemingway - Maxwell Perkins Correspondence*. Columbia: U of South Carolina P, 1996.
- Bundy F. James, *Fall from Grace: Religion and the Communal Ideal in Two Suburban Villages, 1870-1917*. Brooklyn, N.Y.: Carlson Publishing Inc. 1991. 90.
- Buske, Morris. "Hemingway Faces God." *The Hemingway Review* 22.1 (Fall 2002): 72-87.
- Capa, Robert. *Slightly Out of Focus*. Pickle Partners Publishing: 2015.
- Clark, Miriam Marty. "Hemingway's Early Illness Narratives and the Lyric Dimensions of 'Now I Lay Me'": *NARRATIVE*, Vol. 12, No.2 (May 2004), The Ohio State University. 167-177.
- Dearborn, Mary V. *Ernest Hemingway: A Biography*. New York: Alfred Knopf, 2017.
- Farah, Andrew. *Hemingway's brain*. Columbia, University of South Caroline, 2017.
- Flora, Joseph M. *Ernest Hemingway: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne, 1989.
- . *The letters of Ernest Hemingway: Volume 3 (1926-1929)*. Eds. Rena Sanderson, Sandra Spanier, and Robert W. Trogdon. New York: Cambridge UP, 2015.

- Ford, Paul Leicester. "The New-England Primer" New York: Printed for Dodd, Mead and Co., 1897. <<https://archive.org/details/newenglandprimer00ford>>. Web. 21 Aug. 2016.
- Grimes, Larry E. "Hemingway's Religious Odyssey: The Oak Park Years." *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Ed. James Nagel. Tuscaloosa: U of Alabama. P, 1996. 37-58.
- Hagopian, John V. "Symmetry in 'Cat in the Rain.'" *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. J. Benson. Durham: Duke UP, 1975. 230-32.
- Hemingway, Ernest. *Across the River and Into the Trees*. 1950. New York: Scribner's, 1996.
- . *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Scribner's, 1987.
- . *Death in the Afternoon*. 1932. New York: Scribner's, 2003.
- . *Ernest Hemingway On Writing*. Ed. Larry W. Phillips. New York: Charles Scribner's Sons, 1984.
- . *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner's, 1969.
- . *The Fifth Column and Four Unpublished Stories of the Spanish Civil War*. 1938. New York: Scribner's, 1969.
- . *For Whom the Bell Tolls*. 1940. New York: Scribner's, 1968.
- . *The Garden of Eden*. New York: Scribner's, 1986.
- . *Green Hills of Africa*. 1935. London: Jonathan Cape, 1965.
- . *In our Times*. 1925. New York: Scribner's, 2003.
- . *Men Without Women*. 1927. New York: Scribner's, 2004.
- . *The Nick Adams Stories*. Ed. Philip Young. New York: Charles Scribner's Sons, 1972.
- . *Selected Letters. 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981.
- . *The Sun Also Rises*. 1927. London: Arrow Books, 1994.
- . *To Have and Have Not*. 1937. New York: Scriber's, 1970.

- Hemingway, Gregory H. *Papa: A Personal Memoir*. Boston: Houghton, 1976.
- Hannum, Howard L. "Nick Adams and the Search for Light." *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*: Ed. Benson, Jackson J. Durham and London: Duke UP, 1990.
- . *Men without Women*. New York: Scribner's, 1997.
- Hovey, Richard B. "Hemingway's 'Now I Lay Me': A Psychological Interpretation," *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. Jackson J. Benson. Duke UP, 1975. Japanese Ophthalmological Society.
http://www.nichigan.or.jp/public/disease/hoka_amblyopia.jsp. Accessed, 16 Dec. 2018.
- Kawin, Bruce F. *Telling it Again and Again: Repetition in Literature and Film*. Colorado: UP of Colorado, 1989.
- Knodt, Ellen Andrews. "Toward a Better Understanding of Nicholas Adams in Hemingway's 'A Way You'll Never Be'" *The Hemingway Review* 35.2 (Spring 2016): 70-86.
- Laskas, Jeanne Marie. *Concussion*. UK: Viking, 2016.
- Lewis, Robert W. "Long Time Ago Good, Now No Good.": Hemingway's Indian Stories. *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*: Ed. Benson, Jackson J. Durham and London: Duke UP, 1990.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. London: Vintage, 2011.
- . "Analysis and Interpretation of the Realist Text: Ernest Hemingway's 'Cat in the Rain.'" *Poetic Today* 1.3 (1980): 56-85.
- Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. New York: Simon and Schuster, 1987.
- MacDonald, Scott. "Implications of Narrative Perspective in Hemingway's 'Now I Lay me'" *Studies in American Fiction*: Johns Hopkins UP. (Volume, 1. Number 2. Autumn

1973):213-220

Martine, James J. "A Little Light on Hemingway's 'The Light of the World.'" *Studies in Short Fiction* 7 (Summer 1970): 465-67.

Mellow, James R. *Hemingway: A Life Without Consequences*. Boston: Houghton Mifflin, 1992.

Meyers, Jeffrey. *Hemingway: An Admirable Biography*. London: Macmillan London Ltd, 1986.

Moddelmog, Debra A. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Ithaca: Cornell, 1999.

Neuro info Japan. <https://square.umin.ac.jp/neuroinf/medical/305.html>. Accessed, 16 Dec. 2018.

Oliver, Charles M. *Ernest Hemingway A to Z*. New York: Facts On File, Inc., 1999.

Omalu, Bennet. *Neurosurgery*, Volume 57, 2005. 128–134.

Phelan, James. "'Now I Lay Me': Nick's Strange Monologue, Hemingway's Powerful Lyric, and the Reader's Disconcerting Experience." *New Essays on Hemingway's Short Fiction*. Ed. Paul Smith. Cambridge, Cambridge UP, 1998. 47-72.

Reynolds, Michael. *Hemingway: An Annotated Chronology*. Detroit: Omnigraphics, Inc., 1991.

———. *Hemingway: The 1903s*. NY: Norton, 1997.

———. *Hemingway: The Final Years*. NY: Norton, 1999.

———. *Hemingway: The Homecoming*. NY: Norton, 1999.

———. *Hemingway: The Paris Years*. NY: Norton, 1999.

———. *The Young Hemingway*. NY: Norton, 1998.

Ross, Lillian. *Portrait of Hemingway*. New York: Simon & Schuster, 1961.

Sanford, Marcelline Hemingway. *At the Hemingways: With Fifty Years of Correspondence between as Ernest and Marcelline Hemingway*. Moscow: U of Idaho P, 1999.

Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K. Hall, 1989.

———. “The Tenth Indian and the Thing Left Out.” *Ernest Hemingway: The Writer In Context*. Ed. James Nagel. Madison: Wisconsin UP, 1984.

Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Lincoln: U of Nebraska P, 1990.

Stern, Robert. *Written Testimony of Dr. Robert Stern*. Boston Univ., 2017.

Tilton, Margaret A. “Garnering an Opinion: A Double Look at Nick's Surrogate Mother and Her Relationship to Dr. Adams in Hemingway's ‘Ten Little Indians.’” *The Hemingway Review* 20.1(Fall 2000): 79-89.

Vargas Llosa, Mario. *Cartas a un Joven Novelista*. Madrid: Santillana Ediciones Generales, S. L. 2011.

Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park and London: Pennsylvania State UP, 1966.

日本語文献

浅若裕彦 『『雨の中の猫』の中の三毛猫』『大谷学報』87 卷 2 号（大谷大学、2008 年）18-29 頁。

今村楯夫 『ヘミングウェイと猫と女たち』（新潮社、1990 年）。

———. 『ヘミングウェイの言葉』（新潮新書、2005 年）。

———. 『ヘミングウェイ』（勉誠出版、2005）。

———. 『ヘミングウェイ大事典』（勉誠出版、2011 年）。

大沼雅彦 『『雨のなかのネコ』の文法的一面』『日本語学』6 卷 11 号（明治書院、1987 年）83-92 頁。

——. 「『雨のなかのネコ』の文法再論」『研究年報』34号（奈良女子大学、1990年）48-66頁。

可世木久幸監修『STEP産婦人科②産科』（海馬書房、2004年）。

カルロス・ベーカー『アーネスト・ヘミングウェイ（I）（II）』大橋健三郎、寺門泰彦監訳（新潮社、1974年）。

日下洋右『ヘミングウェイ愛と女性の世界』（彩流社、1994）。

坂田雅和「“Cat in the Rain”に潜む不安定さとそれが内包するもの」、『佛教大学大学院紀要、文学研究科編』第43号（佛教大学大学院、2015年）109-117頁。

——. 「ヘミングウェイ作品の“Now I Lay Me”における作家としてのニック・アダムズ—ニックの眠りとトラウマ—」（『融合文化研究』第24号、国際融合文化学会、2017年）36-45頁。

島村法夫『世界の文学 ヘミングウェイ—人と文学』（勉誠出版、2005）。

——. 「ヘミングウェイと戦傷という病—精神的な外傷と癒しのメカニズム」（『ヘミングウェイを横断する：テキストの変貌』日本ヘミングウェイ協会編、本の友社、1999年）55-70頁。

杉本香織『ヘミングウェイの死後出版作品研究：編纂方法とその問題点』（早稲田大学、2010）。

荘司菊雄『においのはなし——アロマセラピー・精油・健康を科学する』（技報堂、2001）。

スカード・ジグムンド「ノルウェーにおけるヘミングウェイ」、『ヘミングウェイ研究：ヨーロッパにおけるヘミングウェイ』ロジェ・アセリノー編、阿部史郎、阿部幸子訳（恒星社厚生閣、1971）110-131頁。

高橋保行『ギリシャ正教』（講談社学術文庫、1980年）。

高野泰志『引き裂かれた身体—ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』（松籟社、2008）。

——『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』（松籟社、2015）。

千葉義也「ヘミングウェイの作品が語るオジブウェイ・インディアンたちの暮らし：

アメリカ文化を垣間見ながら」、『アーネスト・ヘミングウェイ：21世紀から読む作家の地平』、日本ヘミングウェイ協会編（臨川書店、2011年）139-56頁。

デブラ・モデルモグ『欲望を読む—作者性、セクシュアリティ、そしてヘミングウ

エイ』島村法夫、小笠原亜衣訳（松柏社、2003年）。

新関芳生「ヘミングウェイ年譜—病気・怪我とテキスト」『ユリイカ』（青年社、

1999年8月）214-23頁。

中村正生「The Nick Adams Stories について—“Three Shots”を中心に—」、『長崎大

学教養部紀要、人文科学篇』第21号（長崎大学、1980）47-57頁

長江美代子、土田幸子「総説 精神障がいの親と暮らす子どもの日常生活と成長発達

への影響」『日本赤十字豊田看護大学紀要』8巻1号（日本赤十字豊田看護大学、2013年）83-96頁。

長尾晋宏「大きな二つの心臓のある川」再読--「黒いバッタ」と「茶色いバッタ」（『ヘ

ミングウェイ研究』第12号、日本ヘミングウェイ協会、2011年）47-57頁。

西尾巖『ヘミングウェイ小説の構図』（研究者出版、1992）。

日本眼科学会 <https://www.gankaikai.or.jp/health/39/04.html/> Accessed, 18 Aug. 2021.

日本脳神経学会 <https://square.umin.ac.jp/neuroinf/medical/305.html/> Accessed, 18

Aug. 2021.

野依昭子「ヘミングウェイの『十人のインディアン』についての一考察」、『英文学点

描』（書肆季節社、1991）85-100頁。

古樋直己「“Cat in the Rain”に隠されたもう一つのアイロニー」『津山工業高等専門学校紀要、45』（津山工業高等専門学校、2004年）91-95頁。

プラツ・マリオ「イタリアにおけるヘミングウェイ」、『ヘミングウェイ研究：ヨーロッパにおけるヘミングウェイ』ロジェ・アセリノー編、阿部史郎、阿部幸子訳（恒星社厚生閣、1971）77-109頁。

前田一平「「三発の銃声」に隠された不安の源—「あいのこ」と「銀のひも」」『ヘミングウェイの時代—短編小説を読む』日下洋右編（彩流社、1999）45-75頁。

宮内崇、他『軽症頭部外傷に関連する病態と対応』、日救急医学会誌、2014、191-200頁。

武藤脩二「“Now I Lay Me”過去のre(-)collectionの物語」、『英語青年』、（研究社、1999年）第145巻、第5号、297頁。

———. 『印象と効果—アメリカ文学の水脈』（南雲堂、2000年）。

李啓充「続アメリカ医療の光と影第261回米スポーツ界を震撼させる変性脳疾患(1)『週刊医学界新聞』第3060号、医学書院、2014年」（http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03060_04. Accessed, 10 Jan. 2020）。